324
327

始

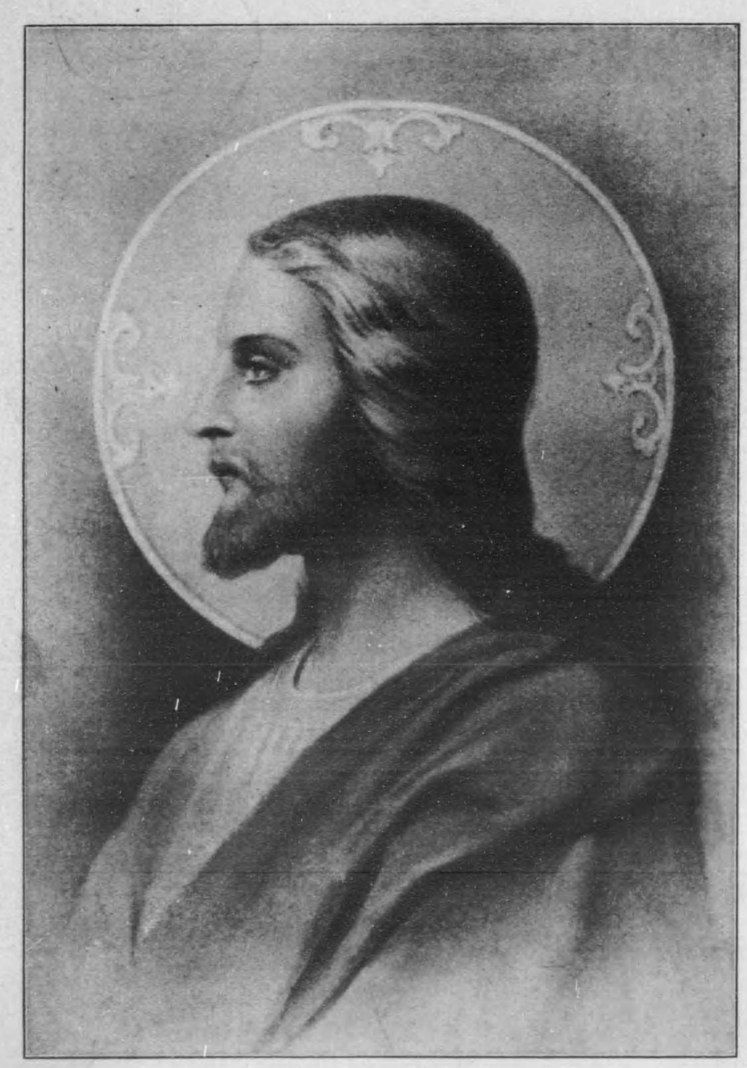
前田越嶺著

基督傳

東京

博文館藏版

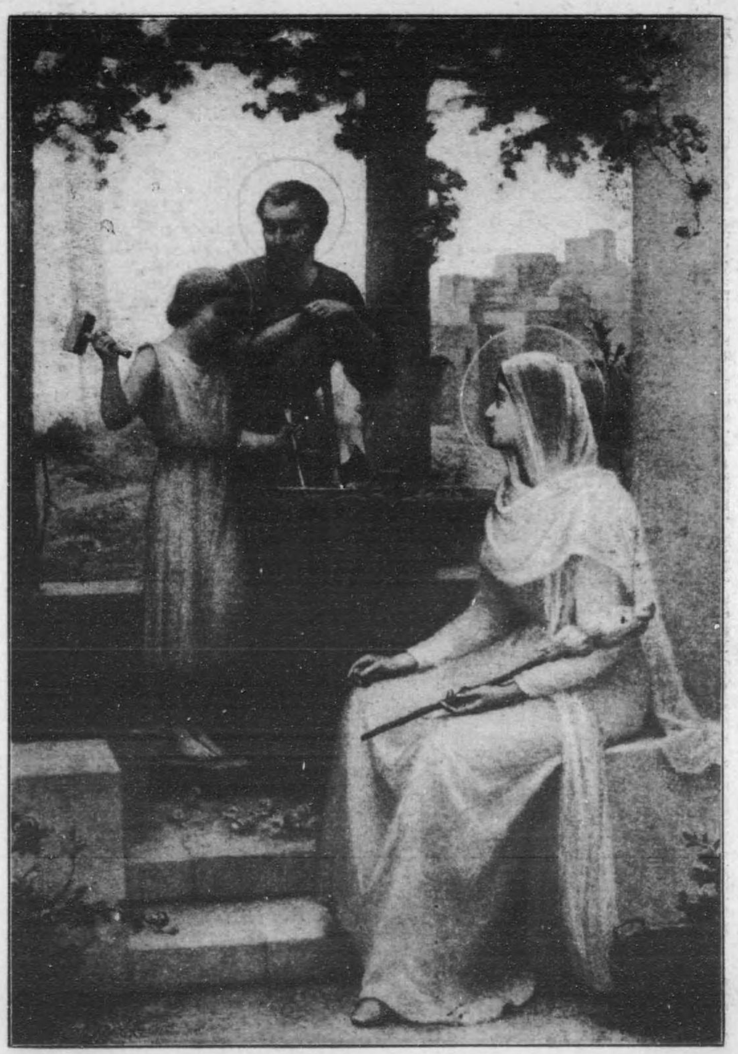
大正
1.12.19.
内交



キリスト

キリスト　マリア　ヨアンネス洗者

キリスト　マリア



ナザレトの聖族

キリスト　マリア　ヨセフ

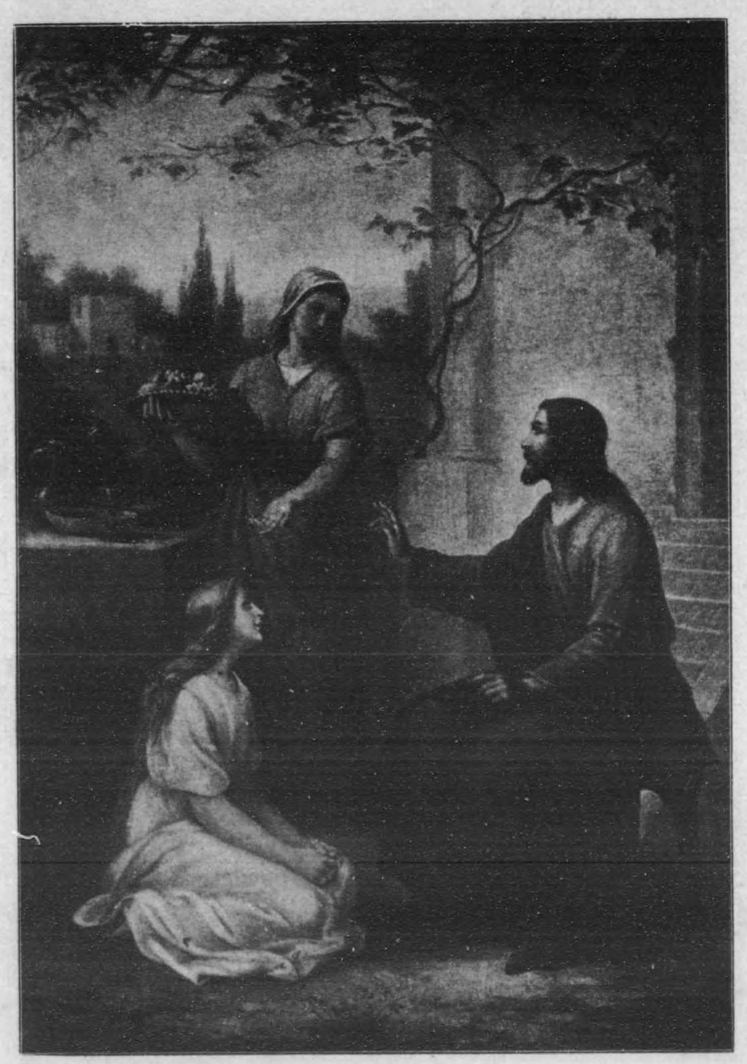
〈受を禮洗りよスネンアヨ者洗トスリキ〉

アリマ

ヨセフ

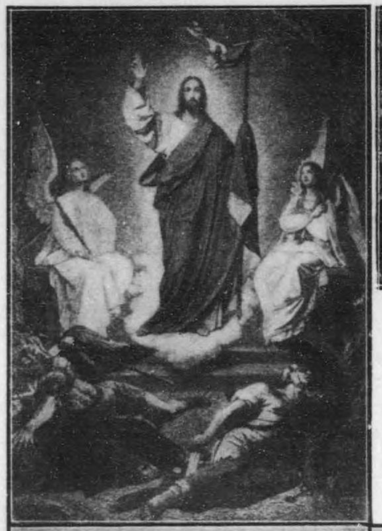
キリストとヨアネス（使徒）

マリアのエリザベット訪問



キリスト　マルタ及マリアに道を説く

キリストの復活



キリスト三人の門徒を携へ橄欖山に到りて天父に祈る

マリアとヨアンネス（使徒）

キリスト刑場に赴く

序

世には偉人と稱せらるゝ者古來其人に乏しからず、然れども蓋世の偉人より偉人と稱せられ、神とまで叫ばれたる者は他に其類を見ず、吾人は獨り基督に於てのみ之を見る、ナポレオン一世は兎に角偉人なり、蓋世の偉人と稱するも、誰か異議を挾む者あらんや、ナポレオン自らも己を古來の英雄アレキサンデル、セザール等に比して遜色なきを公言、憚らざりき、曰く、アレキサンデル何者ぞ、セザール何者ぞ、彼も人なり、我も人なり、彼れの行ひたる所、我之を行ひ得ざる筈なし、有體に言へば、我はアレキサンデルよりも、セザールよりも偉大なりと自信す、若し彼等を引き來らば、我は之を我面前に跪伏せしむべし、然れども彼の基督の名を聞くに至りては、我は

肅然襟を正うし、遂に其の面前に跪座拜伏せざるを得ずとて、尙彼のソクラテス、孔子及びマホメット等を基督に比して、彼等の遠く之に及ばざるを論じ、基督の人格及び其の偉業等を檢覈したる上、最後の斷案を下して曰く、世に我を跪かしむる者は獨り基督のみ、故に基督は偉人を超絶すとて、遂に基督は神なりと極言せり。

吾人は曲學阿世の徒より偉人と稱せらるゝ偉人を多く聞見せり、利害の觀念に司配せらるゝ學者より神とまで崇めらるゝ所謂世の偉人をも聞見せり、然れども古今東西の偉人を睥睨して、自ら空前絶後の偉人を以て任ずる者より、偉人に超絶せる神なりと絶叫せられたる者は、廣き世界に於て獨り基督あるを知る、ア、基督は果して此の如き者なるか？そも彼は果して何者ぞ？

之を一面より觀れば、基督の經歷ほどツマラヌものはなし、大工を父とし、賤家の乙女を母となし、厩に生れて、三十年間大工の職業を營み、かつて學校に通ひたることもなく、又師に就て學びたることもなし、年三十にして初めて公然世に出で、天の道を說て十二人の漁夫を弟子となし、魚を漁る代りに人を漁る術を敎へ、自國の古老先輩より憎まれて、法に問はれ、遂に當時奴隷の刑罰として非常にいやしめられたる磔刑に處せられて、あはれ果敢なき最期を遂げたる者、すなはち是れ基督なり。

蓋世の英雄ナポレオンとも云はるべきものが、人もあらうに厩に生れて磔柱の上に死したる者を偉人と絶叫し、神と極言せるこそ奇怪なれ、然れども仔細に之を考究すれば、ナポレオンのナポレオンたる所以は、正さしく此の偉人觀に於て最も明に顯はるゝなり、夫れ基督は今日に至るまで毀譽褒貶の焦點となれり、愚俗の耶蘇

耶蘇と嘲笑しつゝあるは、姑く之を問はず、迷信の徒の吾主々々と崇め奉りつゝあるも、亦、今は之を論せず、世の學者を以て任ずる者の中にも、之を抹殺せんと務むる者今尚其跡を絶たざるこそ不思議なれ、基督當時の學者は之を磔に懸けて殺したるに、後代の學者の中には、尚これにも飽きたらずと見え、筆舌を以て之を抹殺せんと企つ、然れども又他の一方には世の名僧知識と稱せらるゝ者は、口を極めて之を激賞し、先天的に之を神と看做せり、前者は憎怨の念に驅られ、後者は利害の觀念に司配せられ、共に正鵠を逸し易し、此際吾人の聞かんと欲するものは、彼のナポレオンの如き英漢が、全然利害の觀念を脱却し、何等の遠慮する所もなく、縱横無盡に論議し得る智能權勢のある基督論なりとせしに、幸にも著者はナポレオンが無二の忠臣ベルトラン將軍と共に、絶海の孤島に於て基督の性行事蹟を論議したる愉絶快絶なる一大長文を得、之を讀みて大に得る所ありたるが故に、先づ之を其儘直譯して本書の卷頭に掲げ、著者の私淑する基督論は、之を卷末に載せ、基督の傳記に關する部分は、聖書聖傳及び古來之に關する幾多の史書に參照して、成るべく有りの儘之を筆錄し、以て基督の眞相を究むると同時に、基督は果して偉人なるか、又神なるかを世の識者に問はむと欲す。著者は基督の他の一面を觀察して、ナポレオンと共に大に感驚する所のものあり、彼れ基督は學校に通學したるともなく、學者に師事したるともなしと云へど、極めて高尚深遠なる教理と道義とを說けり、彼は既に生れたりと云はるゝにも拘らず、其の誕生は世界に一新紀元を劃して、舊新世界をして己の降生より曆年を算せしむ、彼は奴隷の刑具なる十字架に懸られたるに、彼れの之に懸られ

たるが爲に、貴人は之を身の裝飾品となして珍重し、王侯は之を冠冕の飾として頭上に載けり、彼れの父は大工なりしに、今は大聖ヨセフとして世界萬民の崇敬を受け、彼れの母は賤か伏家の乙女なりしに、今は聖母として東西に隱れなし、世の英雄豪傑の事業は其人死すると共に多く湮滅するを常とするに、彼れの事業のみは死後に始まりて、歳と共に進歩發展す、アレキサンデル、セザ督ル、近くはナポレオンの天下は今安くにか之を求むべき、然るに基督の天下は法統連綿として一千九百十二年の今日に至るまで依然繼續す、若夫れ彼れの之を建設したる方法に至りては、尙ほ更に感驚すべきものあり、世の英雄は劍を執り、人を殺して之を建設するに、彼のみは一兵に衂ぬらず、却て自ら人に殺されて之を建設せり、ソクラテス、プラトーンの道は遠く希臘を出でず、釋迦、孔子、マホメットの教は世界の一部分に傳播せるに過ぎず、然るに基督の宗教のみは世界萬國に宣傳せられ、特に文明國の宗教として到る處に稱讃せらる、世に殉死者を有する偉人あり、然れども多くは其の殉死者は一國一民の中より出づ、獨り基督の殉死者のみは萬國萬代の人々の中より陸續輩出す、我が日本に於ても二十六人の有名なる殉死者と二百五名の殉死者とを有せり、而して此等の殉死者は孰れも皆聖者として世界に崇敬せらる、惟ふに我が日本人にして世界の文明國民より聖者として崇敬せらるゝ者は、基督の殉死者あるのみ、他の殉死者は日本に於て祀らるゝも、世界に於ては祀られず、アア基督は如何なる力を有する者ぞ、彼先づ殺されて、彼れの門弟十二人も亦皆殺さる、而して其の殺さるゝことが即ち彼れの天下の榮え、事業の盛なる所以なりとは、是れ實に不可思議なる事象にあ

らずや、ア、基督はそれ如何なる者ぞ、彼のナポレオンが偉人を超絶せる神なりと絶叫したる所以、吾是に於て乎之を了す。

著者の基督觀實に此の如し、今や偉人崇拜熱一世を風靡するに當りて、此書を著し、基督を世界の偉人として研究すと雖、著者は中心基督には偉人の語の遠く及ばざるを信ずるものなり、世に若し神なる者ありとせば、著者は基督の外には斷じて神なしと云はむと欲す、聊か記して以て序文に代ふと爾云。

大正元年十一月下浣

著者　前田越嶺識

基督傳目次

(一)偉人の偉人論(ナポレオンの基督論)……一
(二)基督の先驅ヨアンネス洗者……二八
(I)ヨアンネス洗者の傳記……二八
(II)ヨアンネス洗者の品評……四七
(III)ヨアンネンの偉大なる所以……四七
ヨアンネス洗者の敎訓……五八
(三)基督の父ヨセフ……六四
(I)ヨセフの傳記……六四
(II)ヨセフの品評……七〇
(1)ヨセフの偉大なる品位……七〇

(2)ヨセフの偉大なる德行……七五
(3)ヨセフの偉大なる權勢……七八
(四)基督の母マリア……八二
(I)マリの傳記……八二
(1)誕生＝幼時……八二
(2)婚儀＝懷胎……九一
(3)訪問……九九
(II)マリアの考證……一〇八
(III)マリアの品評……一三四
マリアの女人の中に祝せらるゝ所以……一三四
(五)基督……一五五
(I)基督の傳記……一五五

(1)基督の誕生……一五五
(2)基督の割禮……一六六
(3)基督の公現……一七一
(4)基督の參堂……一七八
(5)古老の豫言……一八三
(6)基督の避難……一八九
(7)基督の歸國……一九六
(8)基督の守節……二〇一
(9)基督の受洗……二〇六
(10)基督の斷食……二一五
(11)門弟の選定……二二五
(12)基督の傳道……二三一
(1)基督の傳道振……二三一
(2)基督門弟に傳道法を授く……二三四

(3)基督罪人に交りて道を説く……二三九
(4)基督譬喩を設けて道を説く……二四三
(5)基督義憤を發して聖殿の神聖を示す……二四九
(6)基督ニコデムスに道を授く……二五二
(7)基督サマリア婦人に道を説く……二五八
(8)基督嬰兒によりて教を垂る……二六二
(9)基督傳道の反對者を論駁す……二六七
(10)基督淫婦の改行を赦す……二七三
(11)基督法教師に仁を説く……二七七
(12)基督ラザルスの家に泊し天の道を説く……二八〇
(13)基督遺産を爭ふ兄弟の貪心を戒む……二八一
(14)基督富める青年に施を説く……二八三
(15)基督姦婦に同情を寄す……二八五
(16)基督貧者に慰藉の福音を告ぐ……二八七

(17)基督時人に婚姻の重きを教ふ……二八九
(18)基督傲慢なる者を戒む……二九〇
(19)基督衣食住の道を教ふ……二九一
(20)基督人を恕する道を教ふ……二九二
(21)基督宗教道德の根本を説く……二九四
(22)基督自ら門弟の足を洗ふて實訓を授く……二九七
(23)基督世の末期を説きて時人を警醒す……二九九
(24)基督の説ける世の末期に關する解説……三〇七
(13)山上の垂訓……三三五
(A)眞福八端……三三五
(B)門弟の職責……三三六
(C)信徒の德義……三三六
(D)行德の志向……三三九
(附)主禱文……三三九

(E)對財の心得……三四一
(F)對人の言動……三四二
(G)眞福八端の詳解……三四四
(H)主禱文略解……三七二
(14)基督の奇蹟……三七七
(A)カナの奇蹟……三七八
(B)漁獲の奇蹟……三七八
(C)カファルナオムの奇蹟……三八〇
(D)ナイムの奇蹟……三八四
(E)ベツサイダの奇蹟……三八五
(F)湖上の奇蹟……三八八
(G)山上の奇蹟……三九一
(附)奇蹟論……三九四
(a)偉人の事業と基督の事業……三九四

(b)奇蹟と歴史的事實……三九四
(c)奇蹟の事實と原因……三九七
(d)奇蹟を否定する理由……四〇〇
(e)奇蹟の有り得べき理由……四〇二
(f)宇内は一大奇蹟……四〇三
(g)奇蹟否定論者と世界の輿論……四〇六
(h)宇宙の法則と奇蹟……四〇八
(i)基督と奇蹟……四一三
(j)基督の奇蹟と似而非偉人……四一八
(k)基督の一大奇蹟……四二三
(15)基督の受難……四二六
(A)山中の祈禱……四二六
(B)基督の捕縛……四二八
(C)アンナカイフアスの館邸……四三〇

(附)受難の光景……四三三
(D)ピラト及びヘロデスの館邸……四五七
(E)基督の磔刑……四六五
(16)基督の死去……四七〇
(17)基督の復活……四七四
(18)基督の昇天……四八二
(II)基督の評論……四八四
(1)はしがき……四八四
(2)基督の偉大なる誕生……四八六
(3)基督の偉大なる言論……四九二
(4)基督の偉大なる行動……四九八
(A)基督の物質界に於ける行動……四九九
(B)基督の知識界に於ける行動……五〇二
(C)基督の道徳界に於ける行動……五〇五

(D)基督の社交界に於ける行動……五一三
(E)基督の偉大なる死……五二六

目次畢

基督傳

前田越嶺著

(一)偉人の偉人論(ナポレオンの基督論)

ナポレオンのセント、ヘレナに在るや、談屢々古今の偉人に移り、ハンニバル、アレキサンデル、セザール等の功業遺蹟を盛に論議せしが、己れ自らは遠く這般の偉人に優れりと誇言して憚らざりき、然るに或日基督の偉業に就き、將軍ベルトランと大に議論を戰はしける時、ナポレオンは實に偉人の氣象に相應しき論調を以て、盛に基督の古今獨歩、空前絶後の偉人なることを嘆賞して曰く、『彼れ基督は古來偉人の企つること能はざる大々的偉業を企てたるものにして、而もその大

基督は偉人以上

々的偉業は永く天下後世に傳はり、今日に至るまで世界億兆より神として崇めらるゝ所以を見れば、彼は確に偉人以上なり、實に神に近き偉人なり、否、神の示現なりと言ふも過言にあらず』と。

基督も亦一個の人間

將軍ベルトラン敢て之と論爭して曰く、『陛下の如き偉人が基督を以て神なりと論斷せらるゝは、臣甚だ其意を解するに苦む、無形の神が吾人にひとしき形骸を受けて、人寰に示現すと云ふが如き、世豈此の如き奇怪なる事あらんや、如何にも基督は陛下の論斷せらるゝが如く、知能深遠、心胸濶大、道義高崇なる偉人に相違なし、故に基督を以て大知者なり、大聖者なりと言はせらるれば、臣も亦之を首肯す、大立法者なり、大宗教家なり、非凡絶倫の大偉人なりと言はせらるゝも亦之を首肯す、然れども彼も亦一種の人間のみ、十二人の門徒を選び、之を以て世界に道を布かしめたるまでにして、彼のオルフェー、孔子、ブラマの如き徒のみ、若夫れ基督の事業の世界に成功したる所以は、彼自ら稱して猶太の神と云ひ、荒唐無稽時代の所謂奇蹟を利用し、埃及、希臘の神々を倒して以て之に代りたるが爲のみ、豈他あらんや、要するに基督は幾多偉人の後に出でたる偉人にして、彼が世に神の如く崇拜せらるゝに至りたる所以も亦彼に先てるイシス、オジリス(埃及の陽神陰神)、ジュピテル、ジュノン(希臘の陽神陰神)及び其の他幾多の偉人が傲然高く自ら標置して以て己を神として崇拜せしめたると同一轍に出づるものなり、彼が幾億萬の隨喜渴仰者を有して、全世界を革新したるが如きも、畢竟是れその天才の然らしむる所にして、彼のアレキサンデル、セザール、マホメット及び陸下の如き幾多偉人が劍を以て宇内を征服したるを、彼は才能を以て能く之を征服するを得たる者なり』と。

基督と宗の開祖

ナポレオン之に答て曰く、『吾は能く人を知る、而して基督は人にあらずと斷言す、世の皮想論者は基督を以て一國の創立者、世界の征服者、及び他の宗教の神として祀る所の者と同匹儔の如く看做すと雖、吾が見る所は大に之と異なり、吾は基督を以て此等の偉人傑士に遠く傑出する者とす、前者の遺業と後者の遺業とには雲泥の相違あり、苟も人事に通じ、世故に長けたる者は、誰か吾と見を同うせざる者あらんや、若し批判的精神を以て各國各種の宗教を研究する者あらば、誰か此等各宗の開祖に就て左の如く斷せざる者あらんや、曰く、彼等は神にあらざる

は言ふも愚か、神の使命を受けたる者にもあらず、彼等を稱して天來の人物と云はんより、寧ろ虚僞の宣傳者なりとこそ謂ふ可けれ、遙莫、彼等は確に他の人間と同じ土を以て作られたる人間なり、彼等も亦アダムの子孫のみ、彼等は人生免る可からざる情慾及び罪惡の器なり、彼等の歴史は壓制者の歴史なり、彼等が神にひとしき崇拜を天下の人々に要求したるは、傲然高く自ら標置して虚傲の念より身を至上神に擬せんとしたるが爲にして、僭越も亦太甚し、隨て天下の人々の之に服從したるは、自由の撰より心服したるにあらずして、奴隷の心より屈從したるまでのみ、勿論其中には好奇心に驅られて隨喜したる者もあるべく、理非を究めずして迷信的に歸依したる者もあるべし、彼等が世界に有する崇拜者なるは實に此の如し、世の偶像教に祀らるゝ神祇を仔細に檢覈して之を批判する者は、誰か中心より斯く論斷せざる者あらんや。』

『夫れ眞理を識別するは、天の賜にして、智者の特徴なりと云ふと雖、人として虚僞を見ば、誰か之を排斥せざる者やある、夫れ虚僞は人性に戻り、一見識り易し、試に思へ、眞正の宗教に對しては、異論百出、論難攻撃常に絶ゆる間なけれども、虚僞の宗教に對しては、此の如き論難攻撃を見ざるは何ぞや、他莫し、人皆之を見て直に虚僞の宗教なりと信ずればなり。』

基督のみ哲人君子の崇拜を受く

『希臘の哲人にして誰か彼の偶像教を眞理の宗教と認めたる者やある、ピタゴール、ソクラット、プラトン、アナクサゴール、ペリクレス等の偉人中一人として斯く信じたる者なし。』

『勿論此等の偉人もホメールの大作雄篇に記さるゝ神話を見て以て、其の構想の巧妙豐贍なるを愛でゝ、これを珍重したれども、其の書中に記載する所の假想の人物を見て、誰か之を神として崇拜したるものあらんや、然るにこれに引き換へて福音書に説く所の基督を見るに至りては、世の哲人君子は多く皆之を眞に神として信せり、彼のボッスエ、フェネロンの如きは、自らこれが宣傳者となり、デカルト、ニュトン、ライブニッ、パスカル、コルネーユ、ラシーヌ、シャルマーギュ及びルイ十四世の如きは皆これが隨信者となれり、彼の宇宙の法則より主題を取りて、實際世界の系統的解釋に外ならざりし希臘の神統記が、如何なる學者にも信せらるゝに至らざりしに、獨り基督教の説ける神秘至極の信條が、我國の偉大なる人物より斯

く信奉せられたるは、是れ實に奇しき現象にあらずや、之に反して希臘の神話を最も盛に非議したる者は、希臘の哲學者にあらずして何ぞや。』

『各國初代の人傑及び壓制家、並に帝國の創立者及び歷代の帝王等を神として祀りたるは、皆是れ後世子孫の然らしめたる所たるや言を待たざれば、吾は此種の神を見て、吾と性を同うせる人間と斷言するを辭せず、彼等の知識豈吾が知識と異ならんや、勿論彼等は當代に傑出して、大使命を果したる者なるべきも、吾も亦我が時代に於て彼等の爲せる所を爲せり、彼等にして神ならば、吾も亦神なり、然れども吾は彼等に於て何等神として認む可き所のものを見ず、却て吾は彼等に於て吾と共通の弱點多きを認む、果然彼等も人なり、吾も亦人なり、人として謬想と過失は彼我共通なり、彼等能力ありと云はゞ、吾も亦之を具備す、唯彼れと吾とは之が使用法を異にするのみ、夫れ國狀異なり、境遇異なり、其の目指す所の目的も亦異なれば、曷ぞ之が使用法を異にせざるを得んや。』

彼等にして神ならば吾も亦神なり

『若夫れ基督に至りては大に然らず、彼に於けるものは皆吾が喫驚措く能はざる所なり、彼れの知能は遠く吾が知能に超絕す、彼れの意志は吾之を見て怩忸に堪へず、彼は世に於て何等比すべき者なし、一種特別の實在なり、彼れの思想も、彼れの感情も、彼れの宣傳せる眞理も、彼れの之を承服せしめたる方法も、到底常理を以て律す可からず、尋常人の心理や、事物の性質を當嵌めて以て之を解釋すること能はざるものなり。』

基督のみは遠く吾に超絕す

『彼れの誕生、彼れの性行、彼れの深邃なる定理、彼れの福音、彼れの出現、彼れの敎會及び彼れの天下百世に傳はる遺業等は、凡て皆吾に取りて一種の奇蹟なり、其の奧義は吾得て之を測り知るべからず、玄の玄、衆妙の門なり、其の神秘は固より吾之を否定すること能はざれども、さりとて吾力能く之を解釋すること能はず、是に於て乎吾は彼れの人間にあらざるを見るなり。』

『吾愈よ深く之を研究すれば、愈よ吾力に超絕するを覺ゆ、其道の大なる、吾を壓して、究めんと欲するも得ず。』

基督と科學及び哲學

『基督は今日の所謂科學に何等借る所なし、彼は唯其の性行を世に模範として示したるのみ、彼は又哲學者にもあらず、奇蹟と道とを說きたるに、門弟は初より之を崇拜したり、基督は「メトード」や「ロヂック」の術學的陳列を爲すよりも、寧ろ直に人

の感情に訴へて以て之を承服せしめたる者なり、故に何等の豫備的學問をなすを命せず、又文字の心得をも要求せざりき、宗教は凡て信ずるに在りとせり。』

『實際科學や哲學は救拯に何等の資する所もなきものなり、基督の世に來りたるは、天の機密と精神の法とを示すが爲のみ、是を以て人の心靈にのみ語り、心靈以外の者に對して、何等の爲す所もなく、其の福音の如きも、亦唯心靈の爲にのみ之を齎したるものなり。』

基督と心靈

『基督が心靈を以て足れりとせること、心靈が基督を以て足れりとするが如し、基督の來らざる以前には、心靈は殆ど何等の價値もなく、物質が世界を司配したりしが、基督の來るや、一言以て萬物を其の正秩に復せしめ、科學と哲學の如きは殆と副業の如きものとなり、心靈其の主權を回復せるより、一切の學問的足場は信仰と云ふ一語の下に、宛然廢屋の如く傾倒するに至れり。』

基督は人間界にも宇宙間にも超絶す

『吾れ古今東西の歴史を繙くに、基督に比すべき者をも見ざれば、福音に類するものをも見ず、啻に人間界の歴史のみならず、宇宙間にも亦之が解釋に供し得べきものを認むる能はず、基督に於ては一切萬事皆不可思議なり、愈よ深く之を考究すれば、愈よ人類及び事物の常則に超絶するを見る。』

『彼の無神論者すらも福音の崇高なることは敢て之を否定し得ずして、心ならずも一種の崇敬を之に拂はざるを得ず、蓋し愈よ之を熟讀玩味すれば、愈よその意義の深長なるに驚かざるを得ざればなり。』

福音書は天下一品

『同書には句々皆相關聯して、宛も同一建築物の木材の如き觀あり、而して之を聯結する者は、神の精神にして、其の精神は隨所に隱見出沒す、毎句完全なる意義を有して、全篇の深長なる意を表示す、此書は實に天下一品にして、書中には今迄世に知れざりし道德美と古來人類の思想に遠く超絶せる無限の思想とを認む、此の如き完全無缺の攝理は、神にあらずんば誰か能く之を實現するを得んや、此の理想は一の新機軸を開きて、他に比類を見ず、同書は何人も之を批評するを得ずして、一字一句も之を增減するを得ず、在來の書とは全く別種にして、眞に空前絶後の新書なり。』

神の業と人間の業

『將軍は孔夫子、ゾロアストル、ヌマ、ジュピテル及びマホメット等を擧ぐると雖、彼等と基督とは天地の相違ありて、基督の行ひたるものは孰れも皆神の業なれども、彼

等の行ひたるものは孰れも皆人間の業ならざるはなし、彼等人間の業は彼等の時代にのみ限られて、彼等が存命中之を樹立するを得たる所以は、人間の情慾に投じたるか、武力を用ゐたるか、又は政治的事變を利用したるかに由るなり。』

基督の預言

『基督の事業は之に反して凡て其の死去より始まりたり、是れ豈人間の業ならんや、實に是れ超自然の事業にして、常理を以て律すべからざるものなり、天地間之に比すべき現象なく、眞に不可解の奇蹟と謂はざるべからず、愚なる門徒數輩を有したるのみに過ぎずして、自らは死刑に處せられ、猶太の司祭等の怨府となり、國民の輕侮を招き、同國人よりは非議せられ、遺棄せられたる者なり、蓋し此等は基督が預め之を言明したるものにして、勢ひ此の如く成就せざるを得ざりき。』

其の預言に曰く、『我は捕はるべし、磔刑に處せらるべし、萬民に見捨てらるべし、我が處刑の當初には、我が高弟すらも我を見捨てゝ逃げ去るべし、我は惡人の爲すが儘に任すと雖、我が處刑によりて天譴を果し、原罪を償はゞ、神人の契合茲に復た再び結ばれて、我が死は我が門弟の生命となるべく、彼等は我と偕に在りし時よりも、尙一層勇健剛强となるべし、何となれば我の復活を實地目擊すべければ

基督の事業殉教者によりて扶植せらる

なり、我は天に昇り、天より聖靈を遣はして彼等を敎へしむべし、十字架の精神は彼等に我が福音を意識せしめ、彼等は遂に之を信じ、之を宣して以て、世界萬民に之を傳播すべし。』

『此の預言は一見狂愚なるが如くなれば、使徒ポールは之を稱して十字架の愚と云ひたり、知言と謂ふ可し、磔刑に處せられたる者の道を天下に宣傳することは、如何にも狂愚の沙汰の如くなれども、此の狂愚が文字通り成就せられたるこそ不思議なれ、若夫れその成就せられたる方法に至りては、預言其物よりも尙一層不思議と謂はざるべからず。』

『尙より其茲に到りたるは、一朝一夕の故にあらず、前後三百年間使徒の開始し、相續者の繼續したる一大敎戰の爲、殉敎者の流血川を成し、伏屍山を築きたる結果なりとす、使徒の首領サン、ピエールを始め、之に繼で敎皇の位に即きたる司敎三十二名に至る迄は、孰れも皆サン、ピエールの如く殉敎したり、是を以て前後三百年間羅馬敎皇の座は一種の斷頭臺にして、同座に即きたる者は必ず死すべき者と決定したり、此の三百年間幸にして死を免れたる者なきにしもあらざれども、

十字架の旗幟

そは甚だ僅少なりき、此の戰爭中一方に於ては世の帝王は有らゆる世上の力を擧げて戰ひたれども、他の一方に於て何等軍隊の設けもなく、唯一種不可思議なる精力と、地球上各所に散在せる敎民が再集信號として十字架の下に於ける共通的信仰とを有したるに過ぎざりき。』

『十字架とは何ぞそれ奇怪の旗幟ぞ、基督の刑具なりしが、其の門弟は之を揭げて堂々として世に出でゝ、世界到る處に之を樹立し、動かすべからざる確信を抱て、萬民に言明して曰く、基督は一切人類の救濟の爲に死せりと、而して此の言直に激戰を生み、十字架の旗幟の下に陰雲慘憺、悲風蕭條の光景を呈せしむ。』

『兩軍殊死して戰ひ、忽ち玆に修羅場を現出するに至りしが、而も兩軍大に其の心情を異にし、敵は憤怨、憎惡、壓制、暴逆を極めたれども、我は慈悲、忍辱、無限の愛と克己の力を以て之に對峙せり、三百年の久しき、思想と暴行、良心と專制、心靈と肉體、德行と罪惡との激戰なりしが、基督敎徒の血は川を成し、屍は山を築きしも道理なり、彼等は殺す者の手に接吻して死したればなり、彼等の形體は敵の爲すがまゝに委せられたれども、彼等の心は斷乎として抗爭し、正義を把持して一歩も讓らざりき、到る處倒るゝ者は基督敎徒なりしが、勝利を占むる者もまた彼等(基督敎徒)なりき。』

眞理は最後の勝利者

セザール、アレキサンドルの事業

『將軍はセザール、アレキサンドルに就て語り、其の征服、其の智略、其の操縱、其の勝利、其の軍律の効、其の名將の才等を盛に稱揚すれども、然し乍らセザールの天下は果して幾年繼續したるか？、アレキサンデルに對する士卒の心服は果して幾年間持續するを得たるか？彼等は槿花一朝の榮を極めたるに過ぎず、彼等の天下は三日天下なり、彼等は統率せる間一時士卒の心服を買ひたるのみ、設令彼等の王國は彼等の存命中繼續したりとするも、此は偶然の結果のみ、偶々運の强かりし爲にして、戰略圖に中り、戰爭幸に勝を制したるに因るなり、其の代り一朝運命の彼等を去るや、彼等の天下も亦亡びぬ、惜問す、アレキサンデル及びセザールの武運は墳墓以外に傳りたるや。』

『然るに基督は大に之と異なり、死して後其の己に忠誠なる軍隊を以て世界に勝利を制したり、是れ豈不可解ならずや、亡靈が無給の兵士を作りて、此世には何等恩賞の希望をも與へざりしに拘らず、之に堅忍の敎を鼓吹して、世の有らゆる苦

基督の事業

楚艱難を忍ばしめたるの事實は、如何にして之れを解釋するを得べきや？嗚呼チュレンヌ（佛國の武將）の屍尙未だ冷かならざるに、其の軍隊はモンテククルリに對して早や既に陣を撤したるにあらずや、之を吾に見るに、吾が軍隊も亦吾が存命中早くも吾を忘却して、宛も彼のカルタゴの軍隊が英雄ハンニバルを忘却したるが如し、嗚呼是れ世の所謂英雄豪傑の運命にして、一たび戰爭に敗を取れば、直に勇氣を沮喪し、一たび逆境に陷れば、日頃の忠友皆其身を去る、吾は我が身邊にシュダを見たること幾人ぞや！嗚呼吾は吾が卿相、吾が將軍を永く心服せしむるを得ずして、彼等は皆吾に背き、吾名を輕侮し、忠君愛國の赤誠を遺棄するに至りたり、吾は屢々彼等を引率して大勝利を博したるに拘らず、吾が存命中すらも彼等の冷ききり利己心を溫むることを得ざりとせば、吾若し死して吾身も亦冷たき一塊の屍と化しなば、何を以てか彼等の忠誠を維持し若くは喚起せしむるを得んや、然るに彼れ基督は王者として高弟サン、ピエールを羅馬敎皇の位に即かしめ、羅馬を以て永遠の都となし、ワチカン宮殿より世界の精神界を司配せしめたるより以來、敎統連綿として今日に至るまで須臾も絕えず、嗚呼是れ實に基督敎の世界を占領したる歷史にして、基督の死後に於ける遺業、所謂基督敎會の進步發展なるものは、世界の一大奇蹟と云ふの外なし、國民亡び、帝王倒るゝも、基督の遺業（敎會）のみは依然として存立す、世の狂瀾怒濤に襲擊せられつゝ屹然として

基督の宣傳したる宗敎のみ東西共通古今一貫の眞理

ピエールの岩上に存立するは、何者の力によりて然るや？千八百有餘年來暴風逆浪の之を覆沒せんとしたること幾回ぞや、然るに千八百有餘年後の今日まで之を擁護しつゝあるはそも何如なる腕ぞ？』

『回々敎、ヌマの祭儀、リクルグスの制度、多神敎、每瑟の律法等の如きは宗敎的事業と云はんよりは、寧ろ立法的事業と云ふて可なり、個となれば此等の祭儀は孰れも皆天よりも寧ろ地に歸向するものにして、一國一民の利福に關するものなり、然れども眞正の宗敎なるものは一國一民に限定せらるべきものにあらざるや瞭なり、眞理は東西共通、古今一貫なり、而して基督の宗敎は乃ち如の此きものなり、同宗敎のみ世界的大宗敎にして、一國民性を超絕し、四海兄弟、萬民一祖を宣傳し、貴賤尊卑の別を立てず、一切人類に眞正なる故鄕として、造物主の溫き家庭を指示す。』

『基督は自ら無始無終の神子なることを證明して、一時の現世を侮蔑す、其の說く所の敎理は孰れも皆永遠無窮の生命を目的とす、是を以て其の敎界の境域は遠く死生の境を越えて、無限に延亘し、過去將來を包含す、眞理の國は實際虛僞の鄕より外に限界を有せざるものなり、而して福音の天下は實に此の如きものにして、萬國萬民を抱擁す、基督は一切人類を占領し、之を以て唯一の國家を作る、圓滿幸福の生涯に入らしむる爲めに撰拔せる善人の國家即ち是なり、勿論基督の敵なる惡人も亦、其の友なる善人の如く基督に屬するものなり、何となれば基督は審判の日には萬民を裁判すべければなり、勿論マホメットも亦神の唯一性を說き、此の眞理を以て其の宗敎の本性となし、要理となしたることは、吾も亦之を知ると雖、彼は每瑟と猶太の古傳とに基きてのみ之を說きたることは、人の皆能く知る所なり、マホメットの精神、否、寧ろ其の想像は「コーラン」(回敎の經典)中の一切の資料を供したるが故に、同書は雜駁にして統一を缺き、澁晦にして明快を缺けり、マホメットは熱狂なる改革者にして、天才に任せて人生の歸趣問題を解決せんと欲し、遂に醜猥淫靡の天堂を揭ぐるに至れり、蓋し神自ら示敎するにあらざれば、何

基督とマホメット

人も神、天堂、來世等の問題を解決すること能はざるものなり。』

『是を以てマホメットの說く所にして聖書と敬神の念より生ずる感情とに基かざるものは眞と云ひ難し、自餘の事に關しては「コーラン」は大膽なる權柄主義と侵略主義を述べたるものに過ぎず、マホメットは野心家の標本なり、人心の情慾に投じて、肉慾をよろこばしめ、色情を滿たさしめんとしたる一種の曲學阿世の徒にして、其の心術甚だ陋劣なりと云ふ可し、彼は果してアラビア人を神の眞理に導かんとしたるものなるか、將又一切の快樂を現世に逞うすることを許し、來世には報賞として之を與ふるを約束しつゝ、唯此の目的のみに誘引せんと欲したるものなるかは、未だ遽に斷ず可からず。』

マホメットは野心家の標本

『彼は一國民の心を奪はんことを欲したるが故に、人心の情慾に投ずるの必要ありたり、而して彼は早くも玆に成功せり、然れども彼れの成功の原因は其の失敗の原因となるべし、上弦旗は早晚世界の舞臺より撤せられて、十字架のみ之に代りて留存すべし、快樂主義は畢竟國民及び個人を殺すものなれば、之を以て其の存在の理由となすが如きは、甚だ狂愚の沙汰なり、加之ならず、彼は僞預言者にし

マホメットは僞預言者

て一國の民を勸誘して以て政教の二權を掌握せんと欲したる者なり、而して政治の權は實際之を掌握することを得たれども、宗教の權に至りては、其の虚名を獲たれども、其の實を占むるを得ざりき、彼は神より派遣せられたるの證明を示したることなければなり。』

『彼は一二回奇蹟を以て之を證明せんと努めたれども、不幸にして失態を演じたり、夫子自ら之を信ぜざりしかば、誰か其の奇蹟を信ずる者あらんや、此點に於て人を欺かんとすることの、案外困難なることを知る可し、マホメットには瞞着者の名を呈すること甚だ易けれども、基督には到底此の稱を下すこと能はず、如何なる基督教の敵と雖、此の如き侮辱を加へんと欲したる者あるを聞かず。』

マホメットは瞞着者

『然れども基督を神にあらずとせば、瞞着者と云はざるべからず、間、髮を容れず、基督は地上の權勢に何等の野心もなかりき、單に天の使命をのみ果たさんとせり、然れども彼は政治家となりて權勢を占め、人心を收攬すること甚だ易々たりき、彼にして果して此意ありたらんには、萬事意の如く行はれたりしならん、何となれば猶太人は其敵を征討すべき現世の救濟主を期待し、全世界を統御すべき國

基督は野心家にあらず

王の出でんことを翹望したればなり、是れ實に乘ずべき好機會にして、野心家ならば必ず奇貨措く可しとなしたるならんも、基督は之に反して先づ第一着に此心を杜絶し、此の如く聖書の意味を解釋するは、大なる誤解なることを論じて公然之を攻擊したり、彼は所謂救濟主の征服及び勝利なるものは精神的にして、罪惡を抑制し、情慾を征服し、心靈界を平和的に侵略する事なるを證明せんが爲に大に努めたり、聖書には世界征服の著明なる事實を記載すとせば、此は世界の終に於ける基督の再來を報じたるものなり。』

『基督はその門弟に此の精神的解釋を銘記せしむるが爲に特に注意したり、國民は屢々彼を推戴して國王となさんとしたれども、彼は眞甲より之を排斥し、斷じて之に應ぜざりき、彼は又人心の弱質に投ぜず、感情は人心を司配する壓制者なるが、彼は之を奴隷の如く酷遇せざれば、神に奉仕する能はずとせり、罪惡は彼が不俱戴天の敵なり、大成功の要因たる情慾の如きは飽迄も之を抑制せり、彼は腐敗せる人性に對しては專制的に語れり、嚴怒せる君主の如く斷々乎として贖罪を要迫せり、彼れの言は如何に嚴酷なりと雖、微妙なる空氣の如く心靈に滲入せ

基督は人心の弱質に投ぜず

り、直に良心に迫まりて默々の裡に納得せしめたり、彼は政略を用ゐず、政略は眞正の基督教徒に取りて無用なり、何となれば神聖なる同胞の定理を遵奉すればなり。』

『嗚呼是れ實に特殊の人物なり、絶倫の偉人なり、唯一無二の教主なり、其の宗教は世界各種の宗教と全く其の性質を異にす、天下之に類するものありと言ふ者あらば、虛言者なり。』

『茲に吾が最後の論斷を下さん、若し人あり、自ら神の名を簒奪して、至上崇拜を潛せんとする大企圖を抱懷して、之を遂行するに當りて大々的成功を博するに至りたりとせば、吾は天に神もなく佛もなしと言はんとす、然るに基督は獨り之を企てたり、彼は自己に就き明に言明し、忌憚なく斷言して曰く、『我は神なり』と、此言は『我は一種の神なり』と云ふ斷言と全く相異なり、況や『神あり』と云ふ言と同一視すべきものならんや、之を古今東西の歷史に徵するに、自ら神の稱を僭して、我は神なりと絶對的に斷言せる者あるを見ず、希臘の神話にもジュピテル及び他の神々は自ら神となれりと云ふ事を何處にも記載せず、此の如きは餘りに自尊の極

自ら稱して神と云ひたる者は獨り基督のみ

みなり、無法の至りなり、奇怪千萬なり、狂愚の沙汰なり、初代の歷制者を神としたる者は孰れも皆其の子孫ならざるはなく、其の後繼者ならざるはなし、人は皆同一種族なるに、アレキサンドルは嘗て自らジュピテルの子なりと言へしが、希臘全土は此の欺瞞の言を嘲笑せり、羅馬皇帝を崇めて神と爲せる事も、羅馬人は決して之を眞面目に解せざりき、マホメット、孔夫子の如きは單に天命を行ふ者と言ふに過ぎず、ヌマのエゼリー女神說の如きは、林中に於て受け得たりと云ふ天啓の化身に過ぎざりき、印度のブラマ及びシーヲの如きは一種の心理小說と見て可なり。』

『果して然りとせば、如何にして獨り彼の猶太人、彼の大工の子のみ、自ら稱して神と云ひ、至上主と云ひ、造物主と云ひたるか？彼は一切の崇拜を占有したる者なり、人はアレキサンドルの大攻略を驚くと雖、之を基督に比すれば、何かあらん、彼は一國一民を征服したる者にあらず、世界萬民を心服せしめたる大攻略者なり、彼れの存在は固より他の當時の猶太人の存在よりも明かに證明せられたる歷史的事實なるにもせよ、一切人類の心靈をして其の一切の能力を擧げて己の存

基督は世界萬民を心服せしめたる者

在の附屬物となさしめたりとは、何等の奇蹟ぞ。』

『然らば彼は如何にして之を行ひたるかと云ふに、世に比類なき一大奇蹟を以て之を行ひたり、彼は人々の愛を要求せんと欲したり、卽ち是れ世に最も求め難き所のものなり、此は師が其の弟子に求め、父が其の子に求め、妻が其の夫に求め、兄が其の弟に求めて、容易に得ざる所のものなり、一言以て之を蔽へば、彼は心を求めんと欲して、絕對的に之を要求して、直ちに茲に成功したり、吾是を以て彼れの神なるを斷言す、アレキサンドル、セザール、ハンニバル、ルイ十四世は全幅の才能を傾けて、之を企てたれども、孰れも皆失敗に歸したり、成程彼等は世界を征略したれども、一友を認むるに至らざりき、今の世にハンニバル、セザール、アレキサンドルを愛する者は恐らくは吾一人位のものならん、彼の偉大なるルイ十四世は佛蘭西にも世界にも斯くまで榮名を輝したる者なるにも拘らず、その王國に、否、その家庭に於てすら一人の友をも得ざりき、勿論吾等は吾子を愛す、然れども是れ果して何の爲ぞや、他莫し、吾等は天性の本能に從ふものなり、神の意志に從ふものなり、禽獸すらも心得て行ふ所の一種の必然に從ふものなり、然れども記せよ、吾等の愛撫に感せざる子果して幾人ぞや、親の大恩を辨へざる子天下其例に乏しからず、忘恩の子世に幾人ぞや、ベルトラシ將軍よ、卿の子は果して卿を愛するか？卿の之を愛するや言を待たず、然れども子は卿の之を愛するが如く卿を愛せざることは必然なり、父恩も天性も基督敎徒の基督に對する愛の如きものを鼓吹すること能はざるべし、若し卿にして死せんか、卿の子は卿の財產を消費しつゝ、必ず卿を記憶に呼起すべしと雖、卿が孫の代に至らば、卿の存在したる事又卿がベルトラン將軍なりし事を僅に記憶するに止まるべし、吾等は今や一孤島に在りて、卿は卿の家族を見るより外に他の慰みなし、然るに基督の語るや、天下後世の人々血肉の親みよりも親密なる契りと、世に比ひなき神聖なる緣とに依りて、必然的に彼に結合するに至るものなり、彼は世上一切の愛に優れる自愛をも殺す大愛を燃すものなり。』

『此の如き愛の奇蹟を見れば、曷ぞ造物主の力を認めざるを得んや、世の宗敎の開祖等は、此の神秘なる愛を意識することだも能はざりき、此愛は基督敎の眞髓にして、仁愛若くは愛德の美名を以て稱せらる。』

基督は人の心を敬慢せり

愛は基督敎の眞髓

『彼等が水火に投ずることを避くる所以は、己を愛せしむる點に於て全く己の無能なることを深く意識すればなり、故に基督の大なる奇蹟は疑なく愛德の天下なり。』

『獨り基督のみ人々の心を無形界に向上せしめて、一時の身命を犧牲に供せしむるに至れり、獨り基督のみ此の如き犧牲の道を開きて、天地神人の契緣を結べり、凡て彼を中心より信ずる者は、此の珍らしき超自然の愛を感ず、是れ實に不可思議なる現象にして、常理を以て解す可からず、人力を以て行ふ可からず、此の聖火(神聖なる熱愛)は此の新プロメテー(希臘の神話にプロメテーなる者天火を盜むの古事あり、新プロメテーとは基督)の天より地に齎したるものにして、時と云ふ大破壞者も此愛の勢力を消喪することを得ず、此愛の期間を限定するを得ず、吾れナポレオン、屢々之を考へ、益す之を感嘆す、基督の神なる所以全く茲に在りと思惟す。』

ナポレオンと愛の力

『吾も亦群衆を鼓舞して、吾が爲に身命を獻げしめたりと雖、吾が士卒の熱情と基督教徒の愛德とは日を同うして語る能はず、其の原因大に異なり。』

『畢竟するに吾れ士卒の前に出でゝ、吾眼より電氣を傳へ、一言吾口を出づるや、吾が語調能く彼等の心に烈火を燃すことを得たり。』

『勿論吾自らは此の大なる力の秘訣を有して、人心を鼓舞するを得たりと雖、之を人に傳ふることを得ざりき、吾が將軍中誰も吾より之を受け得たる者なし、それと察したる者もなし、吾は又吾名と吾愛とを人心の裡に永久傳へ、物質の力を假らずして奇蹟を行ふの秘訣を有せず。』

『今や吾れセント、エレーヌに在り……百戰能く勝ち、邦國を征討すること一にして足らざるに、今や獨り此の巖上に繫がる、吾が不運に隨從する者何くにか在る？誰か吾を考ふる者ぞ……歐洲中誰か吾が爲に起て再び干戈を執る者ぞ？誰か吾に依然忠誠を持續する者ぞ？吾友今何くにか在る？勿論卿等二三子は永へに忠誠を失ひて、吾と配所の苦を共にし、吾が謫居の情を慰めつゝあり。』

ナポレオンの感慨

論じて爰に至るや、ナポレオン帝の音聲は一種特別の韻を帶び、沈痛哀切の音容を示して曰く、『然り、吾生は一時王冕と玉坐の光にて金色燦爛たりき、ベルドラン將軍よ、卿の生活は此光輝を返照して、宛も吾が金色を施さしめたる廢兵院の屋

蓋が日光を返照せるが如き觀ありき……然るに悲運來りて、金色漸次消え失せたり、嫉風妬雨日々吾を襲ふて、今や最後の雨打風擊を加ふ、ベルトラン將軍よ、吾等は既に鉛と化せり、頓て泥土に變せんとす。』

ナポレオンの運命

『古來英雄豪傑の運命皆此の如し、セザール、アレキサンドルの末路亦此の如し、吾等は刻々忘却の墓に葬り去らる、吾が攻略者の名も皇帝の名も最早や學校の宿題となるに過ぎず、吾が功業遺蹟は學者先生の鞭の下に落ち、其の毀譽褒貶に委せらる。』

『偉大なる佛王ルイ十四世に對しても毀譽褒貶交々臻れり、王の崩御するや、流石の大王も獨りウェルサイユの寢室に遺棄せられ、侍臣すらも之を見捨て、恐らく之を嘲笑の具に供したるなるべし、最早彼等の君主にはあらざりき、一塊の屍のみ、一個の棺のみ、一個の穴のみ、不日解體腐蝕して蟲の餌食となるを待てり。』

『思へば吾が運命の此の如くなるも旦夕に迫れり、吾は英國の寡頭政治に殺され、死期の未だ到らざるに先ちて死せんとす、而して吾屍も亦一撮土に歸し、蟲の餌食となるべし。』

『偉大なるナポレオンの近き運命は實に此の如し、吾が悲むべき末路と基督の永遠無窮の御代とは霄壤の差あり、彼は全世界に宣傳せられ、愛敬せられ、崇拜せられて、永久に生存す、之を見て死せりと云ふ可きか？寧ろ活けりと云ふ可からずや？嗚呼是れ基督の死……嗚呼是れ神の死……。』

言ひ畢りてナポレオン帝は默せり、ベルトラン將軍も亦沈默を守れり、帝は頓て亦口を開て曰く、『卿にして若し基督の神なることを解せずんば、卿を將軍としたるは吾の誤りなり。』

人の將に死なんとするや其の言や善し、偉人の將に死なんとするや其の言や更に傾聽に値す、ナポレオンは晩年セント、ヘレナに流されて、死期の刻々迫り來れるを見て、古今東西の英雄豪傑の運命を追想すると同時に、顧て己が運命にも想到し、世の榮枯盛衰の理を觀じつゝ、坐ろに英雄の末路の悲むべきを曉りたるが、唯茲に猶太人、一工匠の子より身を起したる基督のみは、此の運命に洩れ、その生死や如何にも奇怪、その末路や悲むべきが如くにして悲しからず、而してその事業は死後に至りて愈々益々榮え行けるを見て、太く不可解の事象に感を打たれ

偉人臨終の言

たる結果、遂に彼は英雄以上の英雄、偉人以上の偉人なるを識得して、彼を神と絶叫するに至りたるものなり、此は常人の議論にあらずして、偉人の議論なり、常時の言にあらずして、臨終の言なり、而して其の語る所常人にあらずして偉人以上の偉人に關せるが故に、理窟一片の議論や、利害の觀念に驅らるゝの言と大に其の撰を異にす、故に著者は特に之を卷頭に掲げて以て本書の總論に充つ。

(二)基督の先驅ヨアンネス洗者

(I)ヨアンネス洗者傳記

偉人ヨアンネスの父母

粤若に倩々正史を按ずるに、基督の降誕せる國は、三大洲の中央なる亞細亞洲中地中海に滚せる現時シリアの國バレスチナとて、其昔はユデアと云ふ、其の國王ヘロデスと云ふ人の治世に、聖地イエルサレムを距る事凡そ二里ばかり山地なるヘブロンと云ふ處に於て、ザカリアスと名くる一人の司祭あり、其妻をエリザベットと云ふ、夫婦共正しき人にて、能く神の誡命を守り、禮義を完全に行ひ、俱に道德極めて高く秀たれば、衆人も俱々之を奇なりと稱しけるが、如何にも歳邁る迄

舊約時代の司祭

一子だも有らざりし故、國民救助の便りなきを深く憂ひ、哀れ願くは一子を玉ひかしと天に歎き祈る事歳久し、元來ユデア國にては女人の子なきは、是れ罪の爲の罰なりとて、大に之を惡み嫌ふて耻となす習慣なりき、此のエリザベットと云ふはレヴィ族、アーロンの家、世々同國ベトレエムの司祭マタンの娘の子なり、此娘マリアの母アンナの妹なる故、マリアとエリザベットは正に從姉妹なり、又ザカリアスと云ふは、アビアス組の司祭にして、ダヴィド王の時は組の長たり、此時は其の次席第八級に居れり、但し舊約時代の司祭の職位は世襲の法則なれば、僉な妻帶の身なり、唯殿内に勤務を執れる間は、房事を避く可き規定なり、抑も此の司祭と云ふは、昔時聖祖アブラハムの孫なるヤコブスと云へる人十二人の子を有せり、其の三子をレヴィと云ふ、是れ即ち舊約時代の法敎師なり、其の二子をカアトと云ふ、カアトの長子をアムラムと云ふ、アムラムに又三子あり、長は女にしてマリアと云ひ、二人は男子にして兄をアーロンと云ひ、弟をモイゼスと云ふ、世に大聖人と云ふは是人なり、其の昔ユデア國民エジプト國へ流轉して、百年の間其の國王の爲に甚だ嚴酷なる取扱を蒙りしが、天はアブラハム一門の民を憐みて、四十年の

間アラビアの砂漠に滯留せしめ、日々天よりマンナと云ふ食物を下して養へり、其他又種々の奇蹟を顯せり、其時に當りモイゼスの兄アーロンを立て司祭長となし、其他又許多の司祭を置きたり、而して其の司祭職はアーロンの子孫を以つて世襲せしむるの敎規となし、又其の職務は犧牲を捧げ、香を燒き、以て神前に奉仕するに在りたり、司祭の外又補祭職を置けり、これは司祭の下役にして聖殿を飾り、器具を扱へ、或る祭典の相者となり、或は歌曲を奏し、或は犧牲に供する羔羊又は鳩鴿等を洗ひ、且つ屠る者の事務を執れり、之れに任ずる者はアーロンの子孫と又レヴィの族人モイゼス等の子孫なり、偖又昔は祭典を執行するに今日の如く聖殿に於てせずして、則ち天を堂とし、地上を壇とし、或は山の上を祭壇となし、又或る時は郊野を以て祭壇となしたり、然るに天は特別にユデア十二族を選みて、之に直轄の民を擧げて、モイゼスに幔幕を調制せしめたり、之を神の天幕となし、四面十二部族の幕家の整然として立並べる中央に之を張設けて、其中に聖祭を執行せしめたり、然るに其後ちユデアの人民其の本國ユデアに歸るを許されたれば、以前の如く本國に家屋を營みて住居すれども、聖殿は新築せず、尙砂漠に

十二族の天幕

有りし時の如く、依然として天幕を張り、其中に聖祭を執行したり、又アーロン、モイゼス等の子孫は或は司祭或は補祭となりて、一種の格式を有せるが故に、約束の地に入りたる際所有地の分配を受けずして、只國內に於て四十八ヶ村を受けたり、族人の如く地所の分配を受けざるに因り、一種の所得を與へられたり、即ち他族の人は凡て己の所得の十分の一を以て、レヴィの族人に與ふる規定なりき、其他レヴィの族人には天に捧げし犧牲の一部分を受けしむ、然るに後來アーロンの子孫其員數甚だ增加せる故、聖殿の務め混雜すとの故を以て、ダヴィト聖王の時に當り、司祭を二十四級即ち二十四組に分けて、各組輪番を以て一週間づゝ聖殿に宿直して勤務を執る事とはなりたるなり、然るに何時迄も祭典を帳幕の中に營むべきに非ずとて、國王ダヴィドは一の聖殿を建ん事を企てたり、然るにダヴィド王は稀なる武人にて、無數の人を殺し、鮮血杵を漂はしたる科に因り、聖殿建築の淨功を奏すること能はず、只築造の準傳のみなすことを得たり、然るに其子サロモンは父に代つて宏大壯麗なる聖殿を建築したり、是れ即ち聖殿の始めなり、其他聖殿とては世上に非ざるなり、これは實にサロモン王在世中の一大事業にして、

イエルサルムの聖殿

天の特命に因りて築造したるものなり、イエルサレムの聖殿即ち是なり、偖其聖殿の莊麗なるを記せば、先づ其外部は許多の堅牢なる大理石を以て之を造り、其壁には一面に精密なる彫刻を以てし、又床及び壁の間には黄金の厚板を張込めたり、而して聖殿中最も至聖なる賢所あり、其賢所の縱は一百二十尺、其横は三十五尺、高さは四十五尺にして、之に附屬せる諸の堂宇を合する時は、我邦の四萬八千四百坪に當る、又造營は七箇年半にして落成を告げ、其間工事に從事せし工夫の數を算れば、二十萬餘の多きに至れり、然して世界の創造より此落成に至る迄殆ど三千年にして、即ち紀元前九百九十一年目に當れり、是に於て聖殿奉献の式を行ひ、直に一の法令をユデア國に布きたり、即ち今より以後ユデア國人にして、神を拜み、犧牲を捧げ、總て祭事を行ふは、モイゼスの天幕に代つて、イエルサレムの聖殿にのみ營むべしと定めたるなり、然るに惜むべし四百年後に至り、アッシリアの國王の爲め滅亡の非運に際し、國中の人民擧つて該王の奴隷となりたる而已ならず、剩へイエルサレムの聖殿をも毀たれたり、是れ實にユデア國人が四百年間に於て行ひたる罪惡と僞神を信仰したるとを以て天罰を蒙りたるに外ならざるなり、時正に紀元前五百八十七年に當れり、然り而してダヴィド王より十八代の國王ゾロバベルが彼の有名なるシールス王の許可を得て、其本國ユデアに歸り、特に建殿の資金を該王より受けて再び聖殿の建立に着手して、之を落成し、聖殿に拜禮するの式を回復したるは、紀元前五百十五年にてありたり、是より以來淨財日々に納まり、月に集り來りて、其の富有は國人が毎年四十六錢の四分の一なる十二錢を納むると、又異邦人の茲に參詣して、金錢寶物を奉納せるとの爲なり、然るに又シアリ國王安知奥斯軍を率ゐて、イエルサレムを侵略し、金錢寶物を掠奪したれば、之が爲國人の聖殿に聖事を執行し得ざりしこと、殆ど三十年、斯く中絶せるに當り、勇將ユダス、マカベウスなる者、遂に起つてシリア人を其國より逐ひ退け、ユデア人をして又再び聖殿に拜禮することを得せしめたるは、紀元前百六十六年の事なりとす、斯て紀元前二十年に當りて、當時の國王ヘロデスが己れ元東部アフリカのエチオピアと云ふ異邦の人たる故を以て、國人の心を得んが爲務めてイエルサレムの聖殿の内外に大修繕を加ひ、ザロモン王の古殿に劣らざる迄に莊麗を極めたり、去程にイエルサレムの聖殿は宏壯堅牢の大方郭

再建のイエルサルム聖殿

を以て圍繞せる一の廣大なる庭園の如きものの中に、國人と異邦人とを分つて祈禱せしむる定め所二ヶ所を設け、各々四方に一つ宛の大門あり、是は人の出入に備へたり、蓋し此建物は殆ど一の大なる御城と同樣なる觀を呈せり、又一の美麗なる尊嚴なる聖處あり、此は朝夕司祭のみ其内に入りて、神前に香を捧ぐる所なり、其祭壇は四角なる大爐の如き者にて、凡そ三尺五寸位ありて、朽敗し難き良材を以て之を造り、其外面は悉く純金を以て之を包みたるものにて、約束の櫃の前に安置せられ、中間には一の幕樣の物を垂れて之を遮れり、當務の司祭ザカリアス抽籤の順番にて、其前日より聖殿に登り居たるが、今や聖殿に徐々と進行する容貌、額上に漣の皺を寄せ、壽の眉毛に最高尚なる髭の垂々たるは、是れ實に碩學高德の智識と思はれたり、夥多の貴賤は外面に居りて祈りを凝らしける、香爐に薰らす名香の煙りは、紛々として壇上四方に朧朦たり、暫くありてこは如何に、其の祭壇の右の方に綾羅錦繡珠を縷めたる如くの最も爽なる天使忽然と立顯れしに、ザカリアス司祭も之を見て大に驚き恐れたり、然るに天使は彼に向つて曰く、ザカリアスよ、怕るゝこと勿れ、汝ぢ天に祈求したるは疑もなく國民救助の

ザカリアスの風丰

天使の示現

爲にせし故、祈り空しからず、汝の妻エリザベット今に一人の男子を產むべし、其名をヨアンネスと名乘るべし、其のヨアンネスと云へる名は、忝くも天の聖寵を蒙れる意義を有するなり、又汝夫婦に大なる喜と樂み有りなん、夥多の人民も其の男子の生るゝに依り、大なる悅び有らん、そは又其の男子神前にありて甚だ大なる者にて、苟も葡萄酒と濃酒を呑まじ、母の胎内に有りて、聖靈を蒙らん、ユデア人の心を開き、迷信の者又は逆者を義者の道に立歸らしめ、邪曲を傾棄せしめ、而して後ち國民をして天國の道に容易く就かしむ可ければ、彼れ預言者エリアスの心と其の才能を以て、救世主の爲に先驅して行ん、是れ舊約の先知衆聖等の心を新約の信徒の心に合せ、新なる民を備ひ、唯一の神に良民を調進し奉る大聖者なりと宣ふ、時にザカリアス天使に答ふる樣、僕れは歲老へて妻も又晩歲に及べり、去れば何を以て是等の事有べきと、天使再び宣はく、我は神の御力を有する四天使の一位にして、此の幸福を汝に告げん爲、神勅に因りて天降れり、然るに汝我が言葉を信せず、疑ひの心を抱くに依り、今よりして汝の妻エリザベット男子を產まん日迄、汝の舌は結ふぞと云ひ終るや否や、其儘搔き消す如く去りたりけるが、

ザカリアス舌結んで言ふ能はず

果して其如くなりたるぞ不思議なれ、此時貴賤の人々外殿に有りて祈りを凝らし居たりけるに、ザカリアス司祭の奥殿より退出する事の遲刻なるを怪み訝りける中に、漸く彼方より來りしかば、衆人其の遲かりしことを問ひけるに、其時よりザカリアスは少も發言すること能はず、餘儀なく手眞似して己の身に不思議の有りしことを示すのみ、亦も此事は紀元前八百十二年より同く八十年迄の預言者の有名なるマラキアスと云ふ人の預言に出たり、其預言に曰く、世上の人類に救世主將に降臨せんとする時に當り、必ず一人の聖者にして、其の言葉仕業に就き非常の能力を有する大預言者出現し、救世主の先驅となり、之が爲其の道筋を預備し、又舊新兩約の明々白々たる一致關係を指示し、以て數千年の昔時より首を伸べ、宛から大旱の雲霓を望むが如く、世の救主を待望せし先知衆聖人等の子孫(眞誠なる信敎者)の世々繼續して絶滅せざりし事を表明せり、去れば今此のマラキアスの預言將に應驗ありたり、斯の如くにして司祭ザカリアスは其勤めの日滿ちければ、雀躍して己の郷なるヘブロンの我が家にぞ立歸りける、果して其日よりエリザベットは姙みぬ、ユデア國にては、人三十にして子なく、婦人にして

エリザベットの姙娠

母の胎内に於ける兩偉人

子なきは、罪の罰なりとて、大に之を惡み耻となす風習なれども、一天萬有の神は何事も叶はざるなきを以て、ザカリアス夫婦は特別なる聖惠に因りて一子を賜はりしは、衆人の中より其耻を洒かしめんとの天の攝理なりと、夫婦の喜び大方ならざりき、夫よりエリザベットは常の住居ヘブロンより僅に十分間程にて行き得べき彼所なる山奥の原野に在りし一別莊に隱れ居り、其の臨月の至るを今や遲しと待ちたりき。

斯く珍らしき道によりて、エリザベットの胎内に孕りたる兒こそ、基督の先驅となりて其道を開きたるヨハンネス洗者なれ、洗者と稱するは後日世に出でゝ悔悟の洗禮を授けたるが爲にして、基督自らもわざ〳〵來りて之より洗禮を受くるに至れり、ヨアンネスは基督より六ケ月以前に生れたる偉人なるが、此偉人は基督と同じく、早くも母の胎内に於て相互に呼應したるぞ不思議なる、即ちエリザベットが年老て姙娠せるを耻て、五ケ月間山奥の原野に在りし一別莊に隱れ居りしが、六ケ月目に同じ天使カブリエルは處女マリアに顯はれて、偉人基督の母たるべきことを告げ、尙其言の眞實なるを證明せんが爲に、其の親類なるエリザベッ

トの姓娠六ヶ月になれることを告げ知らしむ、是に於て乎マリアは急ぎてユデアの山に來り、エリザベットを見舞へり、マリアがエリザベットの家に入るや否や、見舞の言葉の未だ云ひ畢らざるに、エリサベットの胎内に在りしヨアンネスは雀躍して喜べりと云ふ、エリザベットは從妹マリアを見て、偉人の母のわざ〳〵訪問し來れるは、身に餘れる幸福なりと云へり。

ヨアンネスの誕生

エリザベットの産期近づけるとき、親戚隣人皆大に喜ぶ、兒生れて八日目に割禮を受け、父の名を取りてザカリアスと命名せんとせしに、母之に反對してヨアンネスと名く可しと云ふ、家族中此の如き名の者一人もなしとて、父に如何なる名を命ずべきかと問へば、父筆を執りてヨアンネスと名く可しと書すると同時に、其舌釋けたれば、茲に神に謝し、兒を祝して曰く、『汝嬰兒よ、汝は上天の預言者と稱せられ、主の先驅となりて、其道を準備すべし、國民に救濟を知らしめて、其の罪の赦を求めしむ可し』と、兒成長して精神發達し、世に出づるまで原野に生活せり。

ヨアンネスの私生涯

古書にヘロデス王基督とヨアンネスを搜索して之を殺さんとせる事を記せり、此の時エリザベット兒を携へて難を山に避け、山中を彷徨ふことしばらくにして、太く疲れ、山に向つて、『神山、母子を救へよ』と語れば、山忽ち穴を開きて、母子を迎へ、再び其穴を閉ぢて、ヘロデス王の追手より救ひたりと云ふ、天使常に母子に隨伴して、穴居せる間之を照らしたりとぞ、一說にヨアンネスはユルダン川を距る約一哩サブサスと名くる地に於て洞穴の中に住べりと云へども、キリゾストムス及びヒエロニムス等の說に據れば、幼時より原野に成長せりと云ふ、然れども、ポリヌスの書には、幼年時代を父の家に送りて、モイゼスの律法を學び、身體發達して後、原野に退き、身には駱駝の毛衣を纏ひ皮の帶を締め、野蜜と蝗のみを食して、極めて質朴なる生活を送れりと云ふ事を記せり。

ザカリアスの住居地

父ザカリアスは何處に住居したるかと云ふに、一般の說にはヘブロンに住居せりと云ふは、聖書に『當時マリア起ちて亟に山地なるユダの邑に往き、ザカリアスの家に入りてエリザベットに問安せり云々』とあるに基きたる解釋なれども、是れ固より一種の假定說に過ぎず、ザカリアスは司祭にして、ヘブロンは司祭の邑なりしには相違なけれども、ザカリアスが同地に住居したりと假定せしむ可き充分の憑據を見ず、案ずるにヘブロンはイエルサレムより南方へ二里程距りたる

山地なり。

他の傳説に據れば、ザカリアスはアインに住へりと云ふ、アインも司祭の邑にして、イエルサレムより南方へ凡そ二里距りたる山地なり、今日は此地をヨアンネス洗者の邑と云ふ、山の麓に在る田舍にして、橄欖木繁生す、昔の邑の遺跡に十字形の聖堂あり、これはサンタ、ヘレナがザカリアス夫婦の住へる處なりと云ふ傳説に基きて建立したるものにして、聖堂はザカリアスの家の在りたる所に建立せられたり、此所より二百歩ばかり距りたる處にザカリアスの別莊ありたり、三伏の候にはザカリアスは此處に暑を避け、エリザベットが姙娠後五ヶ月間隱れ居たりと云ふも此處なり、マリアがエリザベットを訪問したるも亦此家ならんと云ふ、家は美しき谷間に位せしが、今日は此谷はヨアンネス邑の公園となれり、此家に代りて聖堂建立せられしが、今は僅に其の遺跡のみを認む。

ヨアンネス洗者の邑

若夫れヨハンネスの退きたる原野と云ふは、邑より凡そ一里も距りたる溪谷の地にして、繞らすに山を以てし、山の間々には小溪多し、基督の先驅ヨアンネスは幼時より三十歳に至るまで此の原野の山に仙人の生活を送れり、ヨアンネスの住みたる洞穴は岩の眞中に在りて、自然に小房の形を成し、登ること甚だ難かりき、ヨアンネスの寢臺となしたるものは後に祭壇となして、此處に彌撒聖祭を行へり、洞穴の下には溪水潺々として流れて、岩の裂罅を迴りて谷川に下れり、彼處に蜜蜂の蜜を作れる處あり、季節に依りて大なる蝗夥多飛び來り、貧しき牧人は之を捕へ、火に燒きて之を食せり、ヨアンネスは始終此に穴居して何處へも出でざりしにはあらず、少くも年に三回はイエルサルムに赴きて聖殿に參拜したれども、貧しきナザレット人の如く裝ひたれば、誰の目にも目立たざりき。

ヨアンネスの退きたる原野

ヨアンネスの洞穴

ヨアンネスの洞穴に據れば、彼のヘロデス王が二歳以下の嬰兒を殺さしめたる時、エリザベットはヨアンネスを此の洞穴に隱して難を逃れたりと云ふ。

此等の傳説を見れば、基督の先驅ヨアンネス洗者の成長したる所はアイン邑の原野なりと信じて可なり、佛國文豪ラマルチヌは此處を跋渉して流麗なる紀行文を遺せり。『東洋旅行記』第一卷四一一頁より四一九頁參看)

ヨアンネスの公生涯

ヨアンネスは三十有餘年間原野に仙人の生活を送りて、羅馬皇帝チベリウスの

即位十五年即ち紀元二十八年初めて世に出でゝ、先驅の使命を果して、救世主の降來を宣傳したり、先づヨルダン川の邊に出で來りて、後悔の敎を布き、天國の近けるを說き、來衆の身分に應じて夫々敎訓を授け、罪を悔ひ改めしめたる上、ヨルダン川に沈めて之に洗禮を施しつゝ、基督が聖靈と火を以て洗禮を施し、罪を赦すの道を開けり、前述の如く此の洗禮によりてヨアンネスは洗者と稱せらるゝに至りたるものなり、洗者には弟子ありて、之に師事し、洗者の如く後悔の業を行ひ、人々にも之を宣傳せり、其の弟子は多く後に基督に師事するに至れり。

ヨアンネスの德名

ヨアンネスの德名忽ち全國に響き、ユデア人多く之を救世主なりと思ひしが、ヨアンネスは斷乎として其の然らざる旨を言明せり、然れども夫迄ヨアンネスは未だ基督と面識あらざりしが、他のユデア人の如く來りて洗禮を請ふを見て、天啓の光に依りて之を知り得たれば、固辭して『我こそ御身より洗禮を受けて淸めらるゝ必要なれ』と云へども、基督は强てヨアスネスに洗禮を受く、是れ實に紀元三十年なりとす、ヨアンネスは時に年三十四歲にして、基督の年齡は三十三歲なり、其後ユデア人はヨアンネスに使を遣し、『師は救世主なるか』と問ひけるに、ヨアンネスは之に答へて曰く、『我は救世主にあらず、預言者にもあらず、主の道を備へよと野に呼ぶ聲のみ、汝等の求むる所の者は汝等の裡に在れども、汝等之を知らず』と、翌日基督ヨアンネスの許に來るや、ヨアンネスは之を衆人に指示して、『視よ、世の罪を救す神の羔』と云へり。

ヨアンネスの入獄

當時ヘロデス王(ヘロデス、アンチパテル)その兄弟ピリップスの妻ヘロヂアデスと名くる者を奪ひ、國內に醜名を流したるにより、ヨアンネスは正言諱まず、諤々として進說す、尙王と面爭して、兄弟の妻を納るゝは宜しからずと曰へしかば、ヘロデス王怒てヨアンネスを捕へしめ、獄に繫げり、時正に紀元三十年の末葉なり、史家ヨセフスは此の監禁の理由を記して曰く、

『ヨアンネス、字は洗者、義人にして、ユデア人に道義を說き、相互の義務を盡さしめんが爲に大に努めたりと云ふ、民多く之を慕ひ、其の道を聽くことを樂めり、ユデア人は其の命を奉じて何事をも企てんとせしかば、ヘロデス王大に之を憂ひ、內訌の起らんことを恐れて、速に此禍を除き、臍を噬むの憂なからんことを期せり。』

ヨアンネスの最期

ヨアンネスは久しく獄に鎖されしが、その弟子は師が此の如き境遇に在るに拘らず、深く之に師事して離れざりき、ヘロデスも之を畏敬したるは、ヨアンネスが深く民に愛慕せられたるを知ればなり、然るにヘロヂアデスは王が早晩之を放免せんことを恐れて、如何にもして之を殺さんものと只管其機會を待ちしに、機會は遂に到來せり、偶々ヘロデス王その誕生の日に當り、朝野の貴顯を招きて、饗宴を開きしとき、ヘロヂアデス先夫ヒリップスとの間に擧げたる女サロメを宴席に遣はし、王及び來賓の面前に舞をなさしむ、王其の舞を見て、御感斜めならず、女に向て求むる所あらば、何にても與へん、我が領分の半に至るとも取らすべしと誓ひたれば、女は直に出でゝ其母に何を求むべきかと曰ひけるに、母は乃ちヨアンネス洗者の首の外、何物をも願ふ勿れと云ふ、女急ぎて宴席に入り來り、王に向ひ、願くば即時此の盆にヨアンネス洗者の首を賜へと曰ひければ、王太く憂ひたれども、既に誓ひたることゝて、來賓の前もあれば、之を拒むことを得ず、王は直に人を遣はし、ヨアンネスの首を斬り來れと命じけるに、頓て其の首を斬り、盆にのせて携へ來れるを女に與ふれば、女は之を其母に與へたり、傳に曰ふ、ヘロヂアデスは針を取りてヨアンネスの舌を刺せりとぞ、時實に紀元三十一二年の変なり。

ヨアンネスの遺骸

ヨアンネスの弟子等師の死を聞きて、之を基督に告げ、來りて其の遺骸を引取りたれども、何處に葬りたるかは、聖書に之を記載せず、然れども、ジュリアヌス、アポスタタ(背教皇帝)の御宇サマリアに其墓ありしと云ひ、土民は之を發きて、遺骨の一部分を燒きたれども、他の部分は基督教者之を收めて、ヒリップスと名くるイエルサレムの僧に呈す、僧之を聖者アタナジウスに進呈せしかば、アタナジウスは一時之を壁の中に入れて、聖器に納め得るの時機を待てり、其後テオドジウス帝セラピス(埃及の神)の寺院を倒し、其代りにヨアンネス洗者の聖堂を建立し、その遺骨匣を此の聖堂に納む、是れ實に紀元三百九十五年乃至三百九十六年なり、ヨアンネス洗者の墓のサマリアに在りしとき、參詣者常に絶えざりしと云ふ。

東洋に於けるヨアンネスの傳說

東洋人もヨアンネス洗者の性行に就て傳ふる所多けれども、正史に記載せざる所を信ぜざる學者に取りては、何等の憑據にもならず、例へばアルコーラン(回教の經典)に此の如き事を記せり、「ザカリアスがマリアの聖殿に祈れるとき、天使神より之に一子を與へんことを約し、之を名けてジャアラと稱すべし、彼は道の證(あかし)を

なすべく、救世主の敎の敎主となるべし、身を持すること清く且聖く、善人系より出づる大預言者となるべし云々。』

彼等は尙ヨアンネスがユデア王の命に依りて首を斬られ、其體より流れ出でたる血は、天がユデアの民を罰して其國を亡ぼすまで、流出を止めざりしと言ひ傳ふれども、是れは比喩の言にして、ヨアンネスの血はイエルサレムが羅馬より滅亡せらるゝ時まで、天罰を要求して止まざりしと云ふ意味なり。

ヨアンネスの聖堂

ヨアンネス洗者の聖堂はダマスコに在りて、基督敎者のみならず、回敎者及びサビエン人の間にも有名なり、此の聖堂は初めヨアンネスの父ザカリアスの爲に建立せられたるものなれども、テオドジウス、ジュニオール帝の御宇ヨアンネスの首のエフェーズに發見せられたるより以來、此の聖堂をヨアンネス洗者の聖堂と稱せり、サビエン人が之を建立して、洗者の首を此の聖堂に納めたりと云ふ、尙傳說に據れば、回々敎主アブダラ、マレク此の聖堂を基督敎者より買收せんと欲したれども、拒絕せられたるが爲に遂に之を奪ひたりとぞ、今は此の聖堂も回敎寺院となれり。

回敎者は福音書に載せらるゝ、基督の言葉を、ヨアンネス洗者の言葉として引用するもの多し、彼等は基督とヨアンネスの對話をも作れり、此等は皆洗者が回敎徒の間にも崇敬せらるゝを證するものなり。

ヨアンネスの偉大なる所以

ヨアンネスの偉大なる使命

(二)ヨアンネス洗者の品評

(1)ヨアンネス洗者の偉大なる所以

基督はヨアンネス洗者を評して、女人より生れ出でたる者の中、ヨアンネス洗者ほど偉大なるものなしと曰ふ、此は極めて適評なり、ヨアンネスの性行を視るに、何れの方面より觀察するも、偉大ならざるはなし、其の使命より見ても偉大、其の德行より見ても偉大、神の前に於ても偉大、人の前に於ても偉大、其の誕生、其の一生及び其の死去に於ても偉大なり。

ヨアンネスは眞の證をなさんが爲に天より特に遣はされたりとは、福音記者の記す所なり、語を換へて言へば救世主を人々に示し、基督の眞の救世主なることを證明せんが爲に生れ出でたるものなり、天のヨアンネスを生じたる所以のもの、豈偶然ならんや、其の使命は古來の預言者の使命に比して遙に優れり、他の預

言者は基督の降生を預言せりと云ふと雖、其の言往々比喩的にして、一種の謎の如き感あり、是を以てユデア人は此等預言者の書を讀みつゝも、眼前に基督の在るあるを見て、己等が先祖以來待ちに待ちたる救生主なることを知らざりき、然るにヨアンネスの世に出づるや、自ら野に叫ぶ聲なりと稱して、大聲疾呼して曰く、天國は既に近けり、救世主は既に地上に在り、後悔を以て之を奉迎せよ、尙明に指し示して曰く、視よ、彼は世を罪の羈絆より救はんが爲に來れる神の羔なりと、即ち常人にあらずして、神の羔なりとて、その神性をも證明せんと欲したるものなり、此の神の羔云々の語は基督の受難當時の光景を追想すれば、如何なる點まで成就せられたるかは、一目瞭然たり、基督が一切人類の罪を贖はんが爲に、世の惡人共の手に引かれて、毫も反抗せず、彼方此方と引き廻はされたる結果僞りの證據人を呼び來りて、虛僞百端、嘘八百を並べしめたれども、基督は敢て一言をも發せず、聖書に謂ふ『基督默せり』の語を以て無限の忍耐力を顯はしたるを聯想すれば、世の罪を救はんが爲に來れる神の羔と云ふヨアンネスの言は、如何に適中せる語なるかを見る可きなり、遮莫、ユデア人は救世主降らば我國を隆盛の絕頂に位せしめて、世界を一統せるに至らんなどと、只管虛榮の夢に迷はされたるが故に、古來預言者の言を聞きても、意味をその方面に曲解して、道近きに在れども、之をさとらず、光、眼前に在れども、之を見る能はざりしかば、ヨアンネスは除ろに彼等の迷夢を醒し、直接道の光を見ること能はざりし彼等の眼を除々とうち開きて、彼等の視力に適當せる曙光にして眞理の明光を示さんことを務めたるものなり、ヨアンネス自らは眞理の光にはあらざりしがその眞理の光に先きだてるものなり、所謂基督の先驅の使命茲に在り、先驅の使命の如何に大なるかを知らんと欲せば、少しく天父の攝理を考察せざるべからず、天父の其子を地上に遣はしたるや、人々にその光榮を示さんが爲なりしが、固より地上の帝王が宮廷の榮華を人に示さんとするの比にあらずして、極めて重大なりしかば、初より自ら天門を出でゝ人を招かず、先づヨアンネスを選びて、先驅の任に當らしめ、之を野の聲として、大聲天國の近づけるを叫ばしめ、之を預言者として、明に基督の眼前に在るをユデア人に告げしむ、夫れ心中の道は一種の思想にして、吾等の精神裡に於て構成せらる、而して之を外に表現するものは聲なり、神子も道にして、天父

の思想なり、而して之を人に發揮したるものは、自ら野の聲と稱せるヨアンネスなり、道は聲を以て之を外に言顯すまでは、深く心中に在るが如く、救世主基督もヨアンネスの世に出でゝ之を證明するまでは、隱れて、人之を知らざりき、嗚呼ヨアンネスは實に眞の證をなさんが爲に世に出でたる偉人なり、今人の基督を救世主なりと知らざる所以、或はヨアンネスの如く野の聲となりて大聲疾呼する者なきが爲にはあらざるか、吾人はヨアンネスの使命の大なるを考ふるにつけても、基督教宣教師の任務の輕からざるを認めざるべからず。

ヨアンネスの偉大なるは、基督に洗禮を施したる點に於ても之を見る可し、ヨアンネスは自ら基督に比して、我は其の靴の紐をすら結ぶに足らざるなりと云へり、然るに基督はヨアンネスより洗禮を受けんとてわざ〳〵ガリレアよりヨルダン川まで來れり、ヨアンネスは固く辭みて我は寧ろ御身より洗禮を受くべき者なるに、曷ぞ御身に洗禮を授くるを得んやと曰ひしに、基督は、暫く許せとて、強てヨアンネスに洗禮を受けんことを請へり、夫れ基督とヨアンネスとは君臣主從の別ありと云ふて可なり、然るに今や主君なる基督が、從臣なるヨアンネスの足下に來りて、平身低頭して洗禮を請ふ、何等の光榮ぞや、且基督に洗禮を授くるには、玉體に觸れざるべからず、基督の玉體に觸るゝは、微臣聖上の身に觸るゝよりも畏れ多き事なりとす、何となれば基督の玉體は皎潔玉の如く清きものなりしかば、之に觸るゝ者も宜しく之に相應しき潔清の者たらざるべからず、彼のマリアは、基督を生み、基督を抱きたる母として、其身は雪よりも白く、其心は崑玉よりも貞しかりき、然るに今やヨアンネスは基督の玉體に觸るゝには、マリアに比して潔清を必要としたり、母は子によりて貴く、マリアの聖き御名は基督の爲に高まりたるものなり、ヨアンネスの德の大なる所以も、亦親しく基督の身に接觸したる點に於て顯はるゝにあらずや、神に接する者は神の如く神々しき者なればなり。

ヨアンネスと偉大なる德行

然れどもヨアンネスの偉大なる點は、その德行の高きによりて尙一層著しく顯はれたりと云はざるべからず、その心中の德は今姑く之を說かず、單に外部に顯はれたる德に就てのみ之を言はん、即ちその後悔、その熱誠、及びその謙遜に就て一言を費さんとす。

(一)ヨアンネスの後悔

ヨアンネスは幼少の折より父の家を出でゝ原野に德を磨きたるものなり、聖書に據れば、身に駱駝の毛衣を着、腰に皮帶をつかね、蝗蟲と野蜜とを食物とせりと云ふ、一說には草根と水とを常食としたりとも云ふ、何れにしても質素なる生活にして、眞に是れ衣は以て身を覆ふに足る、食は以て口を糊するに足ると云ふ主義を實踐躬行したるものなり、嗚呼是れ後悔の極度にあらずや、此の如く生活すること三十歲に至ると云へば、幼時より世に出づるまで苦行難行を執りて後悔の手本を示したるものなり。

(二)ヨアンネスの熱誠

歲三十にして初めて世に出づるや、熱誠の德を以て大に顯はる、大聲疾呼して後悔の洗禮を宣傳したるが故に、時人は之を見てエリアスにあらずやと言へり、エリアスは熱血の預言者として名ある者にして、傳によれば、火の車に乘りて天に昇り、巽日頑冥固陋の惡人を慙愧せしむるが爲に、また再び天より降るべしと云ふ、ヨアンネスはエリアスにはあらずと雖、エリアスの如き精神の預言者なり、即ち惡人に對して火焰を吐きて之に當り、その鋭鋒當る可からざりき、今その一例を擧ぐれば、ファリゼイ人及びサドセイ人の如き僞善の人々に向ては、蝮の子孫よと、獅子吼せり、今や斧は樹の根に加へらる、凡て善果を結ばざる樹は、斫れて火に投げ入れらるべしとて、速に悔悟遷善せずんば、天罰の免るべからざるを嚇したるが如き、何等熱血の言ぞや、心中神の火に燃されたる者にあらずんば、曷ぞ此の如き火焰を吐くを得んや、然れども義に强き者は、愛にやさしき者なり、ヨアンネスの熱誠は慈悲仁愛の熱き心に於ても顯はる、敎訓を受けんとて來れる者に向て說て曰く、二枚の衣を有てる者は、その一枚を衣なき者に與へよ、食ある者は、飢に泣く者を養へよと、何等殊勝の言ぞや、强きを挫く者は弱きを扶く、正しきを愛する者は、曲れるを惡む、ヨアンネスの邪曲を惡むの熱誠は、ヘロデス王の宮殿をも襲へり、王がその兄弟の妻を奪ひ、惡しき手本を民に示すや、斷々乎として其の非を鳴らし、姦淫は斷じて許すべからずとて、身命を賭して王と面爭し、諤々乎として隱す所なく、警々乎として避くる所なかりき、良藥口に苦く、忠言耳に逆ひ、遂に舌禍に罹りて首を斬られ、舌を刺さる、正言諱まず、邪曲を惡むの太甚しき、それ此の如し、嗚呼是れ熱誠の極致にあらずや。

(三)ヨアンネスの謙遜

熱誠は外部に最も著しく顯はるゝ德なれば、謙遜の之に伴ふなくんば、動もすれ

ば虛傲に陷り易し、故に熱誠の全きを保たんと欲すれば、謙遜の德と併せて之を行ひ、己を無き者として正義一片の爲に盡さゞるべからず、聊かにても己の名利の爲にするならば、熱誠は忽ち其の光を損ず、ヨアンネスは當時聖名嘖々として、人皆其高德を嘆美し、或は天より遣はされたる天使ならんと云ひ、或は昔より約束せられたる救世主ならんと云ひ、ユデア人はわざ〳〵ヨアンネスに代表者を遣はして、師は基督にあらずやと問へり、然るにヨアンネスは此の虛榮に投ずる言を排して、我は基督にあらずと答ふ、代表者曰く、然らばエリアスなるか？ヨアンネスは答て曰ふ、否、エリアスにもあらずと——預言者なるかと問へば、預言者にもあらずと云ふ、然らば師は誰なるかと、復命の爲に强てヨアンネスの明答を促しけるとき、ヨアンネスは答へて曰く、我は野に叫ぶ聲のみとて、基督を奉迎する準備をなさしむるが爲に呼ばれる者に過ぎずと云ひ、尙基督は汝等の裡に在りて、我は其の靴の紐をも結ぶに足らざる者なりとの明答を與へたり、嗚呼何ぞ謙遜の太甚しきや、預言者なりと答ふるも不遜にあらず、天より特派せられたる者と云ふも虛傲にあらず、基督の先驅なりと言明するも、亦不可なかりしものを、

ヨアンネスは神の前に於ても偉大なる人物

此種虛榮の念を一切斥けて野の聲と云ひ、基督の靴の紐を結ぶにも及ばざる者と云ふ、謙遜の極致に達したる者にあらずんば、曷ぞ此の如くなるを得んや、夫れ人の稱讃せざるときに當りて、人の譽を希望せざることは易し、然れども擧つて感嘆措かざるに方りて、之を耳にだも聞かざらんとするは、實に難し、ヨアンネスの謙遜の尋常ならざるは、亦以て見る可きなり。

述べて爰に至れば、ヨアンネスの德行に於て偉大なる人物なることもまた、日星炳焉たりと云ふ可し。

ヨアンネスは又神の前に於て偉大なり、此は福音記者のヨアンネスに就て記したる所なり、神の前に於て偉大なりと云ふは、眞實偉大なる人物の價値ある者と云ふ意味なり、世には偉大なる人物と稱せらるゝ者尠からず、然れども果して眞の偉大なる人物なるかは甚だ疑はし、何となれば神の前に於ける偉人ならざる者多ければなり、人の前に於ける偉人は必ずしも神の前に於ける偉人と云ふべからず、神の判斷と人の判斷とは大に異なり、世俗の判斷と正人君子の判斷との間にすら大なる區別ありとて、古より時俗の毀譽褒貶を度外視して、天下百世を

待つと云へる者ある程なれば、神の判斷を期待する者の如きは、固より人の判斷の爲に毫も心を動かさゞるものなり、蓋し人の判斷は往々誤り易く、譽むべき者を毀り、毀るべき者を譽むる例は有勝ちの事なれども、神の判斷は決して誤なく、その褒むる所の人は實際褒む可く、その貶す所の人は實際貶すべき人なり、故に神の前に於ける偉人は實際偉人の價値ある者なり、而してヨアンネスは神の前に於て偉人なりと稱せらる、何等の光榮ぞや、既に神の前に於て偉大なり、一國一民の毀譽褒貶の如き何かあらん、世界萬民擧つて非議するも、稱讃するも、其偉大なる價値に於て何等の損益もなし、神の前に於て偉大なる人物の前には、世界は有れども無きが如し、眞に偉大なる者の眼には、大海の一滴にも如かざるなり、是故に神の前に於て偉大なりと稱せられたるヨアンネスは、世の帝王よりも偉大なり、『至上の子』と稱せられたるも亦宜なる哉。

基督のヨアンネスに對する品評

然らばヨアンネスは果して神の前に於て偉大なる人物なりしか、吾人は之を基督の言に徵せるべからず、基督はヨアンネスを概括的に評して、女人より生れたる者の中ヨアンネスより大なる者を見ずと云ひ、夫よりヨアンネスの個々の德に言及し、先づ其の硬直を衆人の前に稱して曰く、汝等原野に行きて如何なる人を見たるか、風に搖げる葦の如き女々敷き人を見ざるべし、正義を把持して一歩も曲げざる義人を見たるならん、次に其の後悔を讃して曰く、世の艶男（やさをこと）の如く美服を着たる人を見ざるべし、駱駝の衣を着たる人を見たるならん、其の清潔を稱讃するときには、天父より遣はされたる天使なりと云へり、基督のヨアンネスを稱讃するや、實に至れり、盡せりと謂ふ可し。

ヨアンネスは人の前に於ても偉大なる人物

ヨアンネスは又人の前に於ても偉大なる人物として仰がれたり、或者は其の天職の大なるを稱し、或者は其の生活の嚴肅なるを讃し、時人は之を崇拜して救世主の如く思ひ、後世君子の之に對する讃辭亦甚だ多し、今左に其著しきものを紹介すれば、ペートルス、キリゾログスは之を稱讃するに、德の門、聖者の典型、正義の規矩、節操の鏡、潔清の龜鑑、悔悟の宣傳者、世の光、神の證人（あかしびと）と等の語を用ゐ、ベルナルドスは修道士の良師と云ひ、クレタのアンドレアスは惡人の鞭、善人の保護者と云ふ、其他之に類する讃辭は枚擧に遑あらざれども、餘は皆之を略す、蓋し以上の數者に徵するも、ヨアンネスが古今の君子人より偉大なる人物として景仰せ

ヨアンネスは何れの方面よりも見るも偉大なる人物

らるゝを見る可し。

要するにヨアンネスは凡ての點に於て偉大なり、其の父母既に尋常人にあらず、二者孰れも名門の苗裔にして、アーロン家に屬せり、其の名に於ても偉大なる所あり、ザカリアスは永遠の記憶と云ふ義にして、エリザベッドは誓の神と云ふ意なり、二人共に義人にして、道を守ること堅固なりき、斯親にして斯子あるや宜なり、ヨアンネスの誕生は聖殿の祭壇の上に於て報告せらる、之が報告の任に當りたる者は大天使ガブリエルなり、ガブリエルとは神の力と云ふ意義なりと云ふ、大事を告ぐるときにあらざれば、遣はされざる天使なり、而してヨアンネス自身の名は天の恩寵に充ち滿てりと云ふ意味なりと云ふ、母の胎内に在る時より聖靈に滿たさる、基督の先驅として生れ、ユデアに於て幾多の人民を悔悟遷善せしめ、エリアスの精神を以て活動し、强を挫き、弱を扶け、惡を憎み、善を揚げ、富貴も淫する能はず、威武も屈する能はず、國王の姦曲を極諫して、遂に玉と摧けぬ、果然ヨアンネスは尋常人にあらざるなり。

(三)ヨアンネス洗者の敎訓

ヨアンネスの敎訓一にして足らずと雖、茲には基督の先驅として時人に如何なる敎訓を與へたるかを記さゞるべからず、所謂ヨアンネスが野に呼べる聲として大聲疾呼したるものは、イザイアス預言者の書に記せるが如く、『主の道を備へよ、その徑を直くせよ、諸の谷は埋られ、諸の山崗は夷げられ、屈曲たるは直く、崎嶇は易せられ、人々みな神の救を見ることを得ん』と云ふ言即ち是なり。

『主の道を備へよ』

昔はユデア人基督に關する預言書を手に有ちつゝも、基督の眼前に在るだに知らざりき、今人も基督の敎を聽くこと幾回ぞや、然れども未だ基督の何物なるかを知らざる者多し、是れ果して何の爲なるか、他なし、基督を迎ひ、基督を研究する道の準備なきが爲なり、此種の人々に對してヨアンネスは劈頭第一に叫んで曰く、

『主の道を備へよ』と。

基督を認むるに障碍となるものは、吾人の罪惡、情慾、先入、傲慢等なり、故に基督を認めんと欲するには、先づ之等を矯正せざるべからず、抑制せざるべからず、打破せざるべからず、所謂主の道を備ふるとは、即ち此等の事を指して謂ふなり、夫れ

世の帝王を奉迎するにも、道を準備するの必要あり、貴賓を家に迎ふるすら、多少の準備を要す、況んや基督の如き偉大なる人物を心の家に迎ふるに當りて、曷ぞ準備なきを得んや、ユデア人にして基督を認め得たる者の少きは、ヨアンネスの絶叫せる準備を缺きたるが爲なり、今人の基督を知らざる所以も亦之が爲ならずとせんや、故に基督を心中の家に迎ふる準備は極めて必要なりとす、然らばその所謂準備なるものは何くにか存する？ヨアンネスは一々之を敎へ示して曰く、

『その徑を直くせよ』と。

『その徑を直くせよ』

帝王の御巡幸を奉迎するときには、山道の如き曲れる道を直くするの必要あり、基督の如く世の帝王にも優れること萬々なる偉人を我心に奉迎せんと欲するときには、曲れる心を直くして、正直なる人とならざるべからず、正直なる頭に神宿るとは、此の謂なり、世に曲學阿世の學者あり、基督に反對する者は多く此の如き徒なりとす、ヨアンネスの『その徑を直くせよ』と云ふ語は、此種の學者に對しても頂上の一針なり。

『諸の谷は埋められん。』

『諸の谷は埋められん。』

谷とは吾人の心の空缺を指すものにして、神を忘れ、道を怠り、義務を等閑に附する等皆是れ心を空缺にするものなり、而して此等の怠慢忘却は地上の利慾に迷ひ、肉身の快樂に心を奪はるゝ結果なりとす、ユデア人は實に此の如くして基督を認むること能はざりき、今の基督の敎を請はず、福音の光を迎へざる者も、亦之が爲なりとす。

『諸の山崗は夷げられ。』

『諸の山崗は夷げられ。』

山崗とは虛傲を謂ふなり、高慢を謂ふなり、人類は傲慢によりて亡びたり、基督は謙遜を以て之を救はんとせり、故に身貧窮に生る、神は傲慢者流を斥けて、謙遜を揚ぐ、豈獨り神のみならんや、如何なる人と雖、自ら高うする者は、人之をさげ、自卑しとする者は、人之をあぐ、是れ自然の人情なり、既に生れたる基督に接せんと欲する者は、須らく謙遜の心を以て一切の虛傲虛榮を避けざるべからず、高く自ら標置して、我は天下の學者なりと誇言するが如きは、斷じて基督に接する道たあらず、須らく汝の山崗を夷げよ、味ある哉此の言や。

『屈曲たるは直く。』

屈曲たる道を眞直にするの謂にして、屈曲たる道とは僞善、不信、惡意、虛僞等を謂ふなり、此等は、昔ファリゼイ人の惡習惡癖となりたるものにして、之が爲にヨアンネスより蝮の子孫とまで叫ばれたるものなり、基督に接して、正道に入らんと欲する者は、須らく先づ此等の惡德を去り、心を正直にし、意志を眞直にせざるべからず、譎詐百端、嘘を眞らしく見せかくる者は、斷じて眞理の光に接する能はず、世の政治家、外交家にして基督の道を奉ずるの難きは、亦以て見る可きなり。

『屈曲たるは直く』

『崎嶇は易せられ。』

『崎嶇は易せられ。』

險阻なる道を平坦なる道に直すの謂にして、險阻なる道とは强情、剛復、不遜の心、皮肉の言等を謂ふなり、人に接し難き性質、怒り易き氣質、むらな心、感じ易くして忍ぶこと能はざるなども、是れ皆險阻なる道なり、渾心仁愛にして、溫良恭謙、慈悲忍辱の化身たる基督に接せんと欲する者は、宜しく此等の惡質邪癖を矯正して、常に心海の和平を保たんことを務めざるべからず。

『人々皆神の救を見ん。』

『人々皆神の救を見ん』

是れ主の道を備へたる結果にして、此の如く準備したる者は、必ず基督を其の心家に迎ふることを得べく、宿すことをも得べし、基督の降臨を辱うす、何等の光榮ぞ、世の帝王の臨幸を辱うする如きの比にあらざるなり、煩悶せる者基督を認むるを得ば、忽ち慰安を見るべく、邪道に迷へる者基督に接するを得ば、直に迷夢を醒すに至らん、世に眞の慰安となる者、基督を除て、他に之なし、基督は眞理の光なり、人の精神之に接せざる間は五里霧中に彷徨せざるべからず、大聖オグスチヌスが『主よ、御身に休するに至るまで、我心常に不安なりき』と言ひたるも亦之が爲なり。

ヨアンネスの敎訓、解釋すれば、大要此の如し、一篇の主旨脉絡貫通し、『主の道を備へよ』は緒言なり、『人々皆神の救を見ん』は結論なり、緒言と結論の間に於ける言は、本論とも見るべきものにして、基督を迎ふる道の準備とは如何なるものなるかを一々逐條的に解釋したるものなり、其の言ふ所、世の帝王の臨幸を奉迎する時、其の道を如何に準備すべきかに取りたるものにして、比喩極めて巧妙、其の意義も亦深長なり。

(三)基督の父ヨセフ

(一)ヨセフの傳記

ヨセフに關する種々の傳說

基督の父、通常基督の義父と稱するヨセフは、ヤコブスの子にして、マタンの孫に當れり、ヨセフのマリアと結婚せる年齡及び其の生活に就きて種々の說あれども、福音書に載する所のものゝ外は、皆信據するに足らずして、多くは不經の傳說として見るべければ、茲には之を記載せず、然れども古傳に曰ふ、ヨセフはマリアと結婚する以前、他の婦人エスカ若くは同じくマリアと名くるものを妻に娶り、其間に小ヤコブス、即ち聖書に『基督の兄弟』と稱するものを擧ぐと云へども、此の傳說はヨセフが一生獨身に繼續したりと云ふ說と全然相反するが故に、未だ遽に信ずべからず、ヨセフの終生獨身說は、聖書の飜譯者として最も有名なるヒエロニムスが、ヘルウィヂウスに反對して主張したる所にして、此說は今日に至るまで一般に信せらるゝ所なり、小ヤコブスがヨセフとマリアの子なりと云ふ說に據れば、茲に謂ふマリアは聖母の姉ならんと云へども、此說愈々信ずるに足らず、

何となれば、ヤコブスの母なるマリアは、基督が受難の時尙生存したれば、ヨセフは聖母を娶るが爲に、他のマリアを離緣したりと云はざるべからざればなり、然らずとせばヨセフは姉妹二人を妻としたるの奇觀を示し、愈々以て條理に合はぬ話なり。

舊き小說の如き傳なれども、ヨセフとマリアの結婚に就きては左の如き珍らしき話あり、大司祭がマリアの良人となるべき人を選ばんとて、法律に依りてマリアの最も近き親族を集め、競爭嫉怨等の起らぬやうにとて、各人の杖を祭壇に捧げさせて、其中に花の咲きたる杖あらば、その所有主(もちぬし)をマリアの良人となるべき者と定めんとせり、さて翌朝祭壇に往きて見けるに、不思議にもヨセフの杖に百合の如き花開き居たりとぞ、斯くてヨセフはマリアの良人と定まれりと傳ふれども、他の傳說に據れば、ヨセフの杖より雪をも欺く白鳩出でゝ、聖堂の天井をやしばらく飛び廻りて、遂に天にのぼれりとも云へど、此の如き傳說は固より信ずるに足らず、さりながら古より今に傳はるヨセフの繪畫を見れば、手に百合花の咲ける杖の如きものを持てり、こは此の傳說に由るにこそ。

ヨセフ結婚の年齢

ヨセフがマリアと結婚したる年齢につきても、色々の説ありて、今遽に定め難し、エピファヌス及び其他の學者の説に據れば、當時既に八十の坂を越し、先妻の子六人もありたりと云へども、他の學者の説には三十前後にして、心身共に强壯の時期に在りきと云ふ、此等は今より推想して定むべきものにあらざれば、姑く二説を其儘茲に掲ぐることゝしぬ、されど著者の考ふる所を記せば、前者の説く所は餘りに老齢に過ぎ、後者の説く所は餘りに少壯に失する譏ありとす、前説は世故に長け、經驗に富める良人と云ふ理に適合するが如くなれども、今日より考ふれば少しく老耄の嫌なきにあらざるか？後説は母子の期待したる保護の任務を充分盡し得る年齢と云ふ方面に重きを歸したるが如くなれども、斯くては種々の事績に參照して杆格を生ずるの譏を免れず、著者の聞き得たる所は、四十前後と記憶す、此説何れの方面より見ても眞に近きが如し。

ヨセフの性行及職業に關する説

正史の記す所に據れば、ヨセフは義き人にてありきと云ふ、是は其の德を稱讃する辭として、最も大なるものなり、むべ義とは萬德の王にして、萬德を總合すと云ふ意なり、ヨセフはマリアを娶りたれども、マリアが貞獨を守らん決心なりしことを明に知れり、されば、ヨセフも同じ決心を有ちぬ、その住所は常にナザレットに在りけるが、マリアと結婚して後は、特にナザレットを離れざりき、然れども、ヨセフの鄕里に就きては二説ありて、或はカファルナオムと云ふものあり、或はベトレエムなりと云ふものもあり、且つヨセフの職業に就きても區々の説ありて、或は大工なりと云ひ、或は錠匠なりと云ひ、或は又左官なりとも云ふ、さあれど、一般の説には大工を以て職業としたりと傳へらる。

ヨセフとマリアの關係

基督降誕の事は初めヨセフに知られざりしかば、其妻マリアの懷姙せをる見て、驚くこと一方ならず、一度は離緣狀を與へて密にマリアを追出さんとせり、折柄天使ヨセフの夢に現はれて、彼女聖靈に由り一子を生まん、其名をイエズスと名くべし、（イエズスとは救世主の意なり）、其民を罪より救ふべければなりと曰はれしかば、ヨセフも安堵してマリアを家に止めて妻とせりと云ふ、是に由りて之を觀れば、ヨセフは基督の眞の父にはあらずして、父は他に在ること明かなれども、天使の言葉によりて父の權はヨセフに讓られたるが故に、生兒の命名は既にヨセフに托せられて、其名をイエズスと名くべしとまで命ぜらる、此命名の意味を

推究すれば、爾は基督の父となりて之を愛育すべし、基督も亦爾の子となりて爾に孝行を盡すべし、マリアは聖靈の奇特に由りて孕めりと雖、爾と結婚したるものなれば、依然爾の妻にして、爾は正さしく其の夫なり、故に爾とマリアは基督に對しては父母となりて、之を愛撫せよと云ふ意を包含すと、基督教の學者は皆斯く說を立てり。

ヨセフ妻兒を携へて避難

其後六ケ月程經てヨセフは妻マリアと共に鄕里ベトレエムに往かざるべからざる必要起りたり、其故はアヴグストス皇帝が天下の戶籍を調査する詔命を發し、廣大なる版圖內の人々に各々其本地に就て族籍を報記せしめたればなり、ヨセフ夫妻も此時ベトレエムに住きしが、マリアは折しも產期滿ちて基督を生めり、基督の生後四十日を經て、ヨセフとマリアは生兒をイエルサレムに携へ住きてモイゼスの律法に從ひその命ずる式を行ひぬ、夫よりベトレエムに歸らんとせしも、ヘロデス王生兒を殺さんと企てたるが故に、ヨセフは妻子を携へてエジプトに難を避く、斯くてヨセフ一家はエジプトに幾年間滯在せしか詳ならざれども、永くは滯在せざりしと思はる、そは、ヘロデス王が無辜の嬰兒を殺してより、程なく崩御したればなり。

ヨセフ夫妻の歸國

ヘロデス王の崩御後ヨセフは再びユデアに歸りしが、ヘロデスに繼いでアルケラウス位に即けるを聞き、王も亦父王の殘忍なる性を承くるにあらずやを氣遣ひて、イエルサレム又はベトレエムに歸らずして、ガリレアのナザレットに住けり、ガリレアはアルケラウスの管轄にあらず、ヘロデス、アンチパテルの所領なりけるが故なり、其よりナザレットに一生住居し、日々大工の職業を執りて質素なる生活を送りたれども、行正しく、律法を守ること堅固なりき、基督十二歲の折マリアと共に兒を伴ひてイエルサレムに參詣せしとき、三日間兒を見失ひて、悲む事大かたならず、三日目に兒を聖殿に認めしが、兒の學者等と議論せるを見て、母マリアの曰けるやう、『兒よ、何故斯くなせしや、爾の父と我と憂て爾を尋ねたり』、基督返答て曰く、『何故われを尋ね給ふか、我は我父の事を務むべきを知らず在するや』、他の飜譯に據れば、『我を尋ぬべき所は我父の家なりしを知り給はずや』と記せり、然れどもヨセフもマリアも基督の語る所何の意なるかを曉らざりしが、兒は兩親に伴はれて歸れり。

ヨセフの死去

ヨセフの事柄に就きて正史の記す所に依れば、ヨセフは基督が御教を弘め初むる以前に死したりと云ふ、こは確かなる說ならん、カナに婚禮ありし折、ヨセフは祝言の席にすら在らざれば、基督が宣教の際何處にだも見えず、ましてや基督十字架上に在つて門弟ヨアンネスにその母を托せしかど、若しヨセフが存命したらんには、曷ぞ夫ある妻を人に托するが如きことをやせん、考古學者の言ふ所に據れば、ヨセフの墓はイエルサレムの東に當るヨサファットに在りと云ふ、さりながら昔の學者は之を說かず、又ヨセフの遺骨は何處にも認め得ざれども、家具及び婚姻の指環とおぼしきもの、イタリアのペルーズに在りと傳ふる者あり。

ヨセフの偉大なる品位

(II)ヨセフの品評

(1)ヨセフの偉大なる品位

ヨセフの職業は大工にして、生活は貧し、されどその品位の偉大なる、實に世に比類なけん、その故はヨセフはマリアの良人、しかも基督の義父にして、聖族の家長たる資格を有すればなり。

ヨセフとマリアは結婚して夫婦とはなりたれども、二聖共に貞獨の生活を送りて、肉の交をさなさゞりし、此の妙則は必ずしもヨセフ夫婦のみに限るにあらず、世に清き夫婦にして、ヨセフの如く結婚後貞潔なる生活を送りて、肉交せざる者數多あり、例へばセシリアとワレリアヌスの如き、ユリアヌスとハジリッサの如き、ブルケリア后とマルシアヌス皇帝の如き、ヘンリ王とクネゴンダ后の如き、孰れも貞潔を守りたる人々なり、其他にも此の如き例はあれども、此處には略す、世間一般の人々は此の如き夫婦を見れば、夫婦の名ありて、その實なき者と云はん、然れども肉交は必ずしも夫婦の必須なる條件にはあらざるなり。

(1)ヨセフ結婚の理由

遮莫、ヨセフがマリアと結婚後お互に獨身生活を送りたりとすれば、何故マリアの良人となりたるか、その理由色々あり、其中に最も重なるもの二ッ三ッを揭ぐれば、第一ユデアにては良人なくして子を生む女は、石にて打ち殺さるゝ法律ありしが故に、ヨセフのマリアと結婚せしは、母子の面目を保たんが爲なりき、第二マリアは生てより一生の間、分けてもエジプトに避難したる時の如き、非常の場合に於ては、相談相手となり、扶助となり、慰安となる者を要したるが故に、年老いて世故に長け、經驗に富めるヨセフはマリアの良人として、能く此等の必要に應

じたり、トマス、アクイナスは宗教上の理由を掲げて曰く、神はヨセフ夫婦の手本を示して、結婚と貞獨の水火相容れざるものにあらざることを證明せりとて、結婚の成立を解釋して曰ふには、婚姻は相互の合意に在りて、肉交の有無の如きは多く關せず、之を行ふと行はざるとは、夫婦の自由にして、結婚の必要條件にはあらずと云へり。

(2)ヨセフはマリアの淨配

マリアが基督の母となりたるは非常の榮譽なると同時に、ヨセフがマリアの良人となりたるも亦非常なる榮譽なり、世にヨセフを崇めて聖母マリアの淨配と稱す、淨配の稱はヨセフの品位に適合する名稱なり、そはヨセフとマリアの交情は世の夫婦の交情と異なりて、肉交を離れたる實に清く聖き情交なり、マリアがヨセフを良人と定むるに決したるは、其の心の如何に清く、其の行の如何に正しきかを知りたればなり、ヨセフの德操はマリアの貞操に比して、毫も耻る所なく、二聖共其志は秋霜よりも烈しく、其心は崑玉よりも貞しかりき、世には清き夫婦の例乏しからざれども、吾人はヨセフとマリアの如き清き夫婦を見ず、宜なる哉二千年後の今日に至るまで貞節の化身、聖配の典型として世界億兆の崇敬を受くるや。

(3)ヨセフは基督の義父

ヨセフは聖母マリアの淨配に選ばれたるさへ既に榮譽大かたならざるに、尙基督の義父となりて基督を抱き育て奉りしは、此上なき榮譽と云はざるべからず、身は大工の職を執りながら、古今獨歩の偉人を子とし、之に對して忌憚なく父の權を行ひたり、偉人基督も亦子として何事もヨセフの命に從ひたるは、史上に類例なき事なり、正史を見るに、基督十三歳の折父母之を見失ひ、三日目にイエルサレムの聖殿に於て之を認めたるときの如きも、聖母は爾の父と我は太く心配して爾を尋ねたりとて、父母の權利を以て基督を咎め給へば、基督は命に服し、父母に伴はれて歸りたりと云ふ、之より先き基督が割禮を受けしとき、ヨセフは父の資格を以てイエズスと云ふ名を命じ、四十日目には父として基督をイエルサレムの聖殿に携へて、參詣なしぬ、基督幼少の折には其泣き叫びを靜めたることもあるべく、その涙を拭ひたることもあるべく、その悲みを慰めたることもあるべし、匐へば立て、立てば歩めと、ヨセフがマリアと共に偉人に之を敎へたるは、世の父母が其のはぐゝむ愛兒に敎ふると何ぞ異ならんや、分けてもヘロデス王が怒

りてベトレエムに於ける二歳以下の嬰兒を殺さんとせしときには、ヨセフは逸早くマリアと基督を驢馬に乘せ參らせて、自らつなをとりてエジプトに難を避けたるが如き、父として愛兒の危急なる場合に於ける心勞一方ならざりしと云ふべし、ヨセフはまた父として額に汗水流して働きつゝ、偉人母子を養ひ、衣食住の計を一身に引受けたるや明なり、此等は珍らしき天の攝理として見るべし、偉人の幼年時代、偉人の家庭生活は凡べてヨセフの身に係れり、世には偉人の偉業を稱讃するとき、必ず其の功を父母に歸し、父母の賜なりと云ふ、基督の偉業を見るとき、吾人はその父母の功を忘るゝ能はず、ヨセフは父の權利と義務とを世にも珍らしき妻子の爲に圓滿に盡したる點に於て、その品位の偉大なるを認めざるべからず、マリアが之を良人として仕へ、基督が之を父として敬ひたるも亦道理なり。

(4)ヨセフは聖族の家長

基督とマリアとヨセフの御三人を稱して世に之をナザレットの聖族と云ふ、三位一體の妙理は吾等此世に於ては知る能はずと雖、ナザレットの聖族の如きは實に此世に於ける三位一體の妙理を實現したるものと云ふべし、而して所謂天父の任はヨセフが地上に於て行ひたり、權利ありし者命令を下せし者はヨセフにして、ヨセフは家長たりき、マリアは之に當らず、妻子を養ひて之を保護したる者は實にヨセフなり、此の意味に於てヨセフは地上に於ける天父の代理者なり、ヨセフの品位の高く且大なるは正しく茲に在りとす。

ヨセフの偉大なる德行

(2)ヨセフの偉大なる德行

ヨセフの品位の偉大なる所以は以上述ぶるが如し、然れどもヨセフが此の如く偉大なる品位に上りて、マリアの良人となり、基督の義父となり、聖族の家長となるを得たる所以は、そも何の爲なるかと云へば、其の德行の常人にすぐれたる所ありたるが爲にあらずして何ぞや、實際ヨセフの德行は最高の程度に達したるものなり。

(1)ヨセフの聖德一斑

正史にはヨセフの義人なりしことを記せり、而して義德は萬德の王にして、一切の德を總合するものなり、義人たりと云ふことは、一種の德を備ふるの謂にあらずして、萬德を備具するの謂なり、隨て一德一行に秀でたるにあらずして、萬德萬行に優れて、圓滿具足の聖人を意味するものなり、人多くの財貨を蓄ふと雖、汝の

みは萬ての人に超越すと云ふ語は、ヨセフに適中する語なり、ヨセフは金に乏しきも德に富めり、スアレーズと云ふ偉大なる神學者の說に據れば、ヨセフの德は基督の先驅者ヨアンネスの德にも優れりと云ふ其故は基督の父となると云ふことは、基督の先驅者となるよりも確に大なる事と云はざるべからず、是を以てベルナルドスはヨセフを以て萬德に秀でゝ、その絕頂に位すと絕叫せり。

(2)ヨセフの德域進境

ヨセフの字義は『增進』の意味なりと云ふ、德益々高く、道益々深く、向上發展して、日々圓滿の域に近くことを示すものなり、名は實の賓なりと云ふ、實際ヨセフは日夜マリアと基督とに接觸して、偉大なる妻子と交はりたるが故に、その道德に進境せること、毫も怪むに足らず、諺にも朱に交れば赤くなると云へば、神の如き人物に交はるものは、己も亦神に近くなるに至ることは、自然の事なり、苟も基督の如何なる人物なるかを知るものは、之と父子の關係あるヨセフが日夕之に交りて、如何程聖德の域に進みたるかを見るべきなり、又マリアの如何なる婦人なるかを見れば、之と夫婦の契を結びたるヨセフが朝な夕な之と語りて、如何に德を勵み、行を磨きたるかを知る可きなり、ナザレットの聖族が神聖なる家庭の模範と仰がるゝ所以のものは、即ち之が爲なり。

(3)ヨセフの特殊の德行

ヨセフは萬德を最高の程度に具備したりと雖、其の中吾人の最も注意すべき德は、信仰、恩愛、潔白、謙遜等なりとす、ヨセフはガブリエル大天使の言葉を信じて、マリアが聖靈の奇特によりて一子を生むことを即時に信じたりき、今人は此の如きことを千たび百たびきかさるゝも、信を措く者甚だ少なし、ヨセフは基督を抱き、養ひ、育て、之を撫して日夜恩愛の心に燃されたるものなれば、基督の爲には如何なる辛苦艱難をも忍び、基督の身の危かりしときには、難をエジプトに避けて、遠く異鄕に住居することをも辭せざりき、今の時誰か基督の爲に此の如く苦楚艱難を嘗むる者あらんや、ヨセフはマリアと夫婦の契を結びつゝ、二人相共に貞潔の生活を送り、情交日に厚く、肉交の如きは夢寐にだも想像せざりき、その潔白の德こそ實に今人の想像し得ざる所なれや、ヨセフはマリアを妻とし、基督を子とするの榮譽を有しながら、自らは一生大工の職を執りて、隱晦の生を送り、寸毫も誇りがましき言動を示さゞりき、その謙遜の深きこと感佩に餘りあり、此の如くヨセフの德を一々考ふるときは、何れも皆之を最高の程度に具し、後世修德の

士に理想の典型を示すものなり、偉なる哉ヨセフの德行や。

(3)ヨセフスの偉大なる權勢

ヨセフの偉大なる權勢

『之を家司となす』とは、詩篇第百四章に記す所なるが、こはヨセフに該當する語なり、昔はエジプト王ファラオ、ヨセフなる者を信任し、天下の大權を之に授け、萬事其の意の如く行はしめたりと云ふ、今や天は同名のヨセフを選びて、ナザレットの家司となし、聖族を之に托して、何事も其の意の如く行はしめ、今日ナザレットの聖族を手本とする世界萬國に於ける基督教會の大守護者となせり、その權勢や大なりと云はざるべからず、左に少しく此の權勢の本源、範圍及びその普及法を考究せんと欲す。

(1)ヨセフの權勢の本源

凡そ信用と云ふものは主として敬重と愛眷とに基くものなり、エジプト王ファラオがヨセフを信任したるは、其の賢明なる德を敬重したるが爲なり、昔のヨセフが天下を治むる大權を托せられたるは、全くファラオが深く其德を敬重したる結果なりとす、今やヨセフは至聖なるマリアと偉大なる基督の身を托せられて、聖族の家長となりたるを見れば、如何に天より敬重せられたるかを知る可し、世の帝王もその王子を人に托せんとするときには、知德衆人に傑出する者を選ぶを常とす、而して基督は天よりヨセフに托せられたる天の王子にあらずして何ぞや、ヨセフが天の御覺えの目出度きは、之を見ても知らる、然れども尊敬の念のみにして、愛眷の情なきときは、未だ人を信用するものにあらず、敬の分子に愛の分子の加はるに及んで、始めて何事も胸襟を開いて之を打ち任するに至るは、是れ世の常なり、天のヨセフを信任したるも亦此の如し、夫れ天地神人の愛を博する者は、如何なる人なるかと云はゞ、謙遜なる者、潔白なる者、忠誠なる者即ち是なり、然るに世にはヨセフよりも謙遜なる者、潔白なる者、忠誠なる者何くに在りや、福音書には天父は謙遜なる者にあらざれば、之に天國の秘密をあらはさずと記せり、ヨセフは極めて謙遜なる者なりしかば、神子托生の玄義は第一着に天より啓示せられぬ、基督は門弟の中ヨアンネスを最も寵愛したりと云ふ、これはヨアンネスが獨身にて甚だ清き青年なりしが故なり、ヨアンネスはその心身の潔白なりしが爲に、高弟ペートルスの聞くことを得ざる所までも、基督に抱かれて之を聞くを得たりとは、福音書を讀める者の皆能く記憶する所なり、ヨセフはヨアン

ネスと年齢こそ異なれ、結婚後にも獨身にて潔白の生活を送りたる點に於てはヨアンネスと大に相類す、是れヨセフが基督を幼少の折より抱き參らせて、之を愛したると同時に、自らも基督より最も深く愛せられ、所謂父子恩愛の紲につながれ、切つても切れぬ緣となりたる所以なり、忠誠の德に至りては、世ヨセフに及ぶ者なかるべし、神の母子を托せられて、之を天の重寶と心得、一點も瑕瑾なく保たんが爲に、戰々競々として、宛然滿てるを奉ぜるが如き有樣なりき、基督より慈父として愛し慕はれたるは、全く此の忠誠の爲なり、ヨセフが此の如く天より信任せられたるは、即ち是れその大權の因て出でたる所以なりとす。

(2) ヨセフの權勢の範圍

今や基督の偉業は全世界に布かれ、渾圓球上幾億千萬の隨喜者を有す、之と同時にヨセフは基督の父として世界萬國の基督敎會より大守護者として崇敬せらる、その權勢の大なる、啞々の言を費さずして知る可し、基督敎會に於てヨセフを大守護者とする所以は、基督敎會其物はナザレットの聖族の發展したるものに外ならずして、ナザレットの聖族を保護したる者はヨセフなれば、今日の基督敎會の保護者も當然ヨセフならざるべからざれども、基督の在世中ヨセフが父として何事を命ずるも、基督は子として何事も之に從はざるはなかりき、今日に於てもヨセフの意志は基督によりて行はれ、病氣等の平癒は姑く言はず、心海の平和、煩悶の慰藉、罪惡の悔悟、道德の修養等、ヨセフに對する崇敬によりて、不思議の靈驗を生ずること、ヨセフ崇敬者の皆實證する所なり、語を換へて言へば、ヨセフの權勢は今仍世界の精神界及び道德界に廣く行はるゝと云はざるべからず。

(3) ヨセフの權勢の普及する道

然れどもヨセフスの權勢は强制的に行はるゝものにあらず、德者が人を薰化する如く、自然に心より心に傳はるものなり、ヨセフは慈父なり、マリアを妻とし、基督を子とし、一生情愛と恩愛の溫き生活を送りたるものなり、ナザレットの聖族とはヨセフとマリアと基督の三聖の清く溫き家庭に外ならず、此の清く溫き家庭が發展して基督敎會となりたるものなれば、ヨセフの權勢は愛によりて全世界に普及したるものなり、大神學者トーマス、アクイナス曰く、愛は散ずるの性を帶ぶと、魯の聖人が德孤ならずと云へるよりも、意更に深し、愛を麝香に譬へんか、今玆に麝香一塊を取り來りて、一室に置かば、香氣散じて、滿室馥郁たるべし、愛も亦此の如きものなり、一人の愛は散じて萬人を薰化し、全世界に德香馥郁たらむ、此

の意味によりてヨセフの德はナザレットの聖き家庭より普く全世界の基督敎會に傳り、今尙幾百千萬の修德の士を出しつゝあり、威武を以て行はるゝ權勢と德風によりて傳はるゝ權勢とは大に其趣を異にし、一は一時に止まり、他は永久に及ぶ、一は强服せしめて、他は心服せしむ、而してヨセフの權勢は人を心服せしむるものなり、何となればヨセフ崇拜家は心より同聖を敬ひ、其德を模範として之に則らんことを務むればなり、此の如き崇拜家のあらん限り、ヨセフの權勢は永久に傳はるべし。

(四)基督の母マリア

(一)マリアの傳記

(一)生——幼時

基督の母をマリアと名くることは、今更改めて言ふ迄もなし、世にマリアと云ふ名を受けしは、僅な其女と適應せざるはなし、彼のシリア國にては皇后、女王と云ふ意なり、ヘブレア語にては海の星と云ふ義なるも、何故マリアを海の星と呼ぶか、假令ば海を渡る人の如きは、東西南北を知らず、只々北の方にある星を仰ぎ望みて、船を目的地に引導するが如し、マリアも此の浮世の人々の取次にして、天國の港に引導する故を以て、之を海の星と云ふとぞ、斯く尊貴なるマリアの御父は、ヨアキンとて、ユデア國民の創業者たるアブラハムの後胤及び同國諸王の始祖なるダヴィド王の苗裔にして、マタと云ふ人の子なり、又御母をアンナと呼びて、レヴィ族にて、古敎の大聖モイゼスの兄なるアーロンの家、世々ベトレエムの司祭職マタンと云ふ人の長女なり、ヨアキンと相婚せしは、未だ年若き時にて、其後幾久しく送れど、子なき故、太く悲みたり、并は其國にて婦人の子なきは、是れ罪の罰なりと大に之を惡み嫌ふて耻となせる故なり、夫婦は素より正しき者なる故、之を深く恐れ居たり、此のアンナの家は世々連綿として司祭職の家柄なれども、今は昔の華麗を失ひて、零落したり、然れど良夫ヨアキンは其令名と善行とを以て、終始能く其妻の尊貴を保たしめぬ、ヨアキンは左して富裕と云ふには非らざれども、夫れ相應の資產を有して、能くアンナの缺乏を補ひたり、嘗て自ら資產を分けて以て三ッとなし、一を以て貧者の爲となし、一を以て自分の生活且つ家僕等の

マリアの父母

父母なきを憂へて之を天に祈る

爲となしたり、左れども彼れ及び其の妻アンナの子なきを太く憂へて屢々神に歎き訴へて一子を玉はらん事を願ひ、若し幸に之あるを得ば、必ず秘せずして、生涯神の爲に仕ひしめんとぞ誓願しける、或時夫婦相計りて神に祈りを爲さんが爲、暫し相別るゝ事を定めたり、ヨアキンは常に牛馬羊豕を牧し居りしが、家僕等と倶に一の村落に移住して、牧畜を生業として信心をぞなしにける、アンナは則ちガリレアなるナザレットの家に止り、朝夕祈をりなしけるが、或時アンナ庭園の中に最美しき雛六ッ有りて、母鳥の養へを受けて育ち居る有樣の最樂しげなるを見て、獨語して曰く、『嗚呼幸なる哉、己が身を慰むる數多の子を持てり、程なく夥多の子は又母鳥に傚ふて能く舌もて神を譽るならん、我は我が老を慰むべき子とてはなし』と、斯の如く最悲みて、『神よ、哀れ願くは愚婦を以て聖名を譽め得る處の一子を玉へかし』と祈るにぞ、其祈り空しからずして、終に天の默示を蒙り、程なく天の恩寵に滿されて、普く世界中の極めて尊き者たるべき一女子を擧ぐべきを知りぬ、然るにヨアキンも亦彼處の村落にありて、同樣なる默示を蒙りしにより、直に我家に歸られしが、天は毫末も人を欺き玉はざるにより、果して其翌年九月八日に玉の如き一女子を安々と生めり、此は啻に夫婦の悅び大方ならざる而已ならず、全世界上の大なる悅とはなりぬ、夫れは出生の始めより特別なる天寵を蒙りて、更に原罪の汚れを受けず、全然清潔なる者にして、救世主基督の母となるべき者なればなり、アンナはモイゼスの掟に則り、都て婦人子を產みたる時、其の子若し男子なれば、其の母は必ず七日間他の人と交際を絶つべき筈なり、又八日目に及び其の子に名を命じたる後、尙又三十三日間其母は聖殿に行き祭祀等に與る事能はざる規定なり、而して其の子若し女子なれば、其の母は十四日間全く他の人と交際を絶ち、十五日目に及び其子に名を命じたる後、尙六十六日間其の母は聖殿に行き祭祀等に與る事能はざりき、然れども男子なれば四十日、女子なれば八十日目に及び、其の母甫めて其子を抱き、聖殿に行き、子の爲には羔羊、自分の爲には雌鳩、或は山鴿の雛を各々一ッ宛捧げて、以て其產婦の汚れを淸めらるべきことを謝する規則なり、去れど若し其子の爲に捧ぐる事能はざる時は、或は山鳩或は二羽の雛鳩を捧ぐるも隨意なりき、去ればアンナは往昔の掟に順ひ、其月十五日に至り、甫めてマリアと云ふ名を命じぬ、後又十日目に至り、其母アンナ

玉の如き女子生る

舊約時代に於ける宮參の規則

マリアの命名

聖堂に奉献せらる

はマリアを抱きイエルサレムの聖殿に至り、其時一年を經たる羔羊一疋と雌鳩一羽を献納し、羔羊をば焚き、祈禱の爲聖殿の祭壇の上に捧げ、自己の爲には雌鳩一羽を司祭に與へ、以て其の祈禱を請はれたり、此時司祭は祈求して產婦の穢を除き清めたり、其後アンナは其女マリアと倶に三ヶ年間ガリレアのナザレットに居り、或は又ユデアのイエルサレムに居りて、其女子を愛する事掌中の珠玉の如く慈しみ、明昏蝶よ花よと養育しけるに、成長するに隨ひ、益々善行に進み、幼より遊戲を好まず、頓て三歳になりけるに、元來此女子を天より賜はらんとを祈りし時、若し幸に之あるを得ば、必ず聖殿に捧げんとを約束せしにより、未だ三歳未滿なれども、其年十一月二十一日を以て兩親と共にイエルサレムの聖殿に詣り、神に其身を奉献せり、兒は聖殿の傍にある修房に入りて其身を修めしが、是より以後家にかへらず、そもユデア國人中にては人を奉献するの仕方種々ありたり、或は人々神に奉事する爲とて、自ら其身を聖殿に献して後、又其年齡と其豫定せし年限とに應じて、銀錢を出して以て其身を償ひ戻す事あり、都て男子五歳より二十歳迄は銀錢二十枚、女子は只十枚の定りなり、又男子二十歳より六十歳迄銀錢五十枚、女子は同年齡にて三十枚なり、マリア等は斯の如く、若干の金を出して以て其身を償ひ戻せしは、其の人々僉な奉事の爲め實際聖殿内に止り居らずと云ふも、其の奉献の功を失はざらんが爲なり、即ち彼の多くの人々皆聖殿に住み養はるゝ事能はず、又其場所だになく、且つ此は容易ならざる事なればなり、右の外又其親を捧ぐる事ありて、或は其期限を定むるに其死に至る迄を以てし、後又金を出して之を償ひ戻す事ありき、聖殿に捧げられし幼女等は、聖殿の如何なる處に住み居りしかと云ふに、先づ彼のイエルサレムの聖殿は今日諸國になる聖堂の如き規模小なるものにてはあらずして、最廣き四角なる形狀をなし、殆どイエルサレム全地の八分に近かりき、其の中央は聖處と云ひ、是れ即ち神の御家、所謂眞の聖殿なる者なり、此所は素より左程廣大には非ずして、司祭の外何人にても決して此内に入る事能はず、而して其門は東の方に有り、又其門の前には祭祀の露臺あり、其の有樣は宛も四角なる大爐の如きものにして、其内には絶間なく燔火の煙り朦朧と立登れり、之は人々が天に献ぐる羔羊雌鳩及び其他のもの皆此所に焚燒して捧げたればなり、祭壇と聖所とを圍める處は、其間屋根なくして、恰

聖堂に奉献せられたる者の居室

聖堂に奉仕する利益

も一の廣き庭園の如く、其内にはユデア人の爲に定めたる一の場所あり、其稍遠き所には、國人に非ざる者が拜禮祭祀等に預かる爲に定めたる一の場所あり、而して其周圍は最も宏大に又最も堅牢に造られたり、其四方は各々一ッ宛の大門あり、此は人の出入に備へたり、蓋し此の建物は殆ど一の大なる御城と同樣なる觀を呈せり、此の聖殿の壯觀は人をして世界七奇の一と呼ばしめたり、此の建物中の最も前には殿司なる者住居せり、此は將校の如き者にて、兵士等と倶に聖殿を守り、又は人民か聖殿に群集する時之を治むる者なり、又其内に司祭及び副祭等も住居せり、司祭の所には祭典抔に必要なる物品器具を藏めたり、其又傍に人々が修飾する爲、或は寡婦孤獨を助くる爲に捧ぐる物品金銀等を藏め置く處あり、而して其終りに當りて『タベルナクロム』と云へる聖櫃を守り居たる婦人の爲に、特別なる一室あり、此婦人の間に於て兒女及びマリアの如き幼女が養育を受けたり、此の幼女等が聖殿内に住ひたる事は、其の女子の爲に大に利益あり、即ち彼等は其の幼少の時より能く信仰を以て成長し、自ら敎の法則を熟知し、且つ之を實行するに慣れ、又其の幼少の美しき純善の德は、父母の家に在るよりも尙安全に之を保存し得られたるなり、蓋し世間の父母たる者は往々其子の惡き習慣等に對して、充分に其の防禦をなし得ざる事は、世の人々の能く知る處なり、右の風習は甚だ善良なる者にして、尙今時に至りても天主敎の修道院の内に在せり、即ち貴門良家に於て女子あれば、修道院の學校に入れて、其の幼き時より修道女の側に成長せしめ、之に善良なる純潔の敎育を受けしむるものなり、偖又幼女等は聖殿内に住みて如何なる事を成し居りしかと云ふに、彼のマリアは世の名譽財寶を捨て、永久神に仕ひ奉らん事を誓願し、且つ童貞不犯の誓を立て、其の謹愼、謙遜、從順、忍耐、節制、信仰等の諸德の如きは、世の人の間に恐くは比較する者非ざるべし、古書にマリアに就て記して曰く、マリアは只肉身のみ童貞に非ず、其の精神も亦童貞なり、而して其心謙り、其口を愼み、其の動作賢く、常に語る事少なふして、聖書を讀む事多し、又深き注意を加へて働き、又言ふべき事あれば羞耻の心を以て之を語り、其の善行の著しき事他に比類を見ざりき云々と、其働きたる事は如何なる事なりしかと云ふに、彼の有名なるサロモン王の書に曰く、昔時彼のユデア國の女人等が日々勤めし所の者は、獸毛と麻絲等を求め之を紡き且織る事

聖堂に奉献せられたる者の生活

マリアの聖堂に於ける生活

を習はしむ又は絲卷を取り又は己の爲に縫箔の衣裳を造り、又は紫の麻衣を穿てり云々と、此等は咸な彼の國の女人たる者の習慣なり、而して彼の聖殿に住み居りし幼女等が成し居たる事も、右と同樣にして、專ら布を織り、或は衣服を制し、或は彌縫洗濯に從事し、又は司祭等の用に備ふる聖服等を造れり、其他又經文を誦し、或は聖歌を詠じ、或は講說を聽き、又は聖書を讀む等なり、マリアは素より五體六根三司七情生命迄も悉く委ねたるが故に、聖殿の掃除は更なり、其他如何なる賤しき業なりとも、僉な之を踐行したり、聖殿に同寓せる婦女許多ありしが、別してマリアは博愛を施し、依怙贔員なく、寡婦たる貞女の言葉を重じ、溫和の振舞、堪忍の慈情を示し、誠に女人たるの鑑となりたり、今舊約聖書を繙くに、彼のサムエルの母もアンナと呼びて、其子なきが爲神に祈求し、若し幸に一子を與へ玉はば、必らず其子を以て一生の間神に獻じ奉らんと願望し、終に一子則ち彼のサムエルを得たりければ、程なく其約束に違はず、最と幼き子をイエルサレムの聖殿に獻じたり、後ちサムエルは天の聖意を默示せらるゝ忠實なる預言者となるに至る迄、終始聖殿の內に在りて、麻にて造れる衣紡(イフオー)(禮拜の時に着くる物にて肩と胴とを掩ふ衣服)を着けて、善く神に奉事し居たり、マリアも又彼のサムエルの如く幼き頃より聖殿に捧げられ、凡そ十四歲に至る迄イエルサレムの聖殿內に生活し居たりとぞ、蓋し彼の國に於ては女子都て十四歲に至るを以て婚期とす。

ユデアの女人救世主の母たるを夢想する

(2)婚儀——懷胎

他の女人が誰も受けざる聖惠(みめぐみ)を蒙りしマリアは、其の幼少の頃よりして能く忠實を以て密に天恩に酬ゐ、又蚤く決定せられたる天選便ち救世主の母となる可き事に對して、それとは知らざれども、能く其の預備をぞなしたりける、是れマリアが他の女人と遙に其の選を異にしたる處にして、ユデア國の女人は誰か榮譽なる救世主の母とならん事を望まざる者あらんや、蓋し其の國人より救世主降生するならんとの預言ありたればなり、之に反してマリアは其の深き謙遜と其の純潔なる貞獨の誓願とによりて、母となるの意志あらざりしは言を待たざる所なれども、左りとて救世主を希望せざるに非ざるは勿論なり、但だ自分の微賤なるを知りたるが故に、其謙遜の德より自ら此の如き事には心を傾けざりき、然れども是れぞ正さしく他の女人の外に特別なる恩寵を蒙りて、救世主の母となり

りたる所以なれ、マリアの生れし時父母は最早老年なりければ、マリアが尙聖殿内に居りたる間に兩親は此世を去りしが故、爾後マリアは全く聖殿の司祭等の保護を受くる事となれり、尙マリアが芳紀十三四歳に達する頃、其の敎官、其の親族、格別マリアの從兄弟なりし司祭ザカリアスの如き人は、マリアの爲に其の良人を求めん事を考へ居たり、故に或時マリアを召し聟取又は嫁入せしめん事を語りたるに、マリアは之を聽き大に驚き辭みて曰く、我が爲に謀り玉ふは誠に忝なくは候へども、但だ我身は兩親より神に捧げられし而已ならず、我も亦自ら身を終ふる迄貞獨の生活を送らん事を誓ひたれば、決して他に嫁する事を得ずと答へり、司祭敎官等は之を聽き、初てマリアの決心の堅きを知りて深く歎賞したり、茲に聖祖アブラハムより三十九世の孫ダヴィド聖王より二十六代の後胤に當れるヤコブスの子にヨセフと云へる聖人あり、頗る名門の出なれど、當時は有爲轉變の世の習に因りて太く貧困を極め、ガリレアに於て大工の賤業を營めり、其人謙遜にして信、望、愛、敬の諸德一も缺けたる處なく、當世類なき善人なりき、故に彼の國に於て諸德完備の人として義者なりと云ひ傳へり、一說にヨセフは鐵工師なりと云ふ、然れど一般の說にては木工なりとするが故に、通常ヨセフを以て大工なりとす、又彼のユデア國人は他の國人と異りて、大率ね勞働を以て罪贖の一分とす、夫は其國人犯罪の責罰ありてより、人類に定められたる法則を能く記憶せり、即ち創世記に曰く、汝の額に汗を流して糧を食ふべし云々と、此の聖言に由りて勞働なるものは啻に衣食住の必要より生ずる而已ならず、此は人類が現世に生存する一の義務としたれども、人々の爲には宛も一種の重荷の如きものなれば、人々多く之を喜ばざれど、ユデア國人の內に於ては獨り困窮なる者而已ならず、富裕高貴の者と雖皆手を下して働けり、故にヨセフは素より其國の風習に從ひて勞働に從事したれども、是れ亦一般の人に定められたる一の制規なりけり、偖亦修道院の規則たるや、女子には十三歳にして配者を求めしめ、同院敎育の滿限には、德相均しき良人に嫁せしむる規定なれど、マリアは彼の聖殿を出てより他に安全なる所あらざるが故に、當時の敎官又はザカリアス等の保護を受けたるが、右のヨセフの外他に娶す者同族中にあらざりしが故に、此由ヨセフにも語りて、尙マリアに說て曰く、汝の神に誓ふ所は潔白を守るにあり、今幸に汝の

マリア結婚を拒む

ヨセフの性行及職業

マリア遂にヨセフに嫁す

同族中に汝と志を同ふするヨセフと云ふ潔士あり、汝素より其身を天の聖意に委ねしを以て、汝其人に歸げば誓ひに害なし、又國法にも背く事あるなし、且つ執業にも便りなれば、是れ適當ならんと諭せば、マリアは其の言葉を聽き、やがて安堵の思をなし、終に一月廿三日ヨセフに嫁して、婚姻の式を擧げ、夫妻の名を得たり、マリアが未だ十四歳にして、四十有餘のヨセフと婚姻を結びたるは、彼のモイゼスの制規に由りて他族の者を夫と定むること能はざりしに由るなり、彼のモイゼスの制規にては、男子なき家にて女子を以て家督を續くべき時は、其の女子決して他族の者を夫と爲す事能はざりき、其故如何と云ふに、其族の家督が他人なる夫に移るを以てなり、之に因りてマリアは眼前兄妹なかりし故、自ら父母の家督を受くべき者なるを以て、同族なるヨセフをば夫と定めたるなり、去ればマリアとヨセフとの婚儀は、實に天の攝理に出で、最も必要の保護扶助等を得んが爲なり、故にヨセフはマリアの配偶となるに及びて、能くマリアが貞獨の誓願を立てしを明かに知れる故、自身も亦其の平生の潔生に尙ほ一層其志を堅ふせり、マリアとヨセフとの結婚此の如くなれば、其の結婚の意義何處に在るかと云ふに、其の結婚は二人共に死に至る迄相約し、相助け、相愛し、相睦びて以て、互に一の誠實なる貞節を持するにありしを知るべきなり、マリアは其の淨配ヨセフと共にガリレアの國ナザレットの小都會に住み、其の生活の衆人の眼に映ずる所は、其の謙遜と親善の德より外には別に敢て異なる所なかりしものゝ如し、されど二人の高尙なる精神的愉快は常に神にのみ存して、世の人々得て之を知る事能はず、昔時彼の有名なるイザイヤスは既にマリアが處女にて救世主を生むべき事に就き預言して曰く、『童貞なる一女あり、孕みて一子を生まん、而して其名をエムマヌエルと稱せられん、蓋し此語は神吾人と偕に在りとの意義なり』と、此は是れ素より天の深き攝理に係るものにして、マリアが終始其の貞節を格守したるが、救世主を生むべしとの預言空しからすして、四月初の六日にマリアが一室に入り、一心を凝して天に祈りける時、天は最早人類を救ふべき時日至りしとて、上品なる一位大天使ガブリエルをガリレアのナザレットなるマリアの一室に遣はせり、天使の忽然示現せるを見てマリアは驚きて俯伏したり、其時天使はマリアに向て『慶し、聖寵みちみてるマリア』と祝しぬ、是れぞ天使が人類に對して敬禮をな

マリア天使の告を受く

せし事の始なるべけれ、舊約聖書を閲するに、此時迄天使等の現れし時、却て咸な人より敬禮を受けざるはなかりき、然るに此時天使がマリアの御前に至り、叩頭して敬禮の言葉を述べたるは、是れマリアが程なく救世主の母となり且つ天使等の皇后となり玉ふべきが故なり、天使は尙語を續けて宣ふ樣『主汝と偕に在す、汝は女人の中にて祝せらる』と稱讃しければ、マリアは之を聽きて大に驚きつゝ、如何なる返答をなさんかと暫時躊躇したりしが、此の言葉はマリアの他の人よりも厚く天の聖恩を蒙りて、程なく救世主の母となり、又過去現在未來に亘り女人の中に最も貴くして果報いみじとの意なり、去れどマリアは之を聽きて大に驚き、斯の如き言葉は如何なる意義なるかと明かに知り玉はざりし故、暫時躊躇したり、之に因りて天使は尙もマリアに向ひ宣ひけるは『マリアよ左のみ恐れ玉ふまじ、福なる哉、汝は正に懷姙して一子を生まん、名をイエズスと稱ふべし、是れ實に神子と云はれん、神は其子にダヴィドの王位を授け玉はん、而して其子はヤコブスの家を治めて、其御國永遠無彊に傳はらん』と宣ふことを聽き、マリアは尙ほも謹みて思ふ樣、救世主の母となるよりも、寧ろ其の高位を辭して、豫て誓ひたる

マリア途に天使の言に服す

愿を全ふせんと思ひつゝ、徐ろに赧顏を揚げ、天使に答て曰く、我身は素より不犯を守り侍れば、爭て子を懷孕して出産するの理あらん哉と、謙遜なる語調にて宣ひけり、是に於て天使はまた〳〵マリアに天の攝理を知らしめんが爲め宣ふ樣、此の如き事は人類の力を以て及ぶべきに非ず、聖靈汝の上に天降り、全能の御力（みちから）持に汝を庇護し玉はん、之に由りて汝より生れ玉ふべき御子は、神の子と稱せられん、唯々聖靈の妙工奇特に由り、懷胎の前後とも貞德を毀傷せず、汝を掩ひ玉ふによる者ぞとて、尙も又マリアに明白ならしめんが爲め、最も近き類例を擧て曰く、汝の親戚なるザカリアスの妻エリザベットを見ざる哉、彼れは夫婦共歲過る身にしあれど、取別け天の祐を蒙り、尙一子を懷胎して、既に六ヶ月の月日を經たるなり、人三十彼に子なしと云ひしに非ず哉、之を以て天は何事も叶はざるなきを知り玉ふべしとて、彼のエリザベットの老女をして一子を生ましめしを示して、マリアが救世主の母となるとも同じく叶はざることにあらずとの意をぞ曉しける、之に由りてマリアは天の攝理と其力とに就き、更に不信を抱かず、彼の天使の言葉を明かに知るに至れり、因りてマリアは俯伏して曰く、主の婢女茲に侍べり、卑

賤なる身を眷顧玉ひて、心の汚穢をも灑掃なさせ玉ふ事の身に餘る御鴻恩、又夫のみならず聖靈の妙工に由り懷胎の前後貞潔の德を傷はせ玉はぬは、恐れ多くも御成就を玉はる事主の婢女なる我が身に御詞の如くなれよかしと奏上なしたりけり、時に大天使ガブリエルはマリアの面前を辭して去りたりき、是に於て乎基督は人道に倚らず、單に聖靈の奇特を以て　誕せり、　世主の降生は實に斯の如くにして成就したり、されば救世主はダヴィド王の後裔なるべきに由りて、彼のダヴィド王は蚤く其千有餘年以前に於て、救世主の父と呼ばれたり、但し天が其子に世上の父なるダヴィドの王位を授け玉はん云々の語は、其文字に拘泥して之を解釋すべからず、尙別に高尙なる意義ありて存するなり、即ち彼のダヴィド王は救世主の前表にして、又彼のヤコブスの家即ちユデア人民は、昔時より蚤く天撰を受し者にて、實に全地球上の夥多の國民を以て組成せらるべき基督敎民の前徵にて有りき、而して救世主は彼のダヴィド王に續きて天の新民の王となり、其王位は天使ガブリエルが云ひたる如く、寔に永遠際限なき者なり、又マリアが天の婢女なる我身に御詞の如くなれよかしと云ふは、其謙遜を表證せる語にして、天下後世永く之を感嘆し且之に則り倣ふに足るべきものなり、マリアは此の如く其謙遜と貞潔の美德に由りて、遂に救世主の母となりたり。

マリアとエリザベツトとの關係

(3)訪　問

マリアは其從姉なるエリザベットの身に生ぜし最も喜ばしき事、即ち今や幸に天の聖惠に由りて一子を懷孕せりとの事を聽き、速に其許に見舞はんとを思立ちたり、マリアが見舞ひたる家屋の礎は今に至る迄尙彼の國に保存せり、昔時は其上に聖殿の有りしかども、今は之なし、只僅に數十年前に再建せし一の小なる拜殿の現存するのみ、マリアが此時の旅行に誰か隨伴せしかは聖書に之を記さゞれども、廿有七里の行程を斯る年齡の一女子が、單身にて行かざる事は言を待たざる所なり、又マリアとエリザベットは如何にして從姉妹なるか今之を昔時の史乘に尋ぬるに、マリアの曾父なるベトレエムの司祭職マタンと云ふ人三人の子を有せり、長女をアンナと云ふ、次子をヤコブスと云ふ、又末なる女子は索布と云へり、長女アンナは即ちヨアキンに嫁してマリアを生めり、次子なるヤコブスは即ちマリアの義父ヨセフの父なり、末なる索布は即ちエリザベットの母なり、故に

マリアとは母方の從妹なり、故にエリザベットとは親族なるは勿論、エリザベットが盛德の婦人にして、珍らしくも彼程老年に及びて今や幸に天の聖惠に由りて一子を懷孕し、既に六箇月の時日を閲する由を大天使ガブリエルの靈告にて知れる故、マリアは其身の胎内にも救世主が孕れるに因り、其の祝福をばエリザベットにも配與せんが爲め、遠路を厭はず、羊腸にる山路を辿りて、エリザベットの許に見舞へるは、實にマリアの親切深き哉、右に就き最も感ずべきは謙遜の德なり、マリアは既に救世主の母に選ばれて、其後遙にエリザベットに超越したれども、能く其の謙遜の德を以て自ら見舞ひたり、古經に曰く、汝の頰は鵞鳥(チュルテル)の如く云々と、抑も此鳥は山鳩の如く、マリアの事を喩ふるに最も能く適應する者なり、如何となれば此鳥は至つて清潔且つ美麗なるものにして、常に高所に棲み、決して不潔の地不潔の物等に近づくことなく、又他の鳥、就中不潔の鳥と交ることなく、只其匹偶と偕に相和樂して、決して相離れず、若し匹偶一度死すれば、孤栖して復だ再び他の鳥と相居ることなしと云ふ、是れ此鳥を以て至貞なるマリアの表徵と爲す所以なり、マリアは至て清潔、至て美麗にして、高尚の情常に其樂を心中に保ち、其心はいつ

マリアの美德

も神と相和樂せり、蓋し神をのみ敬愛せる至誠至貞の美德を以て救世主の母となりたる者なり、又曰く、彼の曙光の如く起り、美なること月の如く、高きこと日の如く、威あること纛(とう)を施す軍の如き者は誰ぞ哉云々と、今何故に曙光を以つてマリアに喩ふるか、彼の夜陰闇黑なるに當り、曙光一度發し、旭日の將に昇らんとするを豫示する時は、夜の闇黑忽ち散じ去るが如く、マリアの世の永き闇夜の後に赫灼として昇上すべき彼の正義の光(救主基督)を豫示し、人世の闇黑を散じたるものなり、又彼の曙光が旭日の昇るを待てる人々、就中病疾ある者、羸弱なる者等に喜悅(よろこび)を與ふるが如く、マリアは救世主を待てる人々、就中心魂の病み弱はれる者等に喜悅を與へ、救助を備へり、又曙光は猛獸を驅逐し、闇黑中に惡を犯す者の行爲を暴露す、故にこれ等の輩は多く闇黑を愛して曙光を嫌ふが如く、マリアは闇黑中の猛獸即ち罪逆者を驅逐するが故に、彼の闇黑を愛する者は、皆マリアを嫌ふて之れを誹謗せざるはなし、又曙光と共に朝露の地に降りて、草木百花を霑ほすが如く、マリア出でゝより始めて恩寵の露天上より降り、人々の枯槁疲弊せる心を霑ほすに至れり、右に掲げしと同じ意味を以つてマリアを呼びて曙の星とも云

ふ、即ち彼の晨星の旭日に先立つが如く、マリアは救世主に先立ちて、豫め救世主を吾人に指示したるものなり、美なること月の如しとは、月は衆星の中に於て最も大きく又最も明かに見ゆるものにて、即ち太陽に次ぎて夜を照すものなり、されども彼の太陽と相離るゝこと能はず、其の光は其の固有の光りに非ずして、太陽より受くる所のものなり、故に其の有する所の美は咸な彼の太陽より來れる所のものなり、故に凡そ月に就て讃する所あれば、自ら彼の太陽を讃するの理なり、之れと同じくマリアは衆聖人の中に於て最も聖く、また最も美しくして、數多の聖德を其の身に備へ、其の聖德の美は宛かも彼の明鏡の物を寫すが如くなれども、是れ僉な天より來れる所のものなり、而して彼の月が太陽と相離るゝこと能はざるが如く、マリアは正義の光(救主基督)より決して相離るゝこと能はざるものなり、故に凡て吾人がマリアに就て稱讃する所は、亦自ら其の聖子にも相關係する所あるものなり、尙ほ右等の意味によりてマリアを呼びて義德の鑑とも云ふ、即ち宛も鏡の如くに正義の光(救世主基督)を寫すが故なり、尙ほ又右に揭げし高き日の如しと云へるも、亦同じく此意に出るものなり、威あること纛を施す軍の如し云々とは、抑マリアの能力を有ずるは、其の固有の德に由りて然るに非ず、彼の全能なる救世主の母たるの權利と其の聖位とに由るものなり、吾人マリアに求むる所あれば、何事も皆其の傳達に由りて協はざるものなし、故に聖者ベルナルドスはマリアを呼びて祈求の全能者と云へり、マリアが吾人に對するの庇護は極めて安固にして、吾人の仇敵(即ち魔鬼)に對する力は極めて恐るべきものなり、是れ古經に威あること纛を施す軍の如しと云ふ所以なり、斯かる譬を以て稱讃せられたるマリアは、前記エリザベットの上に遙に超越せしも、能く其の謙遜の德を以つて自ら遠路を見舞に赴きしは、是れ亦後日救世主の人々に語りたる聖言の豫表なり、其の聖言に曰く、人の子の世に來りたるは、人を使ふ爲には非ず、却て人に使はれ、又多くの人々に代りて生命を與へ、其の救とならんが爲なり云々と、是故を以てマリアはガリレアなるナザレットの住家を速に思へ立ちて、二十有七里の長程、森々たる樹林を左りに踏り、茫々たる曠野を右に迚り、配偶ヨセフの保護を得て、ユデアに至れり、ザカリアスの住居せる所は、聖地イエルサレムを離るゝこと西南二里餘山地なるヘブロンと云ふ所なるが、マリアは先づ本宅に至

マリアとエリザベツトの會見

りしに、折しも其妻エリザベットは其地より僅に十分間程にて行き得べき彼方なる山奥に在る一別莊に居りしと云ふ、然るにマリア謙遜の德を以て尙又自ら之を訪問して、エリザベットに至り、婢女マリアなる由をおとづるにぞ、エリザベットは身懷胎せしことを尙ほ秘して、誰も之を知る者非ざるべしと思へしも、マリアが遙々來訪せる其の親切の深きを悅びて之を迎へり、マリアは其の案内に連れ、會釋に慈愛を含みて打笑みつゝ、エリザベットに敬禮を施せるに、其の美しき事清朗なる高き天の如しと云ふ、蓋し彼の一片の雲なき美麗なる晴天は、清潔美麗なる人心の表象なり、故に西洋の國々の諺に天は心より尙ほ清からずと云ふ、即ち心は彼の天よりも尙ほ清しとの義なり、マリアの心は其の清潔美麗なる事、宛も彼の麗らかに晴れ渡る天空の如く、又其中に許多の美德を具備せらるゝ事、宛も彼の衆星の天上に碁布して珠玉を敷ける如し、彼の星は啻に世界の爲のみならず、人々に尙便益を與ふるものなり、救世主のマリアの胎内に孕るや、聖靈の光明茲に輝き渡りて、エリザベットの胎内の子にまで光被せしかば、遽に歡喜に絶えずして雀躍をなしける故、エリザベットは我が胎内の子動くよと覺へしが、此は如何に、其の胎兒聖靈に光被せらるゝや否や、其母はマリアの救世主の母たることを明に悟り、歡喜に絶えずして叫びて曰く、救世主の御母として遠路を遙々我が許に來臨し玉ふ、我れ何に由りて此の事を得し、既に御身の聲我が耳に入るや否や、胎内の兒喜びて躍れり、主の言を信せし者は幸福ぞかし、又物の數ならぬ婢女に此の祝福を賜ふ事我身に餘る高恩なりと、笑靨を顯はし、尙聲張揚げて祝しける樣、慶たし聖寵みちみてるマリア、主、御身と偕に在す、御身は女人の中に於て別て御果報いみじきなり、又御胎内の御子聖く在す、御身の福德を備へつる事は、天使衆聖人よりも幸福に在す事なれば、御代の御代迄限りなく敬ひ仰かれんは尤にて、天神の仰せある上は必ず變り玉ふまじ、又御胎内の御子は救世主にて在せば、最も聖く在すとぞ稱讃されける、併しエリザベットの胎内の兒がマリアに會合せし時喜びて雀躍せしは、蓋し自然の生理に非ずして、甚だ奇と云ふべし、未だ兒の胎内に在るや、毫末も其の明悟と愛欲の力を發する事なきは、人々の能く知る所なるが、天は不思議にも其の胎内よりして明悟に發動を起さしめて、斯の如き奇異なる徵を顯はしめたるは、亦以て天の萬能の力の顯はるゝ所なりと云ふべし、既に

エリザベツトのマリアな祝せる冒詞

大天使ガブリエルがザカリアスに云ひけるに、其男子は神の前にありて甚だ偉大なる者にて、又苟も葡萄酒と濃酒を飲まじ、母の胎内にありて聖靈を蒙むらん云々の語は、茲に於て乎初て其應驗ありと云ふべし、蓋しヨアンネスは固より世主に先立ちて生れ、其の救世を豫言し、之が準備を爲さしむべき者にてあれば、未だ母の胎内にある時より、マリアの胎内に在す救世主に遇ひ、蚤くも其母エリザベットに救世主たる事を知らしめぬ、語を換へて之を言へば、ヨアンネスが未だ自ら之を語る事能はざるも、被りし聖靈の光明が其母の心を照らして、救世主に在す事を知らしめたれば、不思議にも救世主の母として遠路を遙々我が許に來臨し玉ふ、我れ何に由りて此の事を得しとの詞を述べたるなり、此時迄更にマリアが斯の如く天の特恩にて救世主の母となられし事を知らざりけるが、其の胎兒ヨアンネスが聖靈の光被を得て、其の奇異なる事を母の口を籍りて救世主の事を豫言せしに疑なし、而して今マリアの胎内に救世主の在す事は、人々未だ之を知らざれども、蚤くも茲に其奇なる徴證を斯の如く顯はしたるものなり、故にマリアも亦最も美しき詞を以て之に答ひられたり、其詞は後年の模範となり、今

マリアのエリザベットに答ひし詞

尙人々之を讀誦して已まず、然り而してマリアは高く女人の上に立てられ、救世主の母となりて、エリサベットより斯る稱譽尊敬を受けられしかども、更に傲慢の念を生せず、謙遜の德を以て、堅く其心を持し、其身は元の烏有にして、自ら有する處とては一つもなく、皆天の授與に係らざるなきを知り、其稱譽尊敬等は悉く之を神の光榮に歸せり、折柄エリザベット恭敬マリアを室内に伴ひて尊崇しけるに、尙ほ又マリアは讃謝して曰く、我が心我が主を感頌す、我が靈魂は我が救主なる神を喜ぶ、是れ其の婢女の微賤なるを顧み給ふが故なり、今より後ち萬世に至る迄我を幸福なる者と稱せん、全能の神大に其德を我れに成し給ひ、其名は寔に聖く、其矜恤は世々將に之を畏敬する者に洽ばんとす、其臂の力を以て其大能を顯はし、心志の驕る者は之を散じ、權柄ある者は之を其高位より黜け、卑賤にして謙遜なる者は之を擧げ、飢たる者は之に美食に飽せ、沃滿なる富者は之を空く返らせ給ふ、且つ、其祖アブラハム及び世々の子孫を窮りなく憐む事を忘れず、其僕イスラエルの民を扶持け給へり、是れ吾等の先祖に言ひ給ひしが如しと、此は即ちマリアの聖歌なり、マリアは此の聖歌を作り、謙遜を顯してエリザベットに歸り

たり、蓋しマリアがザカリアスの家に到りしは、大に其家に喜悅と幸福とを與へしものなり、而して其の三箇月の間の狀況は聖書には之を記さゞるが故に、之を知るに由なし。

マリアの傳記に關する考證

(1)マリアの系統及び結婚に關する考證

(II)マリアの考證

マリアの父はヨアキン、母はアンナと稱し、ユダ族の苗裔なり、良人ヨセフも同族の苗裔に屬すれば、隨てマリアとヨセフとは、ダヴィト王の系統を引きて、アアロン族に屬せり、マリアは幼少の時より貞獨の誓を立てゝ一生獨身生活を送らんと決心す、古史に據れば幼少より神に身を献げて聖堂に奉仕せりと云ふ、ヨセフの條に記したるが如く、杖に花を開きたる奇蹟によりて、年寄のヨセフを良人と定めたれども、そは普通の結婚生活を送りて子孫を作るが爲にあらず、貞獨の保護を仰がんが爲にてありき、此等の事柄は世の人々の疑を狹む所なるべけれども、正史の記す所を信ずるとせば、マリアが結婚後にも貞獨の生活を送らんことを誓ひたる決心は、疑を容る可からず、天使が子を生まんと告げたるときにさへ、マリアは男を知らぬ身、爭で此の事あるべきと曰へり、ヨセフもマリアの懷姙を見て、密に之を離緣せんと思へりと云へば、結婚後も相互に貞獨の生活を送らんと約束したる事も推せらる。

(2)天使の靈告に關する考證

マリアがヨセフと約婚後若くは結婚後にガブリエル大天使忽然マリアに現はれて、『慶(めでた)し聖寵みちみてるマリア、主汝と偕(とも)に在ます、汝は女の中にて祝せらる』と曰へり、大天使は鄭寧に禮をなして後斯く告げ、曩にザカリアスに告げたるときよりも遙かに聲高らかに述べたり、ザカリアスに向ひたる時には『懼るゝ勿れ』又『汝の祈禱聽屆けらる』と曰ひたれども、マリアに告げたるは、マリアが天に祈りたる爲にもあらざりき、されば、マリアがガブリエルの恭しき敬禮の言葉を聞きたるときには、驚きて何故なるかをも解し得ざりき、その故はマリアは平居謙遜して隱晦の生を送り、自ら卑しき女なりと思ひ居たれば、天使が示現せんとは夢にも想像せず、特に此の如き鄭重なる祝詞を耳にせんとは、露だに思はざりしかば、天使祝詞をきゝて喫驚したるも理りなり、此時天使はマリアに語りて曰ふ、『マリアよ、懼るゝ勿れ、汝は神の御覺え斜ならず、汝孕みて男子を生まん、その名をイエズスと名くべし、かれ偉大なる者となりて、至上者の子と稱せられ、又主なる神そ

の先祖ダウィド王の位を彼に與ふれば、ヤコブスの家を永へに統治し、その治世天壤無窮に傳はらん』と云へり。

人間にして此の如く榮譽なる天の告を受けたるものは、前にも後にも例なし、生まるゝ兒をイエズスと名くべしと云へり、イエズスとは救世主の意味なり、天下の蒼生之に依りて救はるべきことを示せり、彼は偉大なる者ならんと云へり、世界の偉人として、古今東西之に企及し得る者なく、所謂空前絶後、古今獨歩の大人物なることを告げたるものなり、至上の子と稱せらるとは、天の最上に在ます所の天父の子にして、『天子』『神子』若くは『神種』と稱せらるべきことを意味したるものなれども、その御國は固より世の帝王の統治するものとは異なり、主として精神界に在るものなれば、その先祖に當れるダウィド王の位を承け、ヤコブスの家を統治すべけれども、その御代は千代に八千代に、又その御國は普天の下、率土の濱に及び、精神界の王として、永遠無窮の教會を建設し、之を全世界に擴張して、遂には天上無窮の天國に發展せしむべきことを示したる言葉にて、其の意義極めて深長なるが、マリアは當時その意味を解したるや否やは、固より知るべからざれども、兎に角救世主として創世時代より待ちに待たれたる永遠の王、至上の子が己の胎内より生まるゝと云ふことのみは解し得たるなるべし、何等の榮譽ぞや、何等の幸福ぞや、女の中にて祝せらるゝ所以は正しく茲に在り。

マリアは之を聞きて、『われ未だ男を知らざるに、如何にして此事ある可き』と曰へり、マリアはヨセフと婚約を結び、その妻と定まりたるに、『われ未だ男を知らず』と云へり、これは肉身の交をせざる誓を立てゝ、一生貞獨の生を送らんことを誓ひ、此の誓は我が夫なる人も之れを心得て承諾したりと云ふ意を以て天使に答ひたるものならんが、さるにても處女にして男を知らざる身が懐姙して子を生み、頓て母とならんとは、解し難き節なれば、不審はれやらず、此の如く世に例のなき事が如何にして行はるべきと思ひて、『如何にして此事あるべき』と云へり。

天使答て曰ふ、『聖靈汝に臨み、至上者の大能汝を庇はん、是故に汝の生む所の聖者は神の子と稱せらるべし、夫れ汝の親戚エリサベット彼も年老て男子を孕めり、素姙なき者と稱せられしが、今すでに六ヶ月になりぬ、蓋し神に於て能はざる事なければなり。』

此の如く神の萬能は汝をして處女たると同時に母たるを得せしめ、母となりても處女たるを失はざらしむべし、聖靈は汝の貞德の元主にして、汝に降臨して益々汝を潔淸ならしめ、至上者其の大能を以て汝を庇ひ、無始より生れたる神の子をして、汝の　内に孕らましむべしとの意なり。

マリアは之を聞き、『われは主の婢女なり、御身の言の如くあれかし』と曰へり。

此の謙遜なる承諾の言葉は、三位の神の期待したる所にして、聖父は之に由りて無始より生めるる聖子を現世に於てマリアより生れしめ、聖子は之に由りて後日十字架の上に犧牲に供すべき肉體をマリアの潔白なる胎内に取り、聖靈はマリアに於て、玄の玄、衆妙の門とも云ふべき玄妙の事象を行へり、茲に於て乎人類の始祖アダム、エワの時代より世界萬民の待ちに待ちたる救世主の降誕を見るに至りたり。

(3)マリアとエワの比較及考證

神の珍らしき攝理は此等の歴史的事實の裡に明に讀まる、人類墮落の因はエワより始まりしが、人類救贖の業はマリアより始まれり、女によりて亡び、女によりて救はるとは、此の謂なり、エワは死を來たし、マリアは生を齎せり、當時エワは未だ處女なりしが、マリアも處女なりき、エワは處女なりし時より其の良人を有ちたるが如く、マリアも處女にして其の良人ありたり、天の祝福はマリアに與へられる、『汝は女の中にて祝せらる』と云ふ天使の祝詞に徵して知る可し、昔は冥府の使エワに語り、今は光明の使マリアに語る、冥府の使のエワに顯はるゝや、『汝も亦神の如くならん』と云ひて之を欺けり、光明の使のマリアに示現するや、『主汝と共に在ます』と曰ひて之を祝せり、冥府の使のエワに語れるときには、謀反の念を鼓吹して曰く、『何故此の如く美しき果實を食することを禁じたるか』と、光明の使のマリアに告ぐるときには服從の心を起さしめて曰く、『マリアよ、懼るゝ勿れ、神に於ては能はざる事なければなり』と、エワは冥府の使の言を信じ、マリアは光明の使の言を信ず、敬虔の信は盲信の原因を消え失せしめ、エワが魔の言を信じて亡ぼしたるものを、マリアは神の言を信じて復興せしめたり、尙玄妙の義を深く究むれば、エワは魔に欺かれて、神の面前より逃げ去るに至り、マリアは天使の告を受けて、神を宿し參ゐらするに相應しき身となるに至りぬ、エワは吾等に死因の果實を來たらし、マリアは吾等に生命の果實を齎らせり、故にマリアは實にエワの

(4)マリア崇敬の濫觴に關する考證

辯護者なり。

世の基督敎者の中にもマリア崇敬を以て奇怪呼りする者あるこそ訝しけれ、誰か初めてマリア崇敬の道を開き、例を示したるかを見ば、思ひ半ばに過ぎん、初めて此の潔き貞女を崇敬したる者は果して何者ぞ、學問もなく、見識もなく、唯質朴なる心に驅られて、神佛を拜む世の所謂愚夫愚婦なるものなるか？あらず、然らば慈愛深き母が己の子の危きを見て、基督の母なるマリアに祈らば、マリアも母なれば、我が子に對する母の情を憐みて、吾が願ひ事を聽屆くるならんとの迷想より、初めてマリアを崇拜したるものなるか？未だし、苦しき時の神頼みより、世の病者が死の旦夕に迫まれるを見て、他に平癒の道なしと思ひ、臨終の苦悶を脫せんが爲に、初めてマリアに號求したるものなるか？然らず、マリヤを崇拜し初めたる者は、此の如き病的の人々にはあらずして、此等よりも遙に偉大なる者なり、然らば基督の使徒なるか？否、預言者か？否、上天の住民なり、面と面とを合せて永へに神を見奉る純靈なり、日夕神前に咫尺して、聖哉を三呼しつゝ、永久の讃美を歌ふ神靈なり、福音書の所謂至上者の使なり、吾人の所謂天使なり、天使も下級の天使にはあらずして、上級の天使なり、一言以て之を蔽へば、大天使ガブリエル即ち是なり。

如何なる場合に於てガブリエル大天使がマリアを崇拜したるかを究むるときは、愈々益々感驚に堪へず、マリアが基督の母として、天使の皇后として、彼の榮譽なる歸天をなし、德の錦を衣て天の故鄕に歸りたれば、天の門直に開けて之を歡迎したりと云ふ時なるかと云ふに、決して左にあらず、マリアが世を棄て、家を出で、賤が家に隱晦の生を送りし時、彼の大天使ガブリエルは天より降りて恭しくマリアの面前に敬禮をなし、最も嚴かに祝詞を述べて曰く、『慶たし、聖寵みちみてるマリア、主汝と偕に在ます、汝は女の中にて祝せらる云々』と、是れ實に聖母崇敬の濫觴なりとす。

尙一歩を進めて考究せんに、大天使ガブリエルは偶然に天降りたるや、又は自己の名義を以て示現したるやと云ふに、福音書には『神より遣はされたり』と記せり、即ち至上者の大使として、三位一體の神及び千萬無量の天使の名を以て、上天より降り、マリアに示現して、最も森嚴に聖母崇敬の道を開き、實例を示したるもの

なり。

何故に至上萬能者の使がナザレットの賤の女に遣はされたるか、嗚呼是れ實に天地も驚く可き事なり、アタム、エワの失樂園以來世界萬民の翹望したる救世主の降生に就き、彼女と交渉せんが爲なりき、交渉の上彼女の承諾を得んが爲なりき、天使は彼女に己の天より派遣せられたる理由を述べて、潔き胎内に救世主を孕して、生み參らすべき旨を告げたるとき、彼女は躊躇して考へたりき、考へて貞獨を神に誓ひたる事を障碍として掲げたりき、斯くて天使よりは神の萬能の御力によりて、處女たるを失はずして母となり得べきを告げたれば、彼女はやうやくに承諾し、茲に初めて救世主御降生の玄義成就したるなり。

述べて爰に臻れば、マリアを最も深く崇敬したる者は、人にあらずして、寧ろ神なりとこそ云ふべけれ、聖父は永へに其子を生む特權を有したるが、此の特權の幾分をマリアに分ちて、現世に之を生むことを得せしめたり、斯くて聖子は眞にマリアの子となり、アリアは眞に聖子の母となれり、而して此の玄妙なる奇蹟を行はんとて聖靈はマリアに臨み、有らゆる恩寵に浴せしめて、自らマリアの淨配となりたりき、嗚呼是れ神のマリアを敬重したる所以にして、聖父は娘となし、聖子は母となし、聖靈は妻となしたりけるもむべ、マリアを崇敬したる極度と謂ふて可なり、人は如何にマリアを崇敬すと雖、その萬分の一にだも及ぶ能はざるべし、人は唯だ神のマリアを崇敬して、最上の位にあげたるを稱揚するのみ、讃美するのみ、マリアと共によろこびて之を神に謝するのみ、人としてはマリアに對して之より以上に盡すべき尊敬なし、人間の稱讃は唯だ口より響くのみにして、實際に於ては毫も其の價値を增し、品位を高むるものにあらず、吾人の稱讃何かあらんや、マリアの實際に對しては一毫も損益せざるなり。

人或は餘りに信賴と愛敬の意をマリアに表すると曰はんか、されど、之を基督のマリアに對して表明したるに比すれば、大海の一滴、九牛の一毛のみ、基督は之に如何なる名を呈したるや、母と云ふ名を呈したり、偉人の母と云ふ名、神子の母と云ふ名を呈したり、是れ豈信賴愛敬の最上を盡したるにあらずや、基督は私生涯三十年の間マリアに子として從ひ、且つ孝を盡したるにあらずや。

救拯の道についてマリアに救助を仰ぐことを非議する者あり、然れどもこはこ

れ天が人に實例を示したるものなり、救世主を遣はさんとするに當りて、天はナザレットの處女の承諾を求めたるにあらずや、マリアが涙の谷と云はるゝ現世(このよ)に在る時にさへ、天は既に此の如く救世の事業に就てマリアに交渉したりとせば、今や天に在りて聖子の側に於て慈愛の寶位(みくらゐ)に即けるに當り、救世の事業の餘澤に就て如何なる權利を分てるかを推知すべし、天が既にマリアの謙遜より其の承諾の意を期待したりとせば、地はマリアの慈愛に賴りすがり、其の轉達を祈求するも、何の不可か之あらん。

(5)無原罪説に關する考證

マリアは如何にして人の祈る所を知り得るかと訝る論者もあれども、こは論ずるに足らず、マリアは地上に於て神の聖意をさへ知るを得たり、今や天に在りて曷ぞ人の祈禱を知らざるの理あらんや、昔は天使が神の聖旨を奉戴して、之をマリアに告げ知らしめたるが如く、今は各個人を守護しつゝある天使が、各人の祈願を齎らして、天の皇后に轉奏すと云へば、人の祈る所を知るに於て何の難きことやあらん。

正史のマリアに就て記する所を考ふれば、マリアを崇敬し、その性行事歴を祝し特にその原罪の汚なく孕れる事を慶賀するも、毫も怪むに足らざるを知らん、基督が救世の使命を帶び、一切人類を救はんが爲に、身命を犧牲に供したりとせば、先づ第一に其母の爲に計りたるや、言を待たざるなり、マリアが母の胎内に孕る時より早や既に特別の天寵を受けたりと云ふが如きも、蓋し之が爲なり、マリアの誕生は救世事業の行はれたる日の曙光の如くに看做さるゝも、亦之が爲なり、兎に角マリアが幼少の折より身を神に献げて、聖堂に奉仕し、貞獨の誓を立てゝ、潔白なる生活を送りたるも、畢竟天の殊恩に浴して、後日基督を宿すべき生ける聖堂となるの準備をなすが爲にてありき、その當時マリア自ら之を知らざりしも、天の攝理蓋し茲に在りたるならん。

(6)エリザベットを訪ねる問に關する考證

マリアが一たび口を開て言葉を出せば、人心に如何なる効果を及ぼしたるかは、正史に徵して之を知るべし、『當時(そのころ)マリア起て速(すみや)かに山地なるユダの邑に往けり、』此邑はヘブロンなりと云ふ、此處には太祖の墳墓もあり、アブラハム、イザーク、ヤコブスなどが、後世其の苗裔に依りて世界萬民祝福を受くべしとの天啓に接したるも、亦此地なりき。

『斯くてマリアはザカリアスの家に入りて、エリザベットに問安せしに、エリザベットが、マリアの問安を聞くや否や、胎兒腹の内に雀躍せり、エリザベットは聖靈に感じ大聲に語て曰く、御身は女の中にて福なる者なり、亦御胎内の御子も福なり、さるにてもわれは何に由りてか我主の母(聖母)の來臨の榮を辱うするを得しか、御身の問安の聲わが耳に入るや、胎兒は我腹の内にて欣喜雀躍せり、主の言を信じたる御身は福ぞかし、主の御身に語り給ひし事は必ず成就せらるべし。』

ガブリエル天使天より遣はされて、マリアに祝詞を述べて後、エリザベットも亦マリアに以上の如き祝賀の辭を陳べたるが、エリザベットは聖靈に感じて斯く陳べたりと云へば、こは聖靈の祝賀の辭と見て差支なかるべし、マリアが安否を問ふ一言によりてエリザベットが聖靈に感じて、神の母なる事を知り得たるも珍らしけれど、胎兒が母の胎内に雀躍して欣びたりとは、尚更にめづらしからずや、無論これは基督がマリアの清き胎内に在りて、此の如きの不可思議なる奇蹟を行ひたりけんも、マリアの言葉に應じて之を行ひたることは、特に注意すべき事なりとす、實に『主御身と偕に在ます』と云はざるべからず、マリアは眞に有らゆる婦人の中に最も幸福ある者なり、如何なる母もマリアに及ぶ者なく、如何なる皇后もマリアより優れる者なし、宜なる哉マリアの胎内に孕れる御子の偉大なる人物なるや。

此時マリアは吾が榮譽を神に歸して曰く、『我心主を崇め、我靈はわが救主なる神を喜ぶ、是れその使女なる卑微をも眷顧たまふが故なり、自今以後萬代までも我を福なる者と稱ふべし、それ萬能なる者に大事を成せり、その名は聖く、その矜恤は世々之を畏敬する者に及ばん、その臂力を發して心の驕れる者を散じ、權柄ある者を位より下して、卑賤なる者を揚げ、飢たる者を美食に飽せ、富める者を徒く返らせ給ふ、アブラハムと其の子孫を窮なく憐むことを忘れずして、其の僕イスラヘルを扶持け給へり、是れ我等の先祖に言たまひしが如し。』

茲にマリアの心事を考へて少しく之を研究するの必要あり、マリアの謙遜なる實に感ずるに餘りあり、大天使ガブリエルが『御身より生るゝ聖者は至上者の子と名くべし』と云ふに對して、マリアは自ら主の婢女と云ふより外に何等の返答をもなさゞりき、エリザベットが天啓によりてマリアの此の上なき光榮を知り、そ

の地位の至高至大なるを感嘆して『神の母がわざ〳〵我家を訪問せらるゝは、何の光榮か之に過ぎん』と云ひ、その一語一言の力の偉なるを稱揚して、『御身の問安の言葉我が耳朶に達するや、我が胎内の兒欣喜雀躍せり』と云ひ、尙その信仰の熱きを慶賀して、『斯く速に主の言を信じたる御身は福ぞかし、主の御身に語り給ひし事は必ず成就せられん』と云ひて、聖靈に感じたるに任せて、言葉を極めてマリアを稱讃慶賀したるに對して、マリアは毫もそを己が功に歸せずして、敬虔の念と謙遜なる心とを以て何事も皆神の惠に歸し、その仁恤の限りなきをばほめたたへつゝ、御身は主の母を稱讃せらるれども、我が心は主の御惠を稱讃す、御身は我が言葉に應じて、胎内の御兒の雀躍なして欣べるを語らるれども、我靈はわが救主なる神を喜ぶ、御身はわが信仰をほめて我を福なる者と仰せらるれども、此の信仰と此の幸福とは仁慈なる神の御惠に因る、神ははしたなき我身をも眷顧み給へり、世々の人々が我を福なる者と稱ふるは全く神の御惠なり、此等の大事を成させ給へるは、一に萬能なる神のなさせらるゝ所にして、その御矜恤は獨り我身にのみあるにあらず、世々神を畏敬する一切の人々に普及せん、從來の例に徴しても知らるゝ如く、萬能の力を發揮して、驕れる者は之を掃蕩し、權柄に誇れる者ば之を失墜し、謙遜なる者は之を稱揚し、飢ゑたる者を飽かしめ、富める者を徒しく返し、その僕イスラエルを眷顧し、之に對する舊來の愛憐とアブラハム及び其の子孫と結びたる約束とを思出し、永久に之を忘るゝことなかるべし。』

此の如くマリアは天使に譽められ、エリザベットにも譽められたれど、一切の名譽を悉く神に歸し、自らは愈よ譽められるれば、愈よ神を譽め奉れり、是れマリアが天下後世より稱讃せらるゝ所以にして、マリアを譽むるは、取りも直さず神を譽むる所以なり。

マリアはエリザベットの家に留まること凡そ三ヶ月にして、家に歸りぬ、マリアが基督の先驅ヨアンネスの誕生を見たりや、否やは、正史に記されざれば明にしかと斷言する能はざれども、或はヨアンネスの誕生を見たりしかと思はる、反對論者は至清至潔なる貞女が此の如き場合に留まり居たるは訝かしと云へども、至清至潔なる貞女とは云ふものゝ、マリアも亦妻たり母たれば、エリザベットの產前に訪問して、母子の歡喜の原因となり、出產の時にも其の側に在りて、母子が歡喜

の原因となりたるに相違なしとこそ思はるれ。

(7)マリアの出産に關する考識

マリアはエリザベットの家より歸るや程なく、羅馬の皇帝オグストスより戸籍調査の令出でたり、依つてマリアとヨセフとはともに、ダヴィドの血統なりしが故に、其の故邑なるベトレエムに往きて、戸籍に登錄んとはるゞ〳〵出發したりけるが、マリアはベトレエムに到着するや、月滿ちて冢子を生めり、即ち是れ基督なり、當時ベトレエムは外來の旅客多くして、旅舍に宿泊する餘地なかりけん、マリアは廐に入りて出産せりと云へりしも、此の廐は旅舍に附屬せるか、又は市外に在りたるものなるかは、明に知るを得ざれども、基督の誕生が初めて牧人共に知れたりと云ふ事柄などより考ふれば、市外に在りたりと云ふ說眞に近きが如し、希臘の敎父學者の說に據れば、基督は洞窟に誕生したりと云ふ、ジュカチス及びユゼビウスはその洞窟は町の附近に在りと云ひ、ヒエロニムスは町はづれの南方に在りと云ふ、マリアの出産はベトレエムに到着したる日の夜半にして、十二月二十五日に當れりとは、一般の傳說なり、基督敎會にても古來より斯く信じ來れり、敎父學者の說に據れば、マリアは何の苦痛をも感せず、産婆の扶助だに要せずして出産せりと云ふ、その理由として揭ぐる所に曰く、マリアも基督も罪なくして、人類の始祖アダム、エワに對せる天の呪咀を受くべき譯なしと、(出産のとき苦痛を感ずるは、エワが罪を犯したる結果天譴を受けたる爲なりとは、創世紀の記す所なり)

(8)宮參に關する考證

此時ベトレエム附近の野外に在りたる牧人等は天使の告を受けて、夜半廐まで駈け來り、嬰兒を認め、之を拜みたりと云ふ、マリアは此等の事柄を心に秘め置きて、屢々心中に思想せりとぞ、程なく東國の博士等の來朝ぞありける、博士等は夢に天啓を受けて、來りしときと道を異にして歸りぬ、誕生後四十日目にイエルサレムに往き宮參をなし、古老シオメンの預言を聞きたりき。(以上詳しきは基督の條に就て參照すべし)。

(9)避難及歸國に關する考證

其後マリアはヨセフとともに嬰兒を携へて、ナザレットに歸らんとせしが、途中天啓を受けて、ヘロデス王の加害を避けんが爲にエジプトに遁れ、ヘロデス王の崩御するまでエジプトに滯在せり、東方の傳說に據れば、マリア母子はヨセフとともにヘリオポリスに足をとゞめたりと云ふ、今も仍カイロとヘリオポリスの間

に在るマタラと稱する處に泉ありて、此の泉にマリアは嬰兒の襁褓を洗へりと傳說し、エジプト人は今日に至るまで此處を崇敬す、而してヘロデス王の崩ずるや、ナザレットに歸りたりき、そのベトレエムに往かざりしは、ヘロデス王の嗣子アルケラウスの管轄に屬したればなり。

(10)イエルサレム參堂に關する考證

マリアはヨセフとともに每年逾越の節筵にはイエルサレムに參詣せり、基督十二歲の折父母に伴はれてイエルサレムに行きけるが、節筵の日卒りて返らんとせしに、基督イエルサレムに留りけるを、父母のつゆだに知らざりき、多分同行人の中に在るならんと意ひ、一日程を行きて、親戚知音の者を尋ねたれども、見當らざりしかば、再びイエルサレムに返りて、彼處よ此處よと道行く人にさへ尋ねけり、さて三日目に基督が聖殿にて學士等と議論しつゝあるを認めたれば、直に兒を携へてナザレットに歸りぬ、其後カナの祝言席に至るまで、正史はマリアの事に就きて毫も記する所なし。

(11)カナの婚筵に關する考證

基督が世に出でたるは紀元三十年にして、御年三十三歲の頃なりき、先づヨルダン川に到りて、ヨアンネス洗者より洗禮を受け、それより曠野に潛み、次でガリレアのカナに來りて、その母マリアと及び門弟子と共に祝言席に列せり、席上葡萄酒罄たる時、マリアは酒罄きたる由を告ぐ、キリゾストムス及び其他の敎父學者の解釋によれば、此時マリアは多少虛榮心に驅られて、其子基督の奇蹟を促し、子によりて母の榮を揚げんと欲したれば、之が爲に基督は少しく過酷なる答をなして、『婦よ、爾と我と何の與あらんや、我時未だ到らず』と曰へるなりと云ふ、然れども他の解說者は、マリアの言は酒の罄きたるを氣遣へる人々を憐むの情より出でたりとなし、基督の言を神の資格として語れるものとして、解說せんと欲し、『何時我が權能を發揮すべきかは、我能く之を知れり、奇蹟を行ふ時刻を定むるが如きことは、母上の事にあらず、此等の事に就ては母上の與り知る所にあらず』と曰はんが如しと云へり。

(12)カファルナオムの住居に關する考證

遮莫、此時基督は、とある四五斗盛の石甕に水を滿たさして、之を酒に變じたりとて、基督の奇蹟中第一に行はれたるものと稱せらる。

其後マリアは親屬及び門弟と共に基督に從てカファルナオムに到り、爾來同地に居をトせしとぞ、然れどもエピファヌスの說く所に據れば、マリアは基督の傳道時

代には到る處基督に隨伴したりと云ふ、但だ正史に斯くと記されざれば、斷言することを得ざるなり、或日基督カファルナオムの家に在りしに、多くの人々集ひ來りければ、門弟と共に食する暇もなく、之が爲に殆ど精神を喪失するまでに疲れ果て、狂氣せりとの評判さへ傳へらるゝに至りたり、マリアは親屬と共に來り、風評の眞否を究めんと、戸外より人を遣はし、基督を呼ばしめたることあり、此時基督の周邊に環坐せる人々基督に向ひ、母と親屬の戸外に在る旨を告げしに、基督は凡て神の御旨に從ふ者はわが母なり、わが兄弟姉妹なりと宣はせられき。

(13)死去及死地に關する考證

基督の受難の時には、カルワリオ山上まで往き、十字架の下に留まりて、一切の苦を基督と共に分ち、悲みの母として今日まで其名高し、基督は十字架の上より母と最愛の門弟ヨアンネスの立てるを見て、母を門弟に托し、門弟を母に與へたり、爾後ヨアンネスはマリアを母として己の家に伴ひ行きつ、復活後直にマリアに現はれたる事は、正史に記されざれども、殆ど疑なき事として見るべし、己と苦を分てる母に先づ第一に復活の悅を分ちて、之を慰めたることは、子の情として必ず然かあるべき事なり、遮莫、マリアが基督の昇天の時と、聖靈降臨の際に門弟等と共に在りたる事は、爭ふ可からざる事實なりとす、爾後はヨアンネスの家にありて、ヨアンネスは己の母の如く之に孝養を盡せり、傳に曰ふ、ヨアンネスはマリアをエフェゾに伴ひ行き、同地に年老て死し、同地に葬られたりと云ふ證據もあるなれども、此說は一般に信じらるゝ所にあらずして、マリアは寧ろイエルサレムに於て死して葬られたりと云ふ說多きを占む、現にイエルザレムの司敎ジュウェナリスはマリアの墓はイエルサレム附近のゼッマニアに在りきと云へり、使徒等が世界に相別れて福音の宣傳に從事せしが、不思議にも急にイエルサレムに相集まりたることありしは、これマリアの死目に逢はんが爲めなりと云ふ、死後マリアの遺骸をゼッマニアの谷に葬りたるに、三日間天樂の妙音聞え、三日目に妙音熄みたるときマリアの死目に逢はざりし門弟のトマスなる者イエルサレムに歸り來りて、マリアの遺骸を今一度拜したしと希望を述べたれば、使徒等は其の切望に任せて墓を發きたるに、遺骸の見付からざりしより、神より昇天せしめられたるものならんと推測するに至りたれど、此等の傳說は必ずしも確固たる事實なりと云ふべからず。

(14)死去及死地に關する考證

一說にマリアは晩年殉敎して死せりと云ふは、シメオン老人の『御身の心及に貫かるべし』と云ふ預言に基けども、然しマリアは殉敎せりと云ふ史實なければ、此言葉はマリアが基督の苦みを見て、斷腸の思ありたりと云ふ意味に解するを適當とす、エピファネスはマリアの死したることも葬られたることも、定かに知り難ければ、其最期に就ては何とも斷言し難けれども、兎に角若し死したりとせば、幸福なる死を遂げたるや疑なしと云へり、今日基督敎會の說に據れば、マリアの死したることは明かなれども、直に復活したるか、或はエフェゾ或はイエルサレム又は其他の地に於て世の終りの復活を待ちつゝあるかに就ては、意見區々なり、斯る次第なればマリアの死去したるときの年齡の如きは、之を研究する必要だになし。

(15)マリアの容貌に關する考證

マリアの容貌に就て說をなす者あり、曰く、マリアは中丈若くは尋常より少しく丈高き方にて、顏色は黃色を帶び、頭髮は淺褐色にして、眼冷しく、眉黑く、鼻筋通りて、唇朱く、手指大きく、風姿質素なれども、何となく重々敷き所あり、服裝は淸潔なれども、毫も華美に失する所なしと、尙ルカスはマリアの肖像を畫き、その畫を手本として複寫したるもの各所にありと傳ふるものあれども、ルカスが畫工なりしと、マリアを畫きたりとは、古書に之を見ず、此等の事柄を傳へたる者は、十四世紀の學者ニセフォールス、カルリストスと名くる人なり、尤も六世紀の人にテオドールスと稱する者ありて、ルカスの手に成りたるマリアの繪畫をイエルサレムよりコンスタンチノブルに送りたる者ありと傳へたるが、これはルカス福音記者がマリアの特殊の性格事歷を描寫したりと云ふところより生じたる誤傳にはあらざるか？。

(16)マリアの書簡に關する考證

世にマリアの書簡と稱するものあり、これはマリアが殉敎者イグナシウスに送りたるものにして、イグナシウスも之に返信せりと云ふ、聖者ベルナルドスは之を眞物と信じたれども、今日に至りては僞物として誰も之を信ずる者なし、尙メッシナの書簡とフロレンスの書簡をマリアの書簡なりと稱し、これはマリアがイエルサレムよりヘブレア語にて認めて遣したるを、使徒パウルスが之をギリシア語に飜譯して、コンスタンチヌス、ラスカーリスが之をラテン語に直せりと云ふ。

(17)回教徒のマリアに關する傳說

回教徒はマリアに就きて例の『コーラン』式の誇張說を加へて曰く、マリアの母アンナはアムラムの妻にして、マリアを孕めるとき、胎內の兒の男兒なるか女兒なるかを知らずして、之を神に奉獻したるに、神は兒にマリアの名を與へり、アンナはマリアを司祭ザカリアスに托せしに、ザカリアスは之を聖殿の一室に閉込め、梯子あらざれば登ること叶はぬほどの高き處に戶を設け、その鍵は自ら之を携帶しつゝ、屢々訪問せしが、マリアはその度每に時ならぬ珍らしき果物を側に置きしを見て、ザカリアスは斯る珍らしき果物は何處より到來したるかと問ひしに、マリアは返答らく、これは皆神よりの到來物なり、神は御意に愜ふ人々には何物も賜はらざることなし。

マリアの潔白なる貞節につきては、基督敎者も及ばぬほどの稱讃の辭を呈し、ガブリエル天使がマリアに現はれて、基督の降誕を告げたるときには、斯く曰へりと云ふ、『マリアよ、神は御身を選び給へり、世界の女人の中より特に選定して御身を清め給へり、マリアよ、主の面前に俯伏して、萬民と共に主を拜み給へ、われは御身に大なる機密を啓示す、神は御身に其の道基督と名くべき者若くは救世主なる耶蘇の生るべきことを告ぐ、彼は御身の子として、現世にも來世にも大に崇拜せらるべし。』

尙茲に注意すべきは、回教徒がマリアの罪障なく母胎に孕まれたるを信ずる事是なり、之に就て記して曰く、『アムランの妻(ヨアキンの妻アンナ)神に祈禱を獻げて曰く、主よ、われは我が胎兒を主に奉獻したれば、全く主の所有に係れりと……女兒を擧げたるとき、又祈りて曰く、主よ、われ女子を生みて、ミリアムと名く、今其女と其女の子孫をも主の庇護の下に托し、サタン(惡魔)の僞計より救ひ給はんことを希ひ奉る』と……尙天使がミリアムに語れる言葉として左の如く記せり。

『神は御身を選び給ひて、一切の汚を清め、世の女人の中より特に選拔し給へり』と。(コーラン第三章三十一句より三十七句まで參照)

コーランの著者マホメットはアビシニアの皇帝ナジャシ、アジマに呈せる書簡の冒頭に左の如き文字を認む。

『神に光榮あれ、唯一、神聖、平和、誠實にして、且庇護者なる神に光榮あれ、我はマリアの子基督は神の靈にして且其の道なることを證明す、神は之を至福至潔なる貞

女マリアの胎内に降して之を孕らしむ、神はその靈を以て耶蘇を造り、その吹噓を以て活せり云々。』

近東基督教者の傳ふる所によれば、マリアの基督を生みたるときは、芳紀僅に十三歳にして、五十一歳まで存命せりと云ふ。(五十一歳存命説は憑據あるにあらざれば固より信ずるに足らず)

(III)マリアの品評

(1)マリアの女人の中に祝せらるゝ所以

(A)無原罪の御孕り　人間世界に一帶の川あり、名けて原罪の川と稱す、其源を人類の始祖アダム、エヲより取り、廣く天下の人間を通じて流る、此川や埿波漫々、濁流滔々として、到る處に汚毒を遺す、不幸にして此の世界に生れ出でたる人間は、皆此川の流毒を被らざるはなし、源濁れば其末も濁るは、當然の理なるぞ是非なけれ、然るに同じくアダム、エヲの子孫にして、ひとしく此世に人間と生れつゝも、天の攝理によりて只獨り此川の汚毒に觸れざる最も清き御一人ありき、即ち是れマリアなり、所謂『出淤埿而不染、亭々獨淨者。』

マリアは救世主基督の母として、生れながら原罪の汚なく、知識は明にして夙に神を認め、意志は正うして深く天の意に恢ひ、身體の清淨なるは天使を欺くばかり、精神の皎潔なるは、實に人間の胤とは思はれず、思も言も行も皆正理に合し、内には邪惡の傾僻なく、外には不淨の誘惑なし、一身を神に奉献して志す所は唯だその光榮を發揚する事のみ、嗚呼是れ實にマリアの心事なりとす。

世には生るゝ以前に特別の天寵によりて、原罪を清められたる聖者あり、ゼレミアス、ヨアンネス洗者等即ち是なり、然れども母の胎内に孕れる一刻より原罪の汚なきものは、獨り基督の母マリア御一人のみ、是れ古今に例なき事なりとす。

人は皆罪に於て孕り、母は罪に於て孕むものなるに、マリアのみは偉人基督の母となるべき約束によりて、罪なく孕り給ひて、人間一般の常則を脱しぬ、宛も世界の大洪水の際に、獨りノエの一族のみ救かりしと同一の觀を示せり、昔は古聖ヨブ、一切の人が罪にはらまれ、罪に生るゝを見て、人生を咀呪したることあり、是れ亦ダヴィド聖王が『われは惡に孕り、吾母はわれを罪にはらめり』と嘆きたる所以なり、ヨブの如き古聖、ダヴィドの如き聖王すら、此の如しとせば、天下何者か罪惡の裡

に孕らざる者あらんや、然るに基督の母マリアのみ獨り其母アンナの胎内に孕れる刻一刻より原罪の汚を清められたりと云ふ所以は何ぞや、一切人間の罪を償ふべき救世主基督の母となるべき約束ありしを以て、早く既に母胎に孕れる時より清められたればなり、罪を救ふべき者が罪ある者より生るべき理なきを見れば、マリアの無原罪の御孕りは、之を見ても略ぼ推知す可し、女人の中にて祝せらるゝ所以、乃ち先づ第一着に此點に在りとす。（因に曰ふ基督教者中にはマリアの無原罪の誕生を說て、無原罪の御孕りを說かざる者あり）

(B)悅ばしき御誕生　人の世に生るゝは悲しき者よ、故に泣て生る、何人も笑て生るゝ者はなし、是れ何ぞや、罪を以て生るゝが故なり、神の咀を受けて出づるが故なり、涙の谷と云はるゝ此世に顯はれ出づるが故なり、人間の一生は泣て暮し、泣て死するに在り、故に生るゝときも亦泣くを常とす、人生の一頁は實は泣くの一字を以て始まるものなり、然れども茲に罪なくして生れ、神の咀を受けずして出づる者あれば、その生出は自らも之を悅ぶ可く、人も亦之を悅ぶ可し、而してマリアは實に此の如きものにして、前にも述べたるが如く、母胎に在るときより既に原罪の汚なかりしと云ふ、故に其生れたるときは、心身共に潔白にして、一點の汚もなく、所謂天の恩寵にみち〳〵て、神の寵兒として生れ出でたる者なり、是れその誕生の悅ばしき所以なりとす、基督教會に於ては祝す可き聖者甚だ多けれども、誕生を祝せらるゝ者は基督と基督の母と基督の先驅ヨアンネスの三人のみ、而してマリアの誕生は基督の誕生に次で祝せらる、加之ならず、マリアの誕生は一種特別の榮譽を以て包まる、設令其父母が當時隱晦の生を送りたりと雖、その先祖を考ふれば、ユデア國の創業者たるアブラハムの血胤にして、同國諸王の始祖ダヴィト聖王の苗裔なりき、何ぞ其系統の貴きや、又マリア自身の備へたる聖寵と聖德とを考ふれば、神を除いて天にも地にもマリアに及ぶほどの完全無缺なる者はなし、何ぞ其身の高貴なるや、若し夫れマリアの前途將來を考ふれば、救世主の母となるが爲に生れ、基督と共に救世の事業を行ふが爲に生れ、一國一民のみならず、世界萬民、否、天地神人の皇后となるが爲に生れたり、何ぞ其歸趣の顯要なるや、斯ればその誕生の天に歡ばれ、地に喜ばるゝ所以は、當然にして、最早誕生の當時より、聖父はマリアを愛孃と見、聖子はマリアを聖母と見、聖靈はマリアを

淨配と見、天使はマリアを皇后と見て、天上に於ては盛んに其誕生を祝したるならん、地上の人間にしてマリアが救世主基督の母となるべきを豫知せんには、誰か其誕生を救世事業の端緒として、正義の天日の曙光として祝せざる者あらんや、尙マリアの誕生は一種の珍らしき奇蹟なりとす、其父母ヨアキンとアンナは孰れも年老いて子なきを悲み、夫婦相共に神に祈禱を献げ、人に慈善を行ふて、只管に天より一子を授からんことを祈り居たりと云ふ、斯る處へ天は其の願を聽屆けて、偉人の母となりて、母子相共に偉業を行ふべき者の生るゝを告ぐ、父母の歡喜果して如何ぞや、斯く觀じ來るとは、マリアの女人の中にて祝せらるゝ所以は、其誕生に於ても既に知らるゝ譯なり。(基督教會は前記三聖の外、他聖者は唯其死去の日のみを祝ひ、其日を誕生日となすは、佛者の極樂往生と同じ考より出づ)

(C)珍らしき御名　『嗚呼美なる哉御名』とは、ダヴィド王が天の盛德を見て感驚の餘り絶叫したる言葉なるが、此語は直に移してマリアの御名に應用するを得べし、抑々マリアの名は天より啓示せられたる者なり、天先づ之を考へ、而る後之を人に示したり、惟ふに神は之を天使に授け、天使は父母に傳へたるものならん、マリアの名は之を學者の說に考ふるに、種々の意義ありて、何れもマリアの品位及び使命に相應しゝ、今少しく之を左に說かんに。

(1)マリアの御名は光明に由來す

先づ第一『光明』より由來せる名なり、ベルナルドス及びボナウェンチュラ等の學者の說に據れば、『照者』『被照者』の意味ありと云ふ、『被照者』とはマリアが天の光明に照らされたるの謂にして、その知識直接天啓の光に照されたるのみならず、聖書を讀みては、聖靈の光に照され、基督と睦み語らひては、其の明知に照されて、身は全知者(聖子)の玉坐となり、聖靈の御堂となりたるに徵して明なり、『照者』とは世の光を人に傳ふるの意なり、基督は世の光にして、人々はマリアによりて基督を見ることを得たるものなれば、取りも直さずマリアより照らされたる譯なり、創世記に神は二大光明を造り、一は大にして、一は小なりとて、日月を造りたることを記せり、而して月は日の光を受けて、夜間人を照らすものなるは、今更言ふ迄もなし、マリアも亦月の如し、基督より其の光を受けて、世の闇冥を照らすものなり、マリアが『火の柱』を以て表徵せらるゝ所以も亦是れ世の人々を導く光の意にして、彼の火の柱はイスラエルの人民がエジプトより出でたるとき、夜間先立ちて之を照

らしたるものなるは、人の皆能く知る所なり、然らば、マリアは何を以て人を照らし、世を照らすかと云ふに、そが一生の聖德は萬世の儀表となるの意にして、畢竟清き德の光を以て世の人々を照らすを謂ふなり、此等の理由より『曉星』とも稱せられ、『海星』とも稱せらる、曉星は旭日の登るを示し、海星は海上の船舶を導くものにして、旭日の登るを示すとは、正義の光と稱せらるゝ基督の出づるを意味し、海上の船舶を導くとは、波風荒き浮世の海を渡る人々を天上無窮の港に導くを示すものたるや、啞々の言を待たずして知る可し、實にマリアの名は意義の深き名なり。

(2)マリアの御名は權能に由來す

第二は『權能』に由來する名にして、マリアの名をヘブレアの言語より考ふるときは、『高登』、『向上』、又は『主婦』、『母后』等の意味あり、前者は高く登りて神に接近し、一躍直に造化主に迫まらんとするの意を寓し、後者は偉大なる基督の母として、その子と共に世界の精神界を司配するの義を示すものなり、マリアを『國母』と稱するは、基督を世界の大主と仰ぐより出でたるものなれども、マリアの名既に此の意義あり『天地の皇后』、『天使の皇后』、『聖者の皇后』等の名稱は必ずしも稱讃一遍の辭にあらざるなり、名は實の賓なり、マリアの名は其の實と相適ひ、決して虛名にあらず、此等は實際マリアの名を口にして高德に進み、偉業を企て、大惡に打克ちたる古來の聖者の言動に徵して知る可し。

(3)マリアの御名は光榮に由來す

第三は『光榮』より由來したる名にして、アムブロジウスはマリアの名を解して『神吾族より出づ』と云ふ意ありとせり、是れマリアの榮譽なる名稱にして、その品位の高き、此の一語によりて示さる、マリアの『基督の母』、『救世主の母』たるは事實にして、基督が世界の大聖と稱せられ、神として崇めらるゝ所より、マリアは『聖母』又は『神母』と稱せらるゝものは、獨り基督の母マリアのみ。

述べ去り述べ來りて爰に臻れば、マリアの女人の中に祝せらるゝ所以、その珍らしき御名に於ても之を見るべし。(基督教會にてはマリアの御名の祝日なるものありて、年々之を祝ひつゝあり)

(D)幼時の御奉仕　マリアは三歳の頃よりイエルサレムの聖殿に詣り、聖殿の傍に在る修房に入りて、身を修め、神に奉仕しつゝ、將來神の母となるの素地を築きたりと云ふ、ユデアに於ては珍らしく生れたる子を神に献ぐるを以て、古來敬虔

家の習慣となしたりき、珍らしく生れたる子とは、其父母が天に祈り、神に願を掛けて、授かりたる子を云ふ、サムソン、サムエル、ヨアンネス洗者等の例に徴して之を知る可し、マリアの父母ヨアキンとアンナは老年に至りて子なきを憂ひ、神に祈りて之を受け得たるが故に、未だ兒の生れ出でざる以前より之を神に献げんことを誓約せり、されば、マリアの生れて年甫めて三歳になるや、父母はかねての誓約に違はず、イエルサレムの聖殿に伴ひ行き、兒の未だ幼少なるにも拘らず、又恩愛の絆につながるゝにも拘らず、斷然之を神に奉献することに決したり、その敬虔の念の深き者にあらざれば叶はぬ事なり、さるにてもマリアの心事の殊勝さよ、未だ三歳になるかならぬ内より、奉神の志を立て、父母の膝下を離れて、その誓約を全うせしめ、聖殿に行くみちすがら、宛然天使に伴ひ行かるゝが如く欣び勇みて歩み行けりと云ふ、聖殿に到れば、父母に別を告げ、階段を登り行きて、司祭の手に托せられたり、司祭は受け取りて頭を撫しつゝ、敬虔なる婦人の修房に伴ひて、マリアを婦人に渡し、神に奉仕する道を教へしめぬ。

(1)神意に慴ふ献身

マリアの献身は他の人々の献身と撰を異にして、最も神の聖意に適ひたるや必定なり、何となれば母の胎内に孕れるときより罪を清められ、天の恩寵を具備して生れ出で、其の知識明に、其の意志正しく、其身既に德操に富みたれば、神に献ぐる物としては之に優る供物なし、神の嘉納したるや、言はずして知る可し、マリアの身は未だ浮世の波風にもまれざるに先だちて、早く既に神に献げられたるに於て、神の寵眷を惹くこと大方ならざりしが、尚その身をも心をも擧げて、神の犧牲に供し、渾身を神の所有に歸したれば、尚更に神の愛眷を蒙りたり、マリアの奉仕する狀は洵に謙遜なりき、主の婢女の名義を全ふせんが爲に、己を無き者のやうに看做して、命を奉ぜり、マリアは斯く奉仕しつゝ、一生の貞節を神に誓ひぬ、而してマリアの貞節は古今東西に例なし、世には草庵に住む比丘尼あれども、こは貞女の名のみ、古ローマには「ウェスターレス」とて、火神に奉る燈明を守る童女ありたれども、こは固よりマリアに比するに足らず、世の所謂貞節の婦人なるものは、單に二夫に見えざる者若くは配偶者逝去の後未亡人となりて節を持する者を謂ふに過きず、ユデア國に至りても其國の男女を問はず、皆婚姻あるを知りて、貞獨なるものを知らざりき、啻に閭巷の細民のみ然りしにあらず、聖殿に奉仕せる

レヴィの族司祭族も亦然り、彼の司祭、大司祭と云はれたるものも、しかありき、されば、良人なきを不滿足に思ふは、天下婦人の常情なり、さるに幼少の折より一片の氷心を唯一の神に献げて、一生何人にも肌を許さず、眞正貞女の儀表となりたる者は、獨りマリアあるのみ。

（2）聖堂に於ける生活

マリアは聖殿に奉仕して如何なる生活を送りしか、神に對する生活は如何、人に對する生活は如何、又己に對せる生活は如何と云ふに、神に對しては專ら神の聖旨を奉戴して、御意に愜はんことをのみ務めたり、其心は始終向上して神を拜し、神を讃し、神を愛し、塵土の慾念とては露程もなく、何時も又何處に在りても神の尊前に在せるが如く慎み、何事を行ふにも神の光榮に歸せんことのみ志して、他念なかりき、聖祭及び聖式に列するときには、敬虔の心もて恭しくその意義を默想し、日々の時間は祈禱と聖書の研究とに分ち、神前に出でゝ直接神に祈りて後には、聖書を開て神の聖旨を求めたり、蓋し祈禱は神との直談にして、聖書は神の聖旨を知らしむる書簡なればなり。

マリアの人に對する生活を記せば、長上に對しては深く敬意を表して命に從ひ、長上の命は神の命として神に從ふが如く從ひたり、されば之に對しては一言も不平がましき言を發せざりき、朋輩に對しては溫和、親切、堪忍を旨とし、我よりは毫も朋輩の意に逆ふ言動を示さず、朋輩より意に戻る言を聞きたるときには、忍びて爭はず、誘らず、始終愛德を以て交りたり、時に貧民及び病人に對しては尙更に慈悲心深かりき。

マリアの己れ自身に對する生活は、日々身を修め、德を磨くに在りて、貞操と沈默とを守り、謹慎を旨とし、質素を好み、節制を愛し、克己の精神も珍しかりしが、謙遜の心は特に感ずるに餘ありき、されば神の愛眷日に益す加はりぬ、勤勉にして業を勵み、聖殿の粧飾、司祭の聖服等に從事するを以て無上の光榮としたりき、如何なる賤しき仕事をも厭ひしことなく、聖殿に奉仕すること凡そ十二年、其間道德の進歩は實に驚くばかりなりき、神の前にも人の前にも愛眷を蒙り、その德操の高きを見て嘆せぬものはなかりしとぞ。

さればマリアの女人の中にて祝せらるゝ所以は、その幼時の奉仕に於ても見るに難からざるなり。（今日基督教會に於て貞女と稱せらるゝ一種の尼あり、獨身

生活を送りつゝ、神に奉仕す、是れマリアの御奉仕を理想とする者なり）

（E）天の御告　『處女に神よりガブリエル天使を遣はされたり、其處女の名はマリアと云へり』神はガブリエル大天使を大使としてマリアに遣はせり、こは地上に例なき所なりとす、ガブリエルとは誰ぞや？天上第一流の天使なり、其名は神の力と云ふ意味なり、如何なる目的の爲に遣はされたるか？大國の帝王に遣はされたるにあらず、宮殿の皇后に遣はされたるにもあらず、賤家に住へる處女に遣はされたるなり、大使の語る所何事ぞ？先づ鄭寧に敬禮をなし、『慶たし、聖寵みちみてるマリア、主爾と偕に在ます、爾は女の中にて祝せらる』と云ふ、マリアの驚きさこそと察せらる、マリアは此敬禮と此祝詞の如何なる意なるかを知らざりしかば、默然返答せざりしかども、その默々の裡に深き謙遜と謹慎とを表明せり、大使はマリアの驚きを靜めて、マリアよ、『懼るゝ勿れ、爾は神より恩寵を得たり』とて、徐に救世主の母となるべき旨を告ぐ、マリアは『如何にして此事行はるべき』とて、一生貞獨の誓を立てたることを云ふ、天使は『聖靈なんぢに臨り、至上者の大能なんぢを庇ん』とて、神の萬能によりて事の行はるべきを告ぐるや、マリアは遂に承諾の意を表はして曰く、『我は是れ主の婢女なり、言の如くならんことを』と、果して言の如く成れり、即ちマリアは處女にして母となれり、基督は生れたり、救世の偉業も其の兒基督によりて行はるゝに至れり、世には處女にして母となれるを訝る者あらん、既に處女たらば母たるべき理なく、又母とならば處女たるの實なし、是れ實に世間一般の理なり、然れどもマリアは天の特殊の攝理によりて、『處女たると同時に母となること』を得たるものにして、是れは不可能事なりと云ふべからず、之が例は天地間の事物にも之を認むることを得べし、夫れ太陽の光は玻璃の窓を通じて、毫も其窓を損せず、基督は正義の光なり、玻璃の如く清きマリアの胎内を通じて、毫も其の貞德を損せざりしこと、何ぞ怪むに足らんや、神子托生の理は玄妙にして固より常理を以て律すべからざれども、その不可能事にあらざることは、如上の比喩によりても知らる、さるにても處女の貞操を持すると同時に、母となるの光榮を獲たるこそ珍らしけれ、マリアが女人の中にて祝せらるゝ所以も亦茲に在り、大天使ガブリエルが此の大事を告ぐるに當りて、『爾は女の中にて祝せらる』と嘆美したるその言葉の意義は實に深長なり。（基督教會にては

朝、晝、晩御告の祈禱なるものを唱ふるを例とす)

(下)辱なき御訪問　マリアはナザレットに住居して隱晦の生を送りしが、或日急に思立ちて旅路に就き、山地なるエリザベットの家を訪問せられぬ、此行洵に思ひがけなき事なり、そもマリアの訪問せられしは好奇心に驅られたるにあらず、己の事を人に示さん爲にもあらず、唯々天啓に從て神の光榮を揚げ、人の利益を謀らんが爲なることは御訪問の結果を見ても知らるゝなり、天使はエリザベットに異象の行はれたるを告げ、聖靈はヘブロンに行く心を促し、胎内の御子基督をして、エリザベットの胎内に在りし先驅ヨアンネス洗者に豫め救世の恩を及ぼさしめんとしたるものなるが故に、此行は眞に天より差遣せられたるものなり、マリアとエリザベットとは親類に當り、特に親しく交りたることゝて、エリザベットが年を取りて子なき耻を免れたるを聞き、一には之を賀し、一には何かの手傳をなさんものをと、親切一片の心より訪問せられたるものなれば、此行は前述の如く全く神の光榮を揚げ、人の利益を謀らん爲にて、救世主なる基督の母には實にふさはしき理由ありたるなり。

此の訪問によりて如何なる德行を發揮せられたるかと云ふに、第一マリヤは胎内の御子に相應しき愛德をエリザベットに示されたり、天啓を受くるや直に往きたりと云へば、その愛德は一刻も猶豫せざりしを見るべし、山地を越えて遙々遠き旅路を辿られたりと云へば、その愛德の勇ましかりしを見るべし、三ヶ月の久しきが間滯在して何吳れとなく手傳の勞を執られたりと云へば、その愛德の永く繼續して、決して一時的のものにあらざりしを見るべきなり、人に親切を盡さんと欲するものは、宜しく此の如く速かに、勇ましく、且永く繼續する愛德を示さざるべからず、特にマリアは最とも珍らしき謙遜の德を示されたるが故に、エリザベットまでも驚きて、『わが主のわざ〳〵われを訪問ひ來られしは、何たる辱なき事ぞ』と大聲に呼ばりたりと云ふ、エリザベットはマリアが神の母に選ばれたるを知りて斯く呼びたる者にて、普通の女人ならば神の母となりたるを誇りて、虛榮心を遺憾なく滿足せしむべけれども、マリアはエリザベットより賞讃の辭を聞きて悉く神の光榮に歸し、有名なる『我心主を崇め云々』の讃美歌をぞ歌はれける。此行如何なる効果を及ぼしたるかと云ふに、マリアがエリザベットを見舞ひて其

の目出度きを賀し、その心を慰むる話を交はし、何呉れとなく手傳はせたる事は姑く措くも、マリアの胎内の偉人がエリザベットの胎内の偉人と相呼應して、何等かの默契ありたるものと見え、エリザベットの胎兒は雀躍して欣べり、後年ヨルダン川に相會ふて洗禮を授受したる偉人と偉人、最早此時より母と母とを介して相會合せり、マリアが基督の胎兒の時より早や既に斯くまで之に奇功を奏せしめたりとせば、後日偉人として世に出でたるとき、基督に驚天動地の偉業を行はしむるに至りたること、毫も怪むに足らざるなり、エリザベットは此等の異象を見て感に堪へず、大聲に呼ばりて曰く、『御身は女の中にて祝せらる、又御胎内の御子も祝せらる』と、マリアの女人の中に祝せらるゝ所以は、エリザベットを訪問せる時にも聲高らかに呼ばれしこと、實に此の如し。（基督教會にては御訪問の祝日と稱するものもあり）

（G）四十日目の取潔式　『モイゼスの律法に循ひて潔の日滿ければ、嬰兒を携へて主に献げんが爲、イエルサレムに上れり』、モイゼスの律法に依れば凡て婦人男子を生むときは、四十日の間は不淨と看做され、その後宮參りして子の爲には羔一頭、母の爲には山鳩或は雛鴿各々一羽を捧げて、産後の潔を請へり、然れども若し家貧くして羔を買求むること能はざるときには、二羽の山鳩或は二羽の雛鴿を捧ぐるを以て足れりとせり、尚此時冢子を産みたる者は、之を神に献ぐる儀式あれども、茲にはマリアの事のみを記す意なれば之を略す。

モイゼスの律法には子を産みたる婦人を潔からざる者と看做し、其の汚を清めざれば、聖殿に入ることを許さゞりき、マリアは聖靈の奇特によりて子を擧げたるものにして、普通の出産婦人とは大に選を異にしたれば、固より此の如きの律法に從ふべき理由なかりしが、謙遜と法を重んずるの心より茲に出でたるものなり、抑々此の取潔式は出産を以て罪となしたるにはあらざれども、人類の始祖の罪所謂原罪と稱するものが出産を以て傳はることを記憶せしめて之を清めたるものなり、故に此式は原罪を前提し、原罪の罰として苦痛を覺えて子を生むべしと云ふ事實をも前提したるが故に、マリアは身に原罪の汚れなく、基督を生むときにも何等の苦痛をも感せざしりかば、潔白なる處女の身にして取潔の必要更になかりしが、謙遜の手本を垂れ、法を重んずるの龜鑑を示さんが爲に姑く

出産の汚ある者の如くに裝はれたるなり、然れども尙深く立入りて神の聖慮を察すれば、他にも重要なる理由あり、そは他にあらず、マリアの身に行はれたる不思議の奇蹟を一時世に隱し、處女にして子を生めることを人に知らしめずして、さながら普通の婦人の道によりて母となりたるが如く見せしめんと計らはれたる者なり、マリアも神の此思召を奉じ、普通の婦人の如く四十日間聖殿に參詣することを控へ、隔離せる室に蟄居して、謹愼を表したるが、四十日目に聖殿に參詣したるときにも、普通の婦人の如く法定の犧牲を献げて取潔式を受け、他の人々にも亦普通の婦人の如く出産して汚れたる者の如く思はるゝを忍べり、マリアの謙遜は玆に到りて極まれりと謂ふ可し、自らたかぶる者は人之をさげ、自らへりくだる者は人之をあぐ、マリアの女人の中に祝せらるゝ所以は、斯く謙遜を極めたるに由る。(基督敎會にては毎年二月二日マリアの取潔式の紀念祭を執行す)

(H)光榮なる御昇天　基督は十字架上に死去するに當り、其母マリアを最愛なる弟子に托したるが、その深意は昇天後マリアを地上に遺し、門弟を慰め且敎へしむるが爲にてありたり、マリアは基督の深意を汲みとりて、基督の昇天後しばらく地上に餘生を送りつゝ、最初の基督敎徒の儀表となりぬ、一般の傳說に據れば、基督の昇天後少くも二十年餘り存命せられたりと云ふ。

固より特別の天寵によりて原罪を免れたるものなれば、原罪の罰と云はるゝ死をも免るべき筈なれども、基督まで一生一死の道を經て昇天したれば、マリアにも同じ道を經由して昇天するやう計らはれたり、然れども、マリアに取りては死は罪の罰にあらざれば、他の人々の如く病氣、艱難、苦痛等を覺えて死したるにあらざるや明なり、然らば如何なる理由によりて死したるかと云ふに、御子基督を見たさの切なる愛情によりて死したるものなり、死とは靈魂と肉身の相離るゝことに外ならざれば、マリアの靈魂は一日も早く基督の許に往かんとの切望によりて、天もその切なる望に酬ゐんと欲したる結果、何等の病苦もなく、最と心靜に肉身と相離れて歸天したりとは、一般に傳說する所なり、臨終の際カブエル天使天より遣はされて之を告げ、歸天の際基督自ら天降りて之を迎ひたりとは、基督敎學者の傳ふる所なるが、兎に角マリア逝去の折には使徒門弟等不思議にも急にイエルサレムに集りて、その死目に逢ひたるが、獨りトマスのみ不在なりし

と云ふ、(但しヤコブスは既に殉教したれば、此の人は勿論之に加はらず)、使徒門弟等葬儀を營みてより三日目にトマス來り、基督の母の死目に逢はざるを太く殘念に思ひ、今一度御拜顏の榮を得たしとの切なる希望により、ペートルスとヨアンネスは其の希望に應じて墓を開きたるに、不思議にも墓の中には御遺骸を包みたる衣巾のみありて、御遺骸は地上何處にも見當らざりしと云ふ、是に由りて基督が死して三日目に復活したるが如く、マリアも死後三日目に歸天したるものと推測したるものなり、兎に角マリアは上天の深き攝理によりて七十年の久しき地上に存命して、その德香の充分世を薫化したる後、芳姿を墳墓に收められたるや明にして、死後三日目に墳墓を開きしに、芳姿は見えず、唯だ香氣馥郁たりしと云へば、即ち是れ德の錦を衣飾り天の故鄕に歸りて、人情の榮を極め、天の皇后として永く天地神人にほめたゝへらるゝ身となりたるものなり、女人の中に於て分けて御果報いみじきなりと祝せらるゝ所以は、此の光榮なる歸天に於て愈よ益す明に之を見るなり。(基督敎會にてはマリアの御昇天を基督の昇天と區別するが爲に、被昇天と稱す、毎年八月十五日盛に之を祝す)

(五)基　督

(一)基督の傳記

(一)基督の誕生

基督誕生當時に於けるローマの國狀

基督の誕生の事を按ずるに、其の誕生せるユデア國を始め、其他の諸國は大概ローマ國皇帝の權勢の下に服從し居れり、此のローマは紀元前七百五十二年を以て建國せし國なるが、基督降誕の時に當りて、西方諸國中最も權勢を持して、ローマ國は其第一位に居り、諸國をして其下に服從せしめたり、元ローマ國は共和政治にて有りしと云へども、久敎前より既に數多の內亂競爭等起りて、無數の軍兵殘虐の爭鬪を以て、大に其國を擾亂せり、即ち其爭鬪の中一方の者は共和政治の自由を得んと欲し、又た一方の者は帝王の政權を握らんことを欲せしなり、而して其の爭鬪擾亂の時、群雄相爭ふ中に於て、遂に一人の英傑現出して能く數多の敵を伐り平げて、自ら其國の帝位に即けり、其の英傑とは彼のセザール、オグストスと稱する者是なり、實に紀元前三十年の事なりき、此時迄ユデア國を治めし諸

王は、孰れもユダの子孫なりしが、遂にローマの屬國となりし故、ヘロデスと云へる人此のユデア國に封せられたり、元來此王は昔より王族にも非ず、ユデア人の種屬にも非ず、東部アフリカのエチオピアと云ふ一の外國人にして、紀元前四十年ローマ國に降服して其の保護に依り、幸に此國の王となりたるものなり、ローマの總王オグストス皇帝は、即位の後國政上一の創設をもなさず、一の改革をも行はざれども、躬親から其の巧智を用ゐて天下の萬機を總攬せり、又恩德を施して以て其の國民を懷け、寛裕を示して以て其の仇敵を和らげ、內には人心の一致合同を計り、外には侵略を爲せる數多の蠻人を驅逐平定し、遂に其の廣大なるローマの版圖內をして天下泰平を謳はしむるに至れり、昔時先知者イザイアスの豫言に曰く、彼れは平和の王と稱せらるべしと、又ダヴィド聖王の詩篇に曰く、彼れの將に出でんとする時は、必ず戰ひ止まん、又久しく亂れたる世界は彼れを受くるが爲、必ず一時平安を致さんと、夫れ此時に當りて基督はユデアのベトレエムに降誕せり、今先づ其母マリアが如何なる事に由りて彼のナザレットより遠く此のベトレエムに來りしやと云ふに、そもベトレエムとナザレットとは相距ること

基督のベトレエムに誕生せる理由

殆ど三十里あり、其の間又た多數の山嶺ありて、夫れが爲め道路頗る險惡なり、而して又マリアは懷胎して凡そ九ケ月をも滿つれば、ナザレットよりベトレエムに往かるゝの必要はあらざりけるが、總王なるオグストス皇帝は諸國を平定して天下泰平となれる其の榮譽權勢の祝賀に於て、其下に在る屬國人民の幾何なるやを知らんことを欲したり、因りて其の廣大なる版圖內の國民をして、各々其の本地に行きて族籍を報記せしむるの令を出せり、こは啻に自己の榮譽の爲のみに非ず、尙又之を以て其の國威を尙一層輝さんとの意なり、即ち其の版圖內幾千萬の國民をして各々ローマ帝國に其の服從の證を爲さしめんとの意なり、且つ又其の族籍を報記せしむると共に、各々若干の金を納めしめたるを以て、其の國庫を補益せしめしも大なり、此族籍の調査は彼のユデアを管理せるシリアの縣內には、時の治官は正に五年間を費やせしとぞ、ベトレエムは實にマリアとヨセフの故鄕なり、何となれば二聖の祖先ダヴィド聖王の故土なればなり、亦もベトレエムは一の大邑なり、現今其の住民は凡そ四千有餘人ありて、其中二千人は公敎を信奉せるものにして、一千五百人は希臘敎徒、又五百人は回々敎徒なり、其の人

ベトレエムの地勢

家は僉な白色にして宛も雪の如く、高き丘陵の上に整然として列立し、殆ど畫圖の觀を呈せり、其の丘陵上より葡萄樹檻欖樹等の滿生せる斜坂に隨て、ベトレエムの三方を圍繞せる谿谷中に降り得べし、ベトレエムの景色は清麗にして大に心目を喜ばしむ、其の近傍は土地甚だ沃饒なるを以て始めは豐饒地と稱せられたり、又ベトレエムと云ふ名稱は蒸餅の家、詳解すれば、蒸餅の充てる家の意味なり、即ち程なく該地の人々に彼の天より降れる生ける蒸餅(基督)を與へられたればなり、又先知者ミケアスの豫言に曰く、汝ベトレエムよ、汝は、ユダの邑中に於て至小なるものにあらず、其は我がイスラエルの民を治むべき王汝の内より出づべければなりと、果して空しからず、距今凡そ二千年前既に其の成就を告げ、ベトレエムをして甚だ著名なる所とならしめたり、マリア、ヨセフは祖先ダヴィド聖王の此地より出でし一千餘年の後なり、二聖は曾て茲に住みたることなかりしを以て、固より該地を知らざりき、遍く西國を支配するオグストス總王は如何にも天下泰平なれば、屬國の人民僉な故郷に戻り、其名を族籍に登載す可しと命ず、其命をきゝて各々人別に洩れ間敷とて、僉な故郷に歸る者雲霞の如く集りて、其の

混雜云ふ計りなし、老たるは手を曳き、幼きは懷に抱き、老若男女群集なしけり、故を以て該地の家屋は盡く充滿せり、則ち親族を有せる者は夫々の家に宿らしめたり、親類を有せざる者は皆共同の旅舍に投宿せるほどに、更に餘す所なきに及べり、因りてマリア、ヨセフは邑内既に投宿すべき旅舍なきを以て、郭外に出で夜を明すに足るべき一所を求めたり、即ちベトレエムの東の方二百歩計りの地に一つの洞窟有りけり、此の洞窟は時として牧者又は旅人等が羔羊、牛馬を入れて夜を凌ぐ所なり、此に於てマリア、ヨセフは一夜を此所に明さんと、其の洞窟に入りしが、夜は最深々と更けにけり、これなん天地開闢より四千有餘年、今を距る一千九百十二年(我が朝神武天皇元年より六百六十年、垂仁天皇二十九年庚申、漢の哀帝元壽二年に當り)、嗅は十二月廿四日の夜半の事にて、寒風烈敷肌を劈きて堪へ難かりし夜なりしが、マリアは頻りに胎内の動きぬる事を覺へければ、偖こそ聖子は此所に御誕生在さんとの思召を知りつゝ、洞内の奥なる片隅の最靜なる所にて默然として敬畏の心を神に捧ぐる折しも更に苦痛を覺へず、倏ち安かに一子を産めり、是れ即ち救世主基督なれども、今誕生の時常人の乳孩の如く出世

し、裸身なるに依て、マリアは布を以て之を裹み、羈旅にありての誕生なれば、馬槽と少許の藁の外入用の物何等も具せず、實に困窮至れり、誰か之を視て貧人の中にも至極の貧と想はざらん哉、又マリアは固より依然たる貞女にてありしが、之を譬ふるに玻璃水晶の恰も太陽の光を透徹するが如く、其の本質は毫も毀損せざりき、其の折地面は僉烏羽玉の黑暗にして、更に物のあやめも別つこと能はざる夜なりしが、倏ち空中は光明赫々として白晝の如く、又も九品の天使の群り來る光景は綾羅錦綉珠玉を鏤めたるが如く飜々閃き渡り、黑白赤紫の雲中より『天の最上に光榮あれ』と唄ひながら聖子の前後左右を守護なし奉る樣は、世上の太子公卿の幼君を齋き奉るに異ならず、又も空中にては奇々妙々なる音樂を奏づる響聞え、天官地府に徹して清朗たり、折しも一つ異なる星が天空に懸り現はる、若夫れ種々の事細かなる祥瑞は拙き凡夫の肉眼には見えざりき、偖もマリヤはヨセフと偕に產みなしたる赤子を古き布にて包み、權に旁に有り合ふ馬飼の槽に入れ參らせ、臣禮を以て默禮瞻拜祈りを凝らして後、生みの母たる愛情より、遂に懷に搔き抱きぬ。

嬰兒基督

誕生地に於ける聖堂

基督は柔弱なる乳兒と見ゆれども、是れぞ救世の偉業を行ひたる世界の偉人なる、又尊體は布にて裹まれ、槽間に置かれたれど、後日世の精神界を震蕩したる大君主なり、故に其身は嬰兒の形ちを受けたれども、天使は俯伏して之に恭敬を盡し、マリア、ヨセフは俱に矚視して、慈愛の厚きより涙を流し、虔然として拜禮せり、偖又基督が誕生の場所を洞窟の厩に選びたるは、實に玄妙の深意に出で、決して偶然の事にあらざるなり、基督が金銀珠玉を裝ひたる燦爛美麗なる宮殿の中に誕生せずして、狹矮卑陋の厩を擇びたるは、諸人に謙遜赤貧の至德を敎へんが爲めなり、洞窟の厩は今尙現存せり、コンスタンチヌス皇帝の母后エレナは嘗て其所に一の宏壯美麗なる聖堂を建立せしが、其の聖堂も尙亦今に存在せり、方今其洞は即ち聖堂內の聖所の下に在りて、左右よりの梯子にて此に降り得べし、其の內部の上は窿穹として、宛も圓き天井の如く、之に許多の蘭燈を懸く、其深さは三十七『ピエー』にして、幅は十一『ピエー』、又高さは九『ピエー』なり、基督の生れたるは其奥にして、其所には今四『ピエー』の高さに至る迄蠟石を以て其岩を裹めり、又其所に蠟石の大板を置きて、祭壇に備へり、又基督の生れたる所より七步計り隔りて、

牧人天使の告を受く

洞の脇に横に穿てる一所あり、是れ即ち馬槽のありし所なり、其馬槽の木片は今尙ローマの聖堂内に之を保存せり、時しもベトレエムの東の方大約半里計りなる近傍に、羊を牧ふ者三人野に居り、夜間寢ずして羊の群を守り居たりしが、忽ち奇怪なる光の閃き輝けるよと見る間に、斯る暗が忽ち白晝の如く明になりければ、牧人等は互に顏と顏を見合せて、此は不思議なる哉と四方を見まはし、大に怖れ戰き怪みたる程こそあれ、鮮かなる衣服を着して電光の如く閃き輝ける天使が忽然と其所に顯れて、牧人に向つて宣はく、汝等必ず供に懼るゝ事勿れ、汗も汝等に最も喜びなる福音を聆かするなり、此は衆人の實に樂しみに思ふ所にして、是れ餘の事にあらず、今宵世を救ひ玉ふ聖主がダヴィドの郡なるベトレエムにて、郭外なる洞窟の厩に於て、馬飼ふ槽の其中に古き布の襁褓に裹みたる嬰兒の御坐するなり、是れ即ち古經中に傳ふる所の基督なり、疾く行きて求めよかしと語り畢りしと思ふ間に、此は如何に許多の天軍が波羅々潑と顯はれて頌むる聲、天上には光榮あれ、地上には善人に平安あれと唱ひける聲、耳に充滿たりしが、忽ち天上に歸り玉ひて、遂に見えずなりにけり、其の天軍と云へるは即ち天使等の群集なり、天使とは終始彼の至尊なる神に隨侍して、宛も軍隊の如く許多の魔鬼に對して戰ひを爲し居るものなり、故に往々天使等の群集を指して天軍と云ふ、然れども此時天軍の遣はされたるは天救世主の此世に降臨せしめたるが故、之を讃頌せんが爲め、又其救主たるの徵證を人類に知らしめんが爲めなり、此時牧人等は互に喜びつゝ今天使が告げたる基督なる嬰兒を訪ひ奉るべしと、踴躍して先きを爭ひつゝ趨り出で、彼の洞窟の厩に赴きけるに、果して天使の言葉に違はず、古布の襁褓に裹みたる嬰兒を見たり、嬰兒は如何程冬の寒さを凌ぎたるや、言語に盡し難し、又布を以て裹まれ、馬槽に置かれ、冷風に觸れ、寒氣に感じて苦しみたる狀寔に憫然たり、特に軟柔なる手足凍凝し、厩の四竅より風雪吹き入れば、マリア、ヨセフは之を懷抱して爛むれども、固より向寒の時なれば、充分に爛むる能はず、故に凜烈の患を免れんが爲め、いぶく牛驢犢馬の溫熱を顯して、聖身を煖めけるに、冬寒に感じ、哭聲を發せり、マリアは常に極貧なれども、其夜の分娩に當りては毫末も汚穢なく、光耀十倍して、益々其の本質の美を顯せり、故に牧人等は恭しく兩手を合せ、瞻拜讃頌して更に止まざりき、斯て果てざれば各自勸喜に堪へ

嬰兒基督の狀態

ざる心よりして逸早く立歸り、其の見來たりしことどもを諸方に傳ひて語りけるにぞ、聽く人僉な牧人等の朴素篤信にして、其の記恩の厚きに感せざるはなかりけり、又牧人が天軍の頌聲を聆きたる所に、久しきのち人ありて一の聖堂を建立せりと云ふ、然れども其の聖堂は今はなし、其地より程近き所即ちベトレエムに行くべき道の左りに小さき里あり、世の人々之れを呼びて牧人邑と云ふ、即ち彼の牧人等の故郷なりしと言傳へり、蓋ユデア國にては雨降る事甚だ罕なるを以て、夜間と雖群羊を野に放ち置き、牧人は隨所に携帶し得べき小屋の如き家に在りて、之を守りしとぞ、基督は何等の理由を以て先づ第一に牧人を招きしやと云ふに、彼等は微賤なれども樸實にして詐らず、謙遜にして傲らざるが爲にして、微なる牧人は實に自ら神の善僕に近き者なり、故に天使は先づ之に現はれて人々の未だ知らざりし聖き事をば、他の人々の先きに知らしめ、彼等をして直に往きて拜せしめたり、彼の牧人は眞に福なる者と云ふべし、且又上古蚤く救世主を人類に與へらるべき約束を受けたる聖祖アブラハム、イザークス、ヤコブスの如きも亦牧人の生活を送り居たりしと云へば、此時他の人々の首めに往て救世主

牧人邑

牧人を招きたる理由

を拜せし者も亦善良なる牧人なりしことは彼此胥合ふて、宛も天の攝理の致せる所にして、偶然にあらざるが如し、又此牧人等は確に昔者聖祖ヤコブスが其羊を牧し居たる所に居りしならん、且『汝等布にて裹みし嬰兒の馬槽に臥し居るを見るならん』と云へる如く、救世主が斯の如き卑賤なる有樣に生れしは、是れ深き思召ありて存するものなり、既に世上の太子宮殿に生れ、綾羅繡綉の襁褓を以て裹まれ、金銀寶玉の榻床に置かれ、凍ゆれば暖かにし、熱すれば涼ふし、且つ有司百官之に朝して太子の御誕生を賀し、近侍奉仕するを常とす、然るに今基督の誕生を見るに、天地の主、萬王の王たれども、厩を以て產舍とし、馬槽を以て榻床となし、手足凍ゆると雖、マリアとヨセフの外一人たりとも其側に侍して奉仕する者なし、先づ救世主は何等の故に斯く世に生れたるか、人々を救助せんが爲なり、人々を何より救助せん爲なるか、其の罪惡より救助せんが爲なり、而して人々の罪の重なる者は即ち傲慢、貪慾、肉慾の三つなり、此の三者は諸の罪の源にして一切の罪は大率ね此の三者の一よりして出づるものなり、即ち傲慢とは其力又は權を以て自ら傲り、他人を慢ることなり、貪慾とは榮譽又は財寶等を貪り求むること

基督誕生の理由

なり、又肉慾とは肉體の卑汚なる慾情なり、救世主の生るゝや、直に此の三者に就きて各其警き戒を顯はせり、即ち其の至尊の位を以て自ら能く謙り、人々の爲に此罪の避くべき事を示されたるなり、傲慢に反しては嬰兒の孱弱謙遜を顯はし、貪慾に反しては其の赫々たる榮光を卑賤なる有樣に隱し、又玉體を粗布にて裹めり、肉慾に反しては粗惡なる馬槽の上に置かれて涙を流せり、斯の如くにして降誕したるものなり。

割禮制定の理由

(2)基督の割禮

基督は誕生後八日目、即ち一月初一日を以て割禮と云ふ式を擧ぐ、そも基督はアブラハムの子孫なれど、身に寸毫の惡情、一點の私慾もなければ、割禮を受くべき者にあらざれども、一たび世に降誕したる上は、古敎中の規則なれば、人々の務め守るべき模範を示さんが爲に、常人の如く其式を受けて以て、私慾を絕ち、只管神に奉事するの敬意を表せり、抑々此の割禮は甚だ舊き禮にして、今日と雖尙ユデア人及びアラビア人の中に之を固守し居れり、案ずるに此式は昔時神とアブラハムとの契約の徵(しるし)として定められたるものなり、舊約書に曰く、アブラハム九十九歲の時神之に現れて宣はく、我れは全能の主なり、汝我が前に歩みて完全(まった)かれよ、我れ我が契約を我と汝との間に立てん、而して汝の子孫を大に殖さん、汝名をアブラムと呼ぶべからず、今後は汝名をばアブラハムと呼ぶべし、そは我れ汝を數衆の國民の父と爲すべければなり、然らば汝と汝の後ちの世々の子孫は男子なれば、皆我が契約を守り、其の陽部の皮を割るべし、是れ即ち我と汝等の中の契約の徵なり云々と、故に其の子孫にして男子たる者は咸誕生より八日を經過して、此の割禮を受領して後、其の子に名を命じたり、神は何の爲に此徵をばアブラハム及び其の子孫に定めたるやと云ふに、此徵を以て天より特別に選ばれたる者なるを記臆し、神に對して善良忠實ならしめんが爲なり、尙又其の眞の神を知れるアブラハムの一族及び子孫をして、迷信の人々と區別して混淆せざらしめんが爲なり、其後救世主の世に至る迄も尙此禮を遵守したる事、宛も今日の洗禮に於けると同樣なり、故に舊約の人々は二類に別れたり、即ち一は割禮を領けたる者、一は之を領けざる者是なり、此は尙救世主の時の人々が二類に別れて、一は洗禮を領けたる者、一は否らざる者の如し、併し此割禮は洗禮と同樣に原罪自罪

割禮と洗禮との異同

の赦免を得せしめたるものにあらず、何となれば割禮なるものは、元と人々をして其罪の赦免を得せしむるが爲め定められたるものにあらざればなり、尙又洗禮の如き聖き秘蹟にあらざるが爲めなり、されど人々割禮を受くる時は必ず一の神を信じ、一の救世主を信ずる誓約を爲せしに因り、割禮自らにあらずして、其割禮を徴と爲せる眞正の信仰は、能く人々をして其罪の赦免を得せしめたり、然れども小兒生れて僅か八日の後之を受くるに、自ら右の信仰を有する事能はざるが故、其の父母の信仰を以て之が誓約を爲し、能く原罪の赦免を得たるなり、されば割禮は宛も罪を減じ、其赦に與からしむる徴なり、蓋し割禮は人の生命を傳へ、又其の生命と共に原罪の結果なりと云ふ種々の邪慾を傳ふる所の肉身を施すものなればなり、而して之を其肉に施すと共に、之を其心にも施して以て、原罪の結果なる種々の惡情就中淫猥なる慾情等を其心より取り除く事を示すものなり、之に由りて使徒パウルスは嘗て左の如く曰ひし事あり、明かにユデア人たるも、實のユデア人に非ず、明かに身に割禮あるも、實の割禮に非ず、反て隱かにユデア人たる者は、實のユデア人なり、又割禮は心魂にありて、儀禮に非ず、心の割禮は眞なり、其譽は人に由らず、神に由れりと、此言に由りて之を觀れば割禮は之を其肉に施すと雖、畢竟之を其心に施して以て、神の尊前に清き者と爲さしむるの徴に過ぎざるを知るべし、救世主基督は何故に割禮を受けたるかと云ふに、基督は系統上アブラハムの子孫なり、其の子孫と同樣に此禮を受くべき故なり、然れども基督は常人にあらざれば、之を受くべき者にあらずと雖、世の人々に總て天より定めらるゝ規定を守るべきことを知らしめんが爲なり、又神はアブラハムに約束して救世主果して汝の子孫より出づべしと宣ひしを以て、此禮を其の子孫と同樣に受けたれども、其心には惡情邪慾等を有せず、故に之を受けたる所以は、全く人々の儀表の爲なりき、即ち基督の此世に降誕したる所以は、罪惡を贖ひて其赦を與へんが爲にして、人々に代りて其身に割禮を受け、以て愛憐の情を示したるものなり、蓋し割禮は肉身に多少痛苦を感せしむるものなれば、又之を以て罪を贖ひ、惡を滅すとも得べし、併し救世主の受けたる割禮は往昔の割禮に異り、內外の惡情を剪滅するに在りたり、後者の割禮は唯だ一時少しばかりの皮肉を截るの禮に過ぎざりしが、前者の割禮は全身の惡根を斷つの禮なりき、夫れ人の

基督受割の理由